



〈訳注〉 『宋書』 樂志二訳注稿(五)

狩野, 雄 ; 佐藤, 大志 ; 佐竹, 保子 ; 釜谷, 武志 ; 柳川, 順子 ; 林, 香奈

(Citation)

未名, 42:65-183

(Issue Date)

2024-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100504952>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100504952>



〔訳注〕

『宋書』樂志二訳注稿（五）

狩野 雄・佐藤大志・佐竹保子
釜谷武志・柳川順子・林 香奈

宋四箱樂歌五篇 王韶之造

宋の四箱樂歌五篇 王韶之造る

於鑠我皇^③ 禮仁包元^④

於鑠^{あふ}たるかな我が皇 禮仁にして元を包む

齊明日月^⑤ 比量乾坤^⑥

明を日月に齊しくし 量を乾坤に比ぶ

陶甄百王^⑦ 稽則黃軒^⑧

百王を陶甄し 黃軒に稽則す

訐謏定命^⑨ 辰告四蕃^⑩

謏^{はかりごと}を訐^{おほ}いにして命を定め 辰^{とき}に四蕃に告ぐ

宋四箱樂歌五篇 王韶之の作

ああ、素晴らしきかなわが主君、礼節と仁愛とを具えて根元の道を包含する。

明るさは日月と等しく、度量は天地に並ぶ。

多くの王を治め導き、黄帝軒轅氏（の功業）を考えて模範とする。

思慮を大いにして命令を定め、よろしき時に四方の藩王に告げる。

○押韻 「元・軒・蕃」は上平22「元」、「坤」は上平23「魂」。

①四箱樂歌 「四箱」は朝会などで樂を奏する場所。四箱。『宋

書』礼志二に「謁者引護當拜者入就拜位。四箱樂作。」「宋書」

樂志一に「太元中、破符堅、又獲樂工楊蜀等、閑練舊樂、於

是四箱金石始備焉。」「元会四箱（四箱）樂については、『南齊

書』樂志に「元會大饗四箱樂歌辭、晉泰始五年太僕傳玄撰。

正旦大會行禮歌詩四章、壽酒詩一章、食舉東西廂樂十三章、

黃門郎張華作。上壽食舉行禮詩十八章、中書監荀勗・侍郎成

公綏、言數各異。宋黃門郎王韶之造肆夏四章、行禮一章、上

壽一章、登歌三章、食舉十章、前後舞歌一章。齊微改革、多

仍舊辭。其前後舞二章新改。其臨軒樂、亦奏肆夏於鑠四章。』

②王韶之 「宋書」樂志二・「宋宗廟登歌八篇」に既出。三八〇

一四三五。宋の廟歌辭を作ったことで知られる。『宋書』王

韶之伝および樂志、前注『南齊書』樂志も参照。

③於鑠我皇 「於鑠」は贊美を表す感歎の言葉。『毛詩』周頌・

酌に「於鑠王師、遵養時晦」、毛伝に「鑠、美。遵、率。養、

取。晦、昧也」、鄭箋に「於美乎文王之用師、率殷之叛國以事

紂、養是闇昧之君、以老其惡。」「我皇」はわれらが主君。

④禮仁包元 礼と仁とを兼ね備えて、根源の道を包含する。

『春秋繁露』重政に「是以春秋變一謂之元、元猶原也、其義以

隨天地終始也。」「後漢書」梁統列伝に見える上疏文に「伏惟

陛下包元履德、權時撥亂、功踰文武、德侔高皇、誠不宜因循

季末衰微之軌。』

⑤齊明日月 明るさが日月に等しいこと。後の用例に『陳書』

後主・陳叔宝紀に「遐觀列辟、纂武嗣興、其始也皆欲齊明日

月、合德天地、高視五帝、俯協三王。』

⑥比量乾坤 度量が天地に等しいこと。「比」は等しい。「乾

坤」は天地。『周易』説卦に「乾爲天。……坤爲地。』

⑦陶甄百王 「陶」「甄」いずれも器をつくること。そこから

聖王が天下を治めることに喩える。揚雄『法言』先知に「甄

陶天下者、其在和平。剛則甄、柔則坏。」「宋書」樂志二・張

華「晋正德大豫二舞歌二篇・正德舞歌詩」に「祚命于晉、世

有哲王。弘濟區夏、甄陶萬方。」「百王」は多くの王。『漢書』

董仲舒伝に「蓋聞五帝三王之道、改制作樂而天下洽和、百王

同之。』

⑧稽則黃軒 「稽則」は考えて手本として従うこと。『周易』

繫辭伝下に「於稽其類、其衰世之意邪」、正義に「稽、考也。」

『周易』繫辭伝上に「是故天生神物、聖人則之。天地變化、聖

人效之。」「稽則」の用例としては、『三國志』諸葛恪伝に「臨

淮臧均表乞收葬恪曰、『……願聖朝稽則乾坤、怒不極旬、使

其鄉邑若故吏民、收以士伍之服、惠以三寸之棺。」「黃軒」は

黃帝軒轅氏。張衡「東京賦」に「登封降禪、則齊德乎黃軒。」

『晉書』景帝紀に「仰觀黃軒五代之主、莫不有所稟則。」

⑨討讞定命 思慮を大いにして、命令を定める。『毛詩』大雅・

抑に「討讞定命、遠猶辰告」、毛伝に「討、大。謨、謀。猶、

道。辰、時也」、鄭箋に「猶、圖也。大謀定命、謂正月始和、

布政于邦國都鄙也。爲天下遠圖庶事、而以歲時告施之。」

⑩辰告四蕃 「辰告」はふさわしい時を以て告げること。前注

参照。「四蕃」は四方の藩国。『毛詩』大雅・崧高に「四國于

蕃、四方于宣」、鄭箋に「四國有難、則往扞禦之、爲之蕃屏。

四方恩澤不至、則往宣暢之。」

將將蕃后^① 翼翼羣僚^②

盛服待晨^③ 明發來朝^④

饗以八珍^⑤ 樂以九韶^⑥

仰祇天顏^⑦ 厥猷孔昭^⑧

將將たる蕃后 翼翼たる羣僚

盛服して晨を待ち 明發に來朝す

饗には八珍を以てし 樂には九韶を以てす

仰ぎて天顏を祇う^{うやま} 厥の猷孔だ昭らかなり^{そ みちはなほ}

厳正な藩国の王、恭慎な百官。

きちんと衣冠を整えて朝を待ち、夜明けに來朝する。

もてなすには八種類の料理八珍が備えられ、音楽には舜の樂曲九韶が演奏される。

仰いでご尊顏を敬う、そのご政道ははなだ明らかである。

○押韻 「僚」は下平3「蕭」、「朝・韶・昭」は下平4「宵」。

①將將蕃后 「將將」は嚴正なさま。『毛詩』大雅・緜に「廼立
皐門、皐門有伋。廼立應門、應門將將」、毛伝に「王之郭門曰
皐門。伋、高貌。王之正門曰應門。將將、嚴正也。美大王作
郭門以致皐門、作正門以致應門焉。」「蕃后」は藩王、藩国の
王。前漢・羊勝「屏風賦」に「蕃后宜之、壽考無疆。」「左伝」
定公四年に「子魚曰、「以先王觀之、則尚德也。昔武王克商、
成王定之、選建明德、以藩屏周。故周公相王室、以尹天下、
於周爲睦。』」

②翼翼羣僚 「翼翼」は敬い、慎むさま。『毛詩』大雅・文王に
「世之不顯、厥猶翼翼。思皇多士、生此王國。王國克生、維
周之楨」、毛伝に「翼翼、恭敬。思、辭也。皇、天。楨、幹
也。」「羣僚」は百官。『漢書』王莽伝上に「羣僚衆位、而公宰
之。」

③盛服待晨 「盛服」は衣服を整えて嚴正なようすでいること。
『礼記』中庸に「齊明盛服、非禮不動、所以脩身也」、正義に
「齊明盛服者、齊謂整齊、明謂嚴明、盛服謂正其衣冠、是脩
身之體也。」「晨」は朝。

④明發來朝 「明發」は夕方から夜明けまでの時間。ここでは
黎明、夜明けを意味する。『毛詩』小雅・小宛に「明發不寐、
有懷二人」、毛伝に「明發、發夕至明」、正義に「夜地而闇、
至旦而明、明地開發、故謂之明發也。人之道、夜則當寐。言
明發以來不寐、以此故知從夕至旦常不寐也。」

⑤饗以八珍 「八珍」は古代の八種類の珍味。『周礼』天官・膳
夫に「凡王之饋、食用六穀、膳用六牲、飲用六清、羞用百有
二十品、珍用八物、醬用百有二十壺」、鄭注に「珍謂淳熬・淳
母・炮豚・炮牂・擣珍・漬・熬・肝膾也。」

⑥樂以九韶 「九韶」は舜の時代の楽曲名。『尚書』益稷に「簫
韶九成、鳳皇來儀」、偽孔伝に「韶、舜樂名。」「周礼」春官・
大司樂に「凡樂、黃鍾爲宮、大呂爲角、大族爲徵、應鍾爲羽、
路鼓路鼗、陰竹之管、龍門之琴瑟、九德之歌、九磬之舞、於
宗廟之中奏之、若樂九變、則人鬼可得而禮矣。」「九韶」の用
例としては、『莊子』至樂に「昔者海鳥止於魯郊、魯侯御而觴
之于廟、奏九韶以爲樂、具太牢以爲膳」、成玄英の疏に「九
韶、舜樂名也。」

⑦仰祗天顏 「祗」は敬う。『毛詩』商頌・長發に「昭假遲遲、

上帝是祗」、鄭箋に「假、暇。祗、敬。」「天顏」は天子のかんばせ。後漢・趙曄『吳越春秋』勾踐婦国外伝・勾踐七年に「采葛之婦、傷越王用心之苦、乃作苦之詩、曰、『……羣臣拜舞天顏舒、我王何憂能不移。』」

⑧厥猷孔昭 「厥猷」は踏むべき先王の道。『尚書』微子之命

に「爾惟踐修厥猷、舊有令聞」、偽孔伝に「汝微子、言能踐湯德、久有善譽、昭聞遠近。」「毛詩』小雅・巧言に「秩秩大猷、聖人莫之」、鄭箋に「猷、道也。大道、治國之禮法。」「孔昭」はきわめて明るいこと。『毛詩』小雅・鹿鳴に「我有嘉賓、德音孔昭」、鄭箋に「德音、先王道德之教也。孔、甚。昭、明也。……飲酒之禮、於旅也語。嘉賓之語先王德教甚明。」

法章既設 初筵長舒^②

法章既に設けられ 初筵長く舒ぶ

濟濟列辟^③ 端委皇除^④

濟濟たる列辟 皇除に端委す

飲和無盈^⑤ 威儀有餘^⑥

飲和して盈るる無く 威儀餘り有り

溫恭在位^⑦ 敬終如初^⑧

溫恭として位に在り 終りを敬すること初めの如くす

制度・典章はすでに設けられ、はじめて席に着いた宴会は和やかでのびやか。

多く盛んな公卿諸官は、皇帝の宮殿の階で衣冠を正す。

飲んで和やかに過ごしても度を過ごすことはなく、有り余るほどの威儀がある。

穏やかで慎み深く席に在り、宴会の終わりにには初めに恭敬であったようにする。

○押韻 「舒・除・餘・初」は上平9「魚」。

①法章既設 「法章」は典章制度。「周礼」天官・大宰に「以八

灋治官府」、經典釈文に「灋、古法字。」「孟子」離婁上に「遵先王之法而過者、未之有也。」「毛詩」大雅・仮楽に「不愆不忘、率由舊章」、鄭箋に「愆、過。率、循也。成王之令德、不過誤、不遺失、循用舊典之文章、謂周公之禮法。」

②初筵長舒 この歌辭は『毛詩』小雅・賓之初筵に「賓之初筵、溫溫其恭。其未醉止、威儀反反。曰既醉止、威儀幡幡」、毛伝に「反反、言重慎也。幡幡、失威儀也」とあるのなどを踏まえつつ、この宴がそのようにはならないことを詠う。『宋

書』樂志二・荀勗「晋四箱樂歌十七篇・食举樂東西箱歌十二篇」に「賓之初筵一章」。「長舒」は長くゆったりしていること。『毛詩』召南・野有死麕に「舒而脱脱兮、無感我帨兮、無使彪也吠」、毛伝に「舒、徐也。脱脱、舒遲也。」

③濟濟列辟 「濟濟」は多く盛んなさま。『尚書』大禹謨に「濟濟有衆、咸聽朕命」、偽孔伝に「濟濟、衆盛之貌。」「宋書』樂志二・傅玄「晋宗廟歌十一篇・祠豫章府君登歌」に「濟濟辟公、相予烝嘗。」「列辟」は公卿諸官。班固「典引」に「盛哉、皇家帝世。德臣列辟、功君百王」云々とあり、『後漢書』班彪

列伝・子固の李賢注は「皇家帝代謂漢家歷代也。列辟謂古之帝王也」と古の帝王という意味としているが、ここでは「文選」李周翰注の「德臣謂有德之臣也。列辟謂百官也」を採った。『宋書』樂志二・荀勗「食举樂東西箱歌十二篇」「降化」を参照。

④端委皇除 「端委」は古代の礼服。『左伝』昭公元年に「吾與子弁冕端委、以治民臨諸侯、禹之力也」、杜預の注に「端委、禮衣」、正義に服虔の語を引いて「禮衣端正無殺、故曰端。文德之衣尚褒長、故曰委。」「皇除」は皇帝の宮殿の階。『漢

書』王莽伝下に「三日庚戌、晨旦明、羣臣扶掖莽、自前殿南下椒除」、顔師古注に「除、殿陛之道也。椒、取芬香之名也。」「飲和無盈」「飲和」は飲酒して和むこと。あるいは、和氣を飲む（飲ませる）こと。『莊子』則陽に「其於物也、與之爲娛矣、其於人也、樂物之通而保己焉。故或不言而飲人以和、與人竝立而使人化」、郭象注に「人各自得、斯飲和矣、豈待言哉。」「沈約「侍宴謝朓宅餞東歸應制詩」に「飲和陪下席、論道光上筵。」「無盈」は溢れ出すことがない。『周易』坎卦・彖伝に「水流而不盈、行險而不失其信」、王注に「險陷之極、故水

流而不能盈也。處至險而不失剛中、行險而不失其信者、習坎之謂也。」

⑥威儀有餘 「威儀」は祭祀や儀式の際のふるまい・礼儀。「礼記」中庸に「優優大哉、禮儀三百、威儀三千、待其人然後行」、正義に「威儀三千者、即儀禮中行事之威儀。」注②前掲『毛詩』小雅・賓之初筵も参照。

⑦溫恭在位 「溫恭」は溫和でうやうやしいこと。『尚書』舜典に「濬哲文明、溫恭允塞。玄德升聞、乃命以位」、偽孔伝に「濬、深。哲、智也。舜有深智文明溫恭之德、信允塞上下」、正義に「此舜性有深沈智慧、文章明鑒、溫和之色、恭遜之容。

由名聞遠達、信能充實上下、潛行道德聞天朝、堯乃徵用、命之以位而試之。」「在位」は儀礼や宴会などで定められた位置にいること。『宋書』礼志一に「尚書令以下應階者以次入。治禮引大鴻臚入、陳九賓。……皇帝服袞冕之服、升太極殿、臨軒南面。謁者前北面一拜、跪奏、『大鴻臚臣某稽首言、羣臣就位。謹具。』侍中稱制曰、『可。』謁者贊拜、在位皆再拜。……謁者引護當使者當拜者入就拜位。四廂樂作。將拜、樂止。禮畢出。官有其注。」

⑧敬終如初 「敬終」は終わりにうやうやしく振る舞うこと。『礼記』表記に「子曰、『事君慎始而敬終。』」

九功既歌^① 六代惟時^② 九功既に歌われ 六代惟れ時^{ただ}
被德在樂^③ 宣道以詩^④ 徳を被るは樂に在り 道を宣ぶるに詩を以てす
穆矣大和^⑤ 品物咸熙^⑥ 穆たるかな大和 品物咸な熙^{ひろ}まる
慶積自遠^⑦ 告成在茲^⑧ 慶積自ずから遠^{ひさ}しく 告成茲^{こゝ}に在り
右肆夏樂歌^⑨ 右、肆夏樂歌の四章なり。

客人、於四箱振作於鑠曲。皇帝當陽^⑩ 四箱振作將將曲。皇帝入變服、四箱振作於鑠・將將二曲。又黃鍾・太簇二箱作法章・九功二曲。

客入るに、四箱に於鑠の曲を振作す。皇帝陽に當たるに、四箱將將の曲を振作す。皇帝入りて服を變ずるに、四箱於鑠・將將の二曲を振作す。又た黃鍾・太簇の二箱には法章・九功の二曲を作す。

九つのはたらきはすでに音楽に乗せて歌われ、六つの時代には正しいものがあつた。

徳をこうむるのは音楽によつてであり、道をのべ広めるのは詩によつてである。

穏やかな太平の御代に、生きとし生けるものはみな生命力に満ちている。

長きにわたつて幸いが積み重なつてきて、いまここに功業の成就が告げられる。

右は、肆夏楽歌の四章である。

賓客が入つてくると、四箱（四つのオーケストラ）で「於鑠」の曲を演奏する。皇帝が南面すると、四箱は「將將」の曲を演奏する。皇帝が入つて服を着替えると、四箱は「於鑠」と「將將」の二曲を演奏する。また（皇帝が入つて服を着替えると）黃鍾と太簇の二箱では「法章」と「九功」の二曲を演奏する。

○押韻 「時・詩・熙・茲」は上平7「之」。

①九功既歌 「九功」は九つのはたらき。「六府三事」のこと。

『尚書』大禹謨に「禹曰、『於帝念哉。徳惟善政、政在養民（歎而言念、重其言。爲政以德、則民懷之）。水・火・金・木・土・穀惟修（言養民之本在先修六府）、正徳・利用・厚生惟和（正徳以率下、利用以阜財、厚生以養民、三者和所謂善政）、

九功惟敘、九敘惟歌（言六府三事之功有次敘、皆可歌樂、乃徳政之致）。』左伝 文公七年に「九功之徳皆可歌也、謂之九歌。六府・三事、謂之九功。水・火・金・木・土・穀、謂之六府。正徳・利用・厚生、謂之三事。』宋書 樂志二・曹毗「四時祠祀歌」に「禮有儀、樂有式。詠九功、永無極」、張華

「食季東西箱樂詩十一章・其四」に「舞盛德、歌九功」と既出。

②六代惟時 「六代」は黃帝・堯・舜・禹・殷・周の六つの時代。音楽に関わつては、『宋書』樂志一に「易曰、『先王作樂崇德、殷薦之上帝、以配祖考』、自黃帝至于三代、名稱不同。……周存六代之樂、至秦唯餘韶・武而已。」樂志二に傳玄「羽鐸舞歌」に「豈唯簫韶、六代具舉。」「惟時」は『尚書』皋陶謨に「百僚師師、百工惟時、撫于五辰、庶績其凝」、偽孔伝に「僚工皆官也。師師、相師法。百官皆是、言政無非。凝、成也。言百官皆撫順五行之時、衆功皆成。」

③被德在樂 「被德」は德を音楽にのせる。『周易』豫卦・象伝に「雷出地奮、豫。先王以作樂崇德、殷薦之上帝、以配祖考。」「礼記」礼運に「天子以德爲車、以樂爲御、諸侯以禮相與、大夫以法相序、士以信相考、百姓以睦相守、天下之肥也。」また、『礼記』樂記に「故酒食者所以合歡也。樂者所以象德也。禮者所以綴淫也。」「德者性之端也。樂者德之華也。」

④宣道以詩 「宣道」は道を述べ、拡げる。『孟子』公孫丑上に「孟子曰、『仁則榮、不仁則辱。……詩云、『道天之未陰雨、徼

彼桑土、綢繆牖戶。今此下民、或敢侮予。』孔子曰、『爲此詩者、其知道乎。能治其國家、誰敢侮之。』今國家閒暇、及是時般樂怠敖、是自求禍也。禍福無不自己求之者。詩云、『永言配命、自求多福。』」用例としては、『晋書』束皙伝に「玄居釈」を作ったことが記され、そのなかに「穆契奮庸以宣道、巢由洗耳以避禪、同垂不朽之稱、俱入賢者之流。」

⑤穆矣大和 「穆」は穏やかでやわらぐさま。『毛詩』大雅・烝民に「吉甫作誦、穆如清風」、鄭箋に「穆、和也。」「大和」は、天地の間の気が調和すること。太和。『周易』乾に「保合大和、乃利貞。」また、太平のこと。『文選』卷三四・曹植「七啓」に「吾子爲太和之民、不欲仕陶唐之世乎。」

⑥品物咸熙 「品物」は万物。『周易』乾卦・象伝に「雲行雨施、品物流形」、正義に「雲行雨施、品物流形者、此二句釋亨之德也。言乾能用天之德、使雲氣流行、雨澤施布。故品類之物、流布成形、各得亨通、无所壅蔽、是其亨也。」後漢・蔡邕「太尉汝南李公碑」に「惟清惟敏、品物以熙。」「咸熙」はみな興り広まる。『尚書』堯典に「允釐百工、庶績咸熙」、偽孔伝に「允、信。釐、治。工、官。績、功。咸、皆。熙、廣也。」

『宋書』樂志二・傳玄「晋郊祀歌五篇・饗天地五郊歌」に「皇極斯建、庶績咸熙。」張華「雅樂正旦大会行礼詩四章・其三」に「大亨以正、庶績咸熙。」と既出。

⑦慶積自遠 「慶積」はさいわいが積み重なること。『周易』

履卦・上九の象伝に「元吉在上、大有慶也」、正義に「大有慶者、解元吉在上之義。既以元吉而在上九、是大有福慶也。以有福慶、故在上元吉也。」また、『周易』坤卦・文言伝に「積善之家、必有餘慶。積不善之家、必有餘殃。」「自遠」の「遠」は時間が長いことをいう。『呂氏春秋』大楽に「音樂之所由來者遠矣」、高誘注に「遠、久。」

⑧告成在茲 「告成」は完成した功業を報告すること。『毛詩』大雅・江汉に「江汉湯湯、武夫洸洸、經營四方、告成于王」、鄭箋に「召公既受命、伐淮夷服之。復經營四方之叛國、從而伐之、克勝、則使傳遽告功於王。」また、周頌・酌の小序に「酌、告成大武也。言能酌先祖之道、以養天下也。」

⑨肆夏樂歌 「肆夏」は古代の樂章名。『周礼』春官・大司楽に「王出入則令奏王夏、戸出入則令奏肆夏、牲出入則令奏昭夏」、鄭注に「三夏、皆樂章名。」儀礼の場面と演奏される樂章の

關係については、『樂府詩集』卷一四・宋四廂樂歌の題解に引かれる「古今樂錄」に「按周禮云、『王出入奏王夏、賓出入奏肆夏。』肆夏本施之於賓、帝王出入則不應奏肆夏也。」と見える。

⑩當陽 「當陽」は皇帝が南面すること。『左伝』文公四年に「昔諸侯朝正於王、王宴樂之。於是乎賦湛露、則天子當陽、諸侯用命也」、杜預の注に「言露見日而乾、猶諸侯稟天子命而行」、正義に「陽謂日也。言天子當日、諸侯當露也。」また、『春秋繁露』天辨在人に「不當陽者、臣子是也。當陽者、君父是也。故人主南面以陽爲位也。」

⑪變服 「變服」は服を変えること。『礼記』雜記下に「子游曰、『既祥、雖不當縞者、必縞、然後反服』」、鄭注に「謂有以喪事贈賵來者、雖不及時、猶變服、服祥祭之服以受之、重其禮也。……反服、反素縞麻衣也。」ここでは皇帝が場面に合わせて衣服を改めること。『南齊書』樂志にもこの「肆夏樂歌四章」が「肆夏樂歌辭」として載せられて、「右一曲、客入四廂奏」「右一曲、皇帝當陽、四廂奏。皇帝入變服、四廂并奏前二曲」「右二曲、皇帝入變服、黃鍾太簇二廂奏」と場面ごと

に演奏される曲の説明が付されている。

⑫黄鍾・太簇 「黄鍾」は十二律の第一律。「太簇」は十二律の第三律（陽律の第二律）。太簇。『周礼』春官・大司楽に「乃分樂而序之、以祭以享以祀。乃奏黄鍾、歌大呂、舞雲門、以祀天神（以黄鍾之鍾大呂之聲爲均者、黄鍾陽聲之首、大呂爲

之合奏之、以祀天神尊之也。天神謂五帝及日月星辰也。王者又各以夏正月祀其所受命之帝於南郊尊之也。乃奏太簇、歌應鍾、舞咸池、以祭地示（大簇、陽聲第二、應鍾爲之合。咸池、大咸也。地祇所祭於北郊、謂神州之神及社稷）。」

（狩野 雄）

大哉皇宋^① 長發其祥^②
纂系在漢^③ 統源伊唐^④
德之克明^⑤ 休有烈光^⑥
配天作極^⑦ 辰居四方^⑧

大なるかな 皇宋 長く其の祥を發す
系を漢に纂ぎ 源を伊れ唐に統む^は
德之れ克く明らかに 休として烈光有り
天に配して極を作し 四方に辰居す

偉大なることよ、大いなる宋国は。その祥福は遙か昔に現れていた。

血統を漢代につなぎ、淵源を彼の唐堯に始める。

徳は天下を照らすに十分で、盛大に輝ける光有り。

先祖を天とともに祭り（天子として）中正の道を為し、北極星のごとく天下の中心に居る。

○押韻 「祥・方」は下平10「陽」、「唐・光」は下平11「唐」。

①大哉皇宋 「周易」乾卦に「彖曰、大哉乾元、萬物資始。乃

統天、雲行雨施、品物流形」、また『論語』泰伯に「子曰、大哉、堯之爲君也。巍巍乎、唯天爲大、唯堯則之」とある。「皇宋」は大いなる宋国。「皇」は美称。班固「西都賦」(『文選』卷二)「有西都賓問於東都主人曰、『蓋聞皇漢之初經營也、嘗有意乎都河洛矣。』」とある。

②長發其祥 遙か昔の先祖の時代に祥福が既に現れていたことを言う。『毛詩』商頌・長發「濬哲維商、長發其祥」に拠る句。鄭箋に「長猶久也。……久發見其禎祥矣。乃用洪水禹敷下土、正四方、定諸夏、廣大其竟界之時、始有王天下之萌兆、歷虞夏之世。故爲久也。」

③纂系在漢 「纂系」は血統を受け継ぐ。『漢書』叙伝下に「皇矣漢祖、纂堯之緒、實天生德、聰明神武」とある。また後代の例だが、『史記』陳杞世家「索隱述贊」に「舜・禹餘烈、陳・杞是繼。嫡滿受封、東樓纂系」とあり、周武王の殷討伐後に、禹の子孫とされる東樓公が杞国に封じられたことを「纂系」という。ここでは劉宋王朝の始祖が古い血筋を受け継いで漢に起こることをいう。『宋書』武帝紀上に「高祖武皇帝諱

裕。字德興、小名寄奴、彭城縣綏輿里人、漢高帝弟楚元王交之後也。」とある。「在」は「於」に同じ。『毛詩』小雅・魚藻に「魚在在藻、有頌其首」とあり、鄭箋に「明王之時、魚何所處乎、處於藻。既得其性則肥充、其首頌然」とある。

④統源伊唐 「統源」は王朝の血統が発する淵源を言う。『宋書』徐湛之伝に「凡諸詭妄、還自違伐、多舉事端、不究源統、齋傳之信、無有主名、所徵之人、又已死沒、首尾乖互、自爲矛盾」とある。「伊唐」は堯。漢王朝の淵源が堯にあることから、劉宋王朝の淵源も堯にあると言う。顏延之「宋郊祀歌二首」其一(『文選』卷二七)に「黃威寶命、嚴恭帝祖。炳海表岱、系唐胄楚」、また班固「東都賦」(『文選』卷一)に「體元立制、繼天而作、系唐統、接漢緒。」

⑤德之克明 「克明」は徳が十分に明らかなこと。『毛詩』大雅・皇矣に「維此王季、帝度其心。貊其德音、其德克明、克明克類、克長克君」とあり、鄭箋に「德正應和曰貊。照臨四方曰明。」

⑥休有烈光 盛大に光り輝くことを言う。『毛詩』周頌・載見「儻革有鶉、休有烈光」に拠る句。毛伝に「儻革有鶉言有法

度也」、鄭箋に「諸侯始見君王謂見成王也。曰求其章也。求車服礼儀之文章制度也。交龍爲旂、幃革鸞首也。鵠金飾貌。休者休然盛壯。」

⑦配天作極 「配天」は、先祖を天とともに祭る。天子となることをいう。『尚書』君奭に「率惟茲有陳、保乂有殷。故殷禮陟配天、多歷年所」、偽孔伝に「言伊尹至甘盤、六臣佐其君、循惟此道、有陳列之功、以安治有殷。故殷禮能升配天、享國久長、多歷年所」。また荀勗「晋正德舞歌」に「萬邦洋洋、承我晉道。配天作享、元命有造」とある。『宋書』樂志

二詠注稿(三)「一六九頁の注⑤参照。『作極』は、中正の道をなす。『尚書』周書・洪範に「五、皇極。皇建其有極(大中之道、大立其有中。謂行九疇之義)。斂時五福、用敷錫厥庶

民(斂是五福之道、以爲教用布與衆民使慕之)。惟時厥庶民、于汝極、錫汝保極(君上有五福之教、衆民於君取中與君以安中之善。言從化)。凡厥庶民、無有淫朋、人無有比德。惟皇作極(民有安中之善、則無淫過朋黨之惡、比周之德、爲天下皆大爲中正)。」

⑧辰居四方 「辰居」は帝王の居る場所。『論語』爲政「爲政以德、譬如北辰居其所、而衆星共之」に基づく語。班固「典引」(『文選』卷四八)に「是以高光二聖、宸居其域」とある。謝莊「宋明堂歌・歌太祖文皇帝詞」に「辰居萬宇、綴流下國」と既出。『宋書』樂志二詠注稿(一)「一三〇頁の注③を参照。

皇矣我后^① 聖德通靈^② 皇なるかな 我が后 聖德 靈に通ず
有命自天^③ 誕授休禎^④ 命有り 天よりし 誕に休禎を授く
龍飛紫極^⑤ 造我宋京^⑥ 龍のごとく紫極に飛び 我が宋京を造す^な
光宅宇宙^⑦ 赫赫明明^⑧ 宇宙に光宅して 赫赫明明たり

右大會行禮歌二章 姑洗箱作 右は大會行禮歌二章 姑洗箱作す

大いなるかな、我が君、至上の徳は神靈に通じている。

天より命が下り、大いに吉祥を授けられる。

龍のごとく天子の宮殿に飛び、我が宋王朝を作られた。

徳は天下に広く満たされ、盛大にして明らかである。

右は大会行礼歌二章。姑洗箱が奏する。

○押韻 「靈」は下平15「青」、「禎」は下平14「清」、「京・明」下平12「庚」。

①皇矣我后 「皇矣」は『毛詩』大雅・皇矣に「皇矣上帝、臨

下有赫」とあり、毛伝に「皇大」。また傳玄「前所作天地郊明

堂歌五篇」其一に「皇矣有晉、時邁其徳。」『宋書』樂志二詠

注稿(一)九〇頁参照。

②聖德通靈 「聖徳」は皇帝の至上の徳。『毛詩』大雅・下武の

詩序に「下武、繼文也。武王有聖徳、復受天命、能昭先人之

功焉」とある。傳玄「晋宗廟歌十一篇・祠宣皇帝登歌」に「於

饗皇祖、聖徳欽明」とある。『宋書』樂志二詠注稿(二)九

三頁の注③参照。「通靈」は神靈に通じる。班固「幽通賦」

(『文選』卷一四)に「精通靈而感物兮、神動氣而入微」とあ

り、曹大家注に「言人參於天地、有生之最神靈也、誠能致其

精誠、則通於神靈、感物動氣而入微者矣。」

③有命自天 『毛詩』大雅・大明の「有命自天、命此文王」に

基づく句。その鄭箋に「天爲將命文王、君天下於周京之地」

とある。

④誕授休禎 『尚書』微子之命に「嗚呼、乃祖成湯、克齊聖廣

淵、皇天眷佑、誕受厥命」とあり、偽孔伝に「大天眷顧湯、

佑助之、大受其命、謂天命」とある。「休禎」は吉祥。『後漢

書』陳番伝に「如是天和於上、地洽於下、休禎符瑞、豈遠乎

哉」とある。また王韶之「宋宗廟登歌八篇・祠七廟享神登歌」

に「神之格思、介以休禎」と既出。『宋書』樂志二詠注稿(二)一

一五七頁の注⑧参照。

⑤龍飛紫極 「龍飛」は、『周易』乾・九五の卦辭に「飛龍在天、利見大人」とある。また魏明帝「甄皇后哀策文」(「三國志」魏書・文德郭皇后伝注)に「哀哀慈妣、興化閭房、龍飛紫極、作合聖皇、不虞中年、暴罹災殃」とある。「紫極」は天子の居所。潘岳「西征賦」(『文選』卷一〇)に「厭紫極之閑敞、甘微行以遊盤」とあり、李善注に「紫極、星名。王者爲宮以象之」とある。曹毗「晉江左宗廟歌十三篇・歌世祖武皇帝」に「應期登禪、龍飛紫庭」と類似の句が見える。「『宋書』樂志二詠注稿(二)」一一四頁の注⑤参照。

⑥造我宋京 『尚書』康誥に「惟乃丕顯考文王、克明德慎罰、不敢侮鰥寡。庸庸、祗祗、威威、顯民(恵恤窮民、不慢鰥夫寡婦。用可用、敬可敬、刑可刑、明此道以示民)。用肇造我區夏、越我一二邦以修」とあり、偽孔伝に「用此明德慎罰之道、始爲政於我區域諸夏、故於我一二邦皆以修治」とある。また『周易』乾・象伝に「或躍在淵、進无咎也。飛龍在天、大人造也」とあり、その疏に「正義曰、或躍在淵、進无咎者、此亦人事言之。進則跳躍在上、退在潛處在淵、猶聖人疑或、而在於貴位也。心所欲進、意在於公、非是爲私、故進无咎也。

飛龍在天、大人造者、此亦人事言之、飛龍在天、猶聖人人在王位、造爲也。唯大人能爲之而成就也。姚信・陸績之屬、皆以造爲造至之造。今案、象辭皆上下爲韻、則姚信之義、其讀非也」とあり、「造」は「爲」の意とするが、後漢末・三國期には「造」を「至」の意と解釈する説もあつたことを指摘する。もし「造」が「至」の意であれば、ここは龍の如き天子が宋の都に至つたことを言うこととなる。「宋京」は宋の都。王韶之「宋宗廟登歌八篇・祠高祖武皇帝登歌」に「受終改物、作我宋京」と類似句が見える。「『宋書』樂志二詠注稿(二)」一五五頁の注⑪参照。

⑦光宅宇宙 徳が天地に広く満ちることを言う。『尚書』堯典序に「昔在帝堯、聰明文思、光宅天下」とあり、偽孔伝に「言聖徳之遠著」、疏に「言光宅者、經傳云光充也」とある。また『尚書』堯典に「允恭克讓、光被四表、格于上下」とあり、偽孔伝に「允信、克能、光充、格至也。既有四徳、又信恭能讓、故其名聞、充溢四外、至于天地」とある。傳玄「晋四箱樂歌三首・食舉東西箱歌」に「虞虞作宗、光宅天下」と類似句が見える。「『宋書』樂志二詠注稿(三)」一一二頁の注②

参照。「宇宙」は天下全体をいう。『莊子』齊物論に「旁日月、挾宇宙」とあり、郭象注に「以死生爲晝夜、旁日月之喻也。

以萬物爲一體、挾宇宙之譬也」。また『淮南子』原道訓に「横四維而含陰陽、絃宇宙而章三光」、高誘注に「四方上下曰宇、古往今來曰宙、以喻天地。章明也。三光日月星」。曹毗「晋

江左宗廟歌十三篇・歌高祖宣皇帝」に「動格宇宙、化動八區」と既出。『宋書』樂志二詁注稿（二）一〇七頁の注⑨参照。

⑧赫赫明明 盛んで明らかなさま。『毛詩』大雅・常武に「赫赫明明、王命卿士」とあり、毛伝に「赫赫然盛也。明明然察也」とあり、鄭箋に「顯著乎昭察乎宣王之命」。

獻壽爵^① 慶聖皇

壽爵を獻じ 聖皇を慶す

靈祚窮二儀^② 休明等三光^③

靈祚二儀を窮め 休明三光に等し

右王公上壽歌一章 黃鍾箱作

右は王公上壽歌一章 黃鍾箱作す

寿を祝う酒を献上し、聖なる君をことほぐ。

よき幸いは天地にゆきわたり、徳の明らかなることは日月星と同じである。

右は王公上壽歌一章。黃鍾箱が奏す。

○押韻 「皇・光」は下平11「唐」。

①獻壽爵 長寿を祝う酒を献上する。潘岳「閑居賦」〔「文選」

卷一六〕に「稱萬壽以獻觴、咸一懼而一喜。壽觴舉、慈顔和」とある。

②靈祚窮二儀 「靈祚」はよき幸い。「靈」は靈妙な力の働き

を言う。傅玄「晋郊祀歌五篇・祠天地五郊迎送神歌」に「嘉樂殷薦、靈祚景祥」とある。『宋書』樂志二詁注稿（二）

八三頁の注⑧参照。また『宋書』廬陵孝獻王義真伝に「雖靈祚修長、聖躬弗永」、『宋書』索虜伝に「吳上表歸順、曰、自靈祚南遷、禍纏神土、京失統。」とある。「二儀」は天地。両儀に同じ。張協「七命」(『文選』卷三五)に「功與造化爭流、德與二儀比大。」とあり、李善注に引く敝遵『老子指帰』に「功與造化爭流、德與天地齊光。」

③休明等三光 「休明」は君主の徳が素晴らしく明らかであること。『左伝』宣公三年に「商紂暴虐、鼎遷于周。徳之休明、雖小重也」とある。また潘岳「西征賦」(『文選』卷一〇)に「當休明之盛世、託菲薄之陋質」とある。「三光」は日、月、星。『淮南子』原道訓に「横四維而含陰陽、紘宇宙而章三光」とあり、高誘注に「三光、日月星」。

明明大宋	緝熙皇道 ^①	明明たる大宋	緝熙なる皇道
則天垂化 ^②	光定天保 ^③	天に則り化を垂る	光に天保を定む
天保既定	肆觀萬方 ^④	天保既に定まり	肆に萬方を觀 ^み る
禮繁樂富	穆穆皇皇 ^⑤	禮繁しくして樂富み	穆穆皇皇たり

日の光のごとく明らかな大いなる宋国、光り輝ける大いなる道。

天の法にのっとつて教えを施し、大いに天の安んずるところを定めた。

天の安んずるところが定まったので、かくてあまねく全土の人々を見る。

儀礼は盛んで楽曲は豊か、威儀有りて盛大である。

○押韻 「道・保」上声32「皓」。「方・皇」下平11「唐」。

①明明大宋 緝熙皇道 『毛詩』小雅・小明に「明明上天、照

臨下土」とあり、鄭箋に「明明上天、喻王者當光明如日之中也。照臨下土、喻王者當察理天下之事」とある。「緝熙」はひかりかがやくさま。『毛詩』大雅・文王に「穆穆文王、於緝熙敬止。假哉天命、有商孫子（穆穆美也。緝熙光明也。假固也。箋云、穆穆乎文王、有天子之容。於美乎、又能敬其光明之德。堅固哉。天爲此命之、使臣有殷之子孫。）」とある。傅玄「晋郊祀歌五篇・饗天地五郊歌」に「於乎緝熙、肆用靖民」と既出。『宋書』樂志二詠注稿（二）八九頁の注④参照。

「皇道」は大いなる道。班固「西都賦」（『文選』卷二）に「有西都賓問於東都主人曰、『蓋聞皇漢之初經營也、嘗有意乎都河洛矣。輟而弗康、寔用西遷、作我上都。主人聞其故而觀其制乎。』主人曰、『未也。願賓摠懷舊之蓄念、發思古之幽情。博我以皇道、弘我以漢京』」とある。また張協「七命」（『文選』卷三五）に「大夫曰、『蓋有晉之融皇風也、金華啓徵、大人有作。繼明代照、配天光宅。其基德也、隆於姬公之處岐。其垂仁也、富乎有殷之在亳。南箕之風、不能暢其化。離畢之雲、無以豐其澤。皇道煥炳、帝載緝熙』」とある。張華「晋止

德大予二舞歌二篇・正德舞歌詩」に「皇道惟清、禮樂斯經」と既出。『宋書』樂志二詠注稿（四）一〇一頁の注⑬参照。

②則天垂化 「則天」は天の法にのっとる。『論語』泰伯に「子

曰大哉堯之爲君也。巍巍乎唯天爲大、唯堯則之」とあり、孔安国注に「則法也。美堯能法天而行化」とある。また荀勗「晋四箱樂歌・食舉樂東西箱歌十二篇・猗歟」に「則天作孚、大哉爲君」とある。『宋書』樂志二詠注稿（三）一四五頁の注③参照。「垂化」は教えを施す。『三国志』魏書・楊俊伝に「太祖除俊曲梁長、入爲丞相掾屬、舉茂才、安陵令、遷南陽太守。宣德教、立學校、吏民稱之。……文帝踐阼、復在南陽。時王象爲散騎常侍、薦俊曰、『……自初彈冠、所歷垂化、再守南陽、恩德流著、殊鄰異黨、襁負而至』」とある。

③光定天保 「天保」は天が安定し天子の位も堅固となること

を言う。『毛詩』小雅・天保に「天保定爾、亦孔之固」とあり、毛伝に「固堅也」、鄭箋に「保安、爾女也。女王也。天之安定、女亦甚堅固」とある。また『史記』周本紀に「王曰、『定天保、依天室、悉求夫惡、貶從殷王受。日夜勞來定我西土、我維顯服、及德方明』（正義…服、事也。武王答周公云、

「定知天之安保我位、得依天之宮室、退除殷紂之惡、日夜勞民、又安定我之西土。我維明於事、及我之德教施四方明行之、乃可至於寢寐也。」とある。

④肆觀萬方 『尚書』舜典に「正月上日、受終于文祖。……歲

二月、東巡守、至于岱宗、柴望秩于山川、肆觀東后」とあり、偽孔伝に「遂見東方之國君」とある。「萬方」は全土の人々。

『尚書』湯誥に「王歸自克夏、至于亳、誕告萬方」とあり、偽孔伝に「誕大也。以天命大義、告萬方之衆人」とある。

⑤穆穆皇皇 『毛詩』大雅・假樂「千祿百福、子孫千億。穆穆

皇皇、宜君宜王。」に拠る句。毛伝に「宜君王天下也」、鄭箋

沔彼流水 朝宗天池^① 沔たる彼の流水 天池に朝宗す

洋洋貢職^② 抑抑威儀^③ 洋洋たる貢職 抑抑たる威儀

既習威儀 亦閑禮容^④ 既に威儀に習い 亦禮容に閑えり

一人有則^⑤ 作孚萬邦^⑥ 一人則有り 孚を作すは萬邦

満ち満ちて流れる彼の川の流れが、海に流れ込むように諸侯たちが参内する。

洋洋たる貢ぎもの、厳肅なる祭礼のふるまい。

に「千求也。十萬曰億。天子穆穆、諸侯皇皇。成王行顯顯之令德、求祿得百福、其子孫、亦勤行而求之。得祿千億。故或爲諸侯、或爲天子。言皆相助以道」とある。また『礼記』曲礼下に「天子穆穆、諸侯皇皇、大夫濟濟、士踴踴、庶人僬僬」とあり、鄭玄注に「皆行容止之貌也。聘禮曰賓入門皇。又曰皇且行。又曰衆介北面鏘鏘焉。凡行容尊者體盤卑者體蹙」、疏に「正義曰、此一節論天子至庶人行容之貌。云天子穆穆者、威儀多貌也。天子尊重、故行止威儀多也。諸侯皇皇者、自莊盛也。諸侯不及穆穆、猶有莊盛」とある。

祭礼のふるまいに習熟した上に、礼にかなったかたちにも熟達している。

天子お一人が法にのつとられれば、よるずの国が信頼し恭順する。

○押韻 「池・儀」は上平5「支」。「容」は上平3「鍾」、「邦」は上平4「江」。

①汚彼流水 朝宗天池 『毛詩』小雅・汚水「汚彼流水、朝宗

入天子。」

于海」に拠る句。毛伝に「興也。汚水流満也。水猶有所朝宗」とあり、鄭箋に「興者水流而入海、小就大也。喻諸侯朝天子亦猶是也。諸侯春見天子曰朝、夏見曰宗」とある。「天池」は海。『莊子』逍遙游に「北冥有魚、名爲鯢。鯢之大、不知其幾千里也。化而爲鳥、其名爲鵬。鵬之背、不知其幾千里也。怒而飛、其翼若垂天之雲。是鳥也、海運則將徙於南冥。南冥者、天池也」とあり、成玄英疏に「而大海洪川、原夫造化、非人所作、故曰天池也」とある。

②洋洋貢職 「洋洋」は川の流れの盛大なるさま。ここでは貢

ぎものの多さを言う。『毛詩』衛風・碩人に「河水洋洋、北流活活」、毛伝に「洋洋盛大也」とある。「貢職」は天子への貢ぎ物。『礼記』月令・季秋之月に「貢職之數、以遠近土地、所宜爲度以給。郊廟之事無有所私」とあり、鄭注に「貢職、所

③抑抑威儀 「抑抑」は緻密で厳正であるさま。『毛詩』大雅・

抑「抑抑威儀、維德之隅」に拠る句。その毛伝に「抑抑密也。隅廉也」とあり、鄭箋に「人密審於威儀。抑抑然是其德必嚴正也」とある。「威儀」は祭祀の際のふるまい・礼儀。王韶之「宋宗廟登歌八篇・祠武原府君登歌」に「鍾鼓喤喤、威儀將將」と既出。『宋書』樂志二「詠注稿（二）」一四七頁の注②参照。

④亦閑禮容 「閑」は習う。『毛詩』大雅・卷阿に「君子之馬、

既閑且馳」とあり、鄭箋に「閑習也。今賢者在位、王錫其車衆多矣。其馬又閑習於威儀、能馳矣」とある。「禮容」は礼にかなったかたち。『史記』孔子世家に「孔子爲兒嬉戲、常陳俎豆、設禮容」とある。王韶之「宋宗廟登歌八篇・祠相國掾府君登歌」に「乃備禮容、禮容穆穆」と既出。『宋書』樂

志二詠注稿(二)「一四三頁の注③参照。

⑤一人有則 『尚書』呂刑「一人有慶、兆民賴之、其寧惟永」に拠る。偽孔伝に「天子有善、則兆民賴之、其乃安寧長久之道」とある。「有則」は法にのつとつて治める。『尚書』五子之歌に「其四曰、明明我祖、万邦之君、有典有則、貽厥子孫」とあり、偽孔伝に「君万國爲天子。典謂經籍、則法、貽遺也。言仁及後世」とある。

⑥作孚萬邦 『毛詩』大雅・文王「上天之載、無聲無臭。儀刑文王、万邦作孚」に拠る句。その毛伝に「載事、刑法、孚信也」、鄭箋に「天之道難知也。耳不聞聲、鼻不聞香臭。儀法文王之事、則天下咸信而順之」とある。荀勗「晋四箱樂歌十七篇・食举樂東西箱歌十二篇・猗歟」に「則天作孚、大哉爲君」とある。『宋書』樂志二詠注稿(三)「一四五頁の注③参照。

烝哉我皇^① 固天誕聖^②

烝なる哉 我が皇 固より天 聖をほしまま誕にす

履端惟始^③ 對越休慶^④

履端 惟れ始まり 休慶に對越す

如天斯久 如日斯盛^⑤

天の斯に久しきが如く 日の斯に盛なるが如し

介茲景福^⑥ 永固駿命^⑦

茲の景福を介にし 永く駿命を固くす

右殿前登歌^⑧三章 別有金石

右は殿前登歌三章 別に金石有り

人君の道を得たる我が君、もとより天は聖徳を縦にさせた。

端緒を履むことまさに始まり、天の吉祥にお答える。

天が長久であるように、日が盛大であるように。

天の加護を得て大いなる福を盛大とし、とこしえに大命を磐石とできますように。

右は殿前登歌三章、別に金石の樂がある。

○押韻 「聖・盛」は去声45「勁」、「慶・命」は去声43「映」。

①烝哉我皇 「烝哉」は君主にふさわしいことをいう。『毛詩』大雅・文王有声に「文王有聲、通駿有聲。通求厥寧、通觀厥成。文王烝哉」とあり、毛伝に「烝君也」、鄭箋に「君哉者言其誠得人君之道」。また王韶之「宋宗廟登歌八篇・祠孝皇帝登歌」に「烝哉孝皇、齊聖廣淵」と既出。『宋書』樂志二詠注稿(二)「一五〇頁の注①参照」。

②固天誕聖 『論語』子罕の「大宰問於子貢曰、『夫子聖者與。何其多能也』。子貢曰、『固天縱之將聖。又多能也』」に拠る句。孔安国伝に「言天固縱大聖之德、又使多能也」、疏に「將大也。言天固縱大聖之德又使多能也」とある。王韶之「宋後舞歌」に「假樂聖后、寔天誕德」とある。本詠注稿一二四頁の注②を参照。また「誕聖」は聖なる人物を生むとも解釈できる。顧愷之「雷電賦」(『初学記』卷一)に「及其灑北斗以誕聖、震昆陽以伐違」と、電光が北斗星をめぐるという現象が起こり、黄帝が生まれたという故事を踏まえた句が見え

る。ここでは『論語』子罕の伝疏に従って、天が帝の聖徳を大いにすると解した。

③履端惟始 「履端」は年の始め。『左伝』文公元年に「於是閏三月、非禮也(於曆法、閏當在僖公末年、誤於今年三月置閏。蓋時達曆者所譏)先王之正時也。履端於始。舉正於中。歸餘於終(歩曆之始、以爲術之端。首暮之日、三百六十有六日、日月之行、又有遲速、而必分爲十二月、舉中氣以正月、有餘日、則歸之於終、積而爲閏、故言歸餘於終)」とある。張華「晋四箱樂歌十六篇・食举東西箱樂詩十一章」其三に「履端承元吉、介福御萬邦」とある。『宋書』樂志二詠注稿(四)「五八頁の注⑦参照」。「惟始」は『尚書』呂刑に「王曰若古有訓、蚩尤惟始作亂、延及于平民」とある。また『宋書』王弘伝に「(少帝景平)五年春、大旱、弘引咎遜位、曰『……今履端惟始、朝慶禮畢、輒還私門、思愆家巷、庶微塞天譴、少弭謗譌。』」

④對越休慶 「對越」は天地神靈に答える。『毛詩』周頌・清廟

に「於穆清廟、肅雝顯相。濟濟多士、秉文之德。對越在天、駿奔走在廟、鄭箋に「對配、越於也。濟濟之衆士、皆執行文王之德、文王精神已在天矣。猶配順其素、如存生存」とある。班固「典引」(『文選』卷四八)に「亦猶於穆猗那、翕純嘏繹、以崇嚴祖考、殷薦宗配帝、發祥流慶、對越天地者、烏突乎千載」とあり、蔡邕注に「對、答也。」、李善注に「毛詩曰、對越在天。鄭玄曰、越、於也」とある。「休慶」は天の下した吉祥。めでたきこと。『後漢書』馬融伝に「元初二年、上廣成頌以諷諫。其辭曰、『……方涉冬節、農事閒隙、宜幸廣成、覽原隰、觀宿麥、(勸)收藏、因講武校獵、使寮庶百姓、復觀羽旄之美、聞鍾鼓之音、歡嬉喜樂、鼓舞疆畔、以迎和氣、招致休慶』」とある。

⑤如天斯久 如日斯盛 「如○斯○」は、『毛詩』小雅・斯干に「如跂斯翼(如人之跂疎翼爾)、如矢斯棘。如鳥斯革(棘稜廉也。革翼也。箋云、棘戟也。如人挾弓矢戟其肘如鳥。夏暑希革、張其翼時)、如翬斯飛。君子攸躋」とある。

⑥介茲景福 『毛詩』小雅・小明に「神之聽之、介爾景福」と

あり、毛伝に「介景皆大也」、鄭箋に「好猶與也。介助也。神明聽之則將助女以大福、謂遣是明君道施行也。」「宋書」礼志一に「晉惠帝之爲太子將冠也、武帝臨軒、使兼司徒高陽王珪加冠、兼光祿勳・屯騎校尉華廙贊冠。……將加冕、太尉跪讀祝文曰、『令月吉日、始加元服。……率遵祖考、永永無極。眉壽惟期、介茲景福』」とある。

⑦永固駿命 「駿命」は大いなる天命。『毛詩』大雅・文王に「宜鑒于殷、駿命不易」とあり、毛伝に「駿大也」、鄭箋に「宜以殷王賢愚爲鏡、天之大命不可改易」とある。

⑧右殿前登歌 「殿前」は宮殿前の殿庭。「登歌」は本来歌う者が堂上に登つて歌うものだが、劉宋の初めには殿庭で歌われていたようである。『宋書』樂志一に「(孝建二年)有司又奏、『元會及二廟齋祠、登哥依舊並於殿庭設作。尋廟祠、依新儀注、登哥人上殿、弦管在下。今元會、登哥人亦上殿、弦管在下。』並詔。」「登歌」については、『周禮』春官・大師に「大祭祀、帥瞽登歌、令奏擊拊(擊拊瞽乃歌也。故書拊爲付。鄭司農云、登歌、歌者在堂也。付字當爲拊、書亦或爲拊。樂或當擊、或當拊。登歌下管、貴人聲也。玄謂拊形如鼓、以

韋爲之、著之以糠」とある。

⑨別有金石 「金石」は鍾や磬を用いる金石の樂。『隋書』音

樂志下に「其登歌法、準禮郊特牲『歌者在上、匏竹在下』。大戴云『清廟之歌、懸一磬而尚拊搏』又在漢代、獨登歌者、不以絲竹亂人聲。近代以來、有登歌五人、別升於上、絲竹一部、進處階前。此蓋尚書『戛擊鳴球、搏拊琴瑟以詠、祖考來格』之義也。梁武樂論以爲登歌者頌祖宗功業、檢禮記乃非元日所奏。若三朝大慶、百辟俱陳、升工籍殿、以詠祖考、君臣相對、便須涕洟。以此說非通、還以嘉慶用之。後周登歌、備鍾・磬・琴・瑟、階上設笙・管。今遂因之」とあり、漢代では「登歌」は樂器の伴奏を伴わず、堂上の歌者の歌だけであつたが、のちに管弦の樂隊を階下に設置するようになり、北周に至つ

て、登歌は金石や管弦の樂器を伴つて編成されるようになったとある。ここでは「殿前登歌」は歌のみ、或いは管弦の伴奏のみを伴つて歌われ、それとは別に金石の樂を伴奏として歌われる、或いは金石の樂曲が別に演奏されるというところか。なお『南齊書』樂志には「別用金石、太樂令跪奏」とあり、「太樂令跪奏」は、太樂令が登歌を歌うことを指示することを言う。『宋書』礼志に「晉武帝世、更定元會注、今有咸寧注是也。……侍中・中書令・尚書令各於殿上上壽酒、登歌樂升、太官令又行御酒。御酒升階、太官令跪授侍郎、侍郎跪進御座前。乃行百官酒。太樂令跪奏、『奏登歌』。三。終、乃降。」

(佐藤大志)

晨義^①載燿^② 萬物咸覩^③
嘉慶^④三朝^⑤ 禮樂備舉^⑥
元正肇始^⑦ 典章暉明^⑧
萬方畢來賀^⑨ 華裔充皇庭^⑩

晨義^{すなわ}載^{かがや}燿^き 萬物咸^み覩^る
嘉^よ慶^きびは三朝^にあり 禮樂^{れいらく}備^く舉^ぐ
元正^{はじ}肇^{はじ}始^めまり 典章^{あきら}暉^け明^し
萬方^{ことごと}畢^はく來^き賀^がし 華裔^み皇庭^に充^み

多士^⑫盈九位^⑬ 俯仰^⑭觀玉聲^⑮
恂恂^⑯俯仰 載爛^⑰其輝
鼓鐘^⑱震天區^⑲ 禮容^⑳塞皇闈^㉑
思樂^㉒窮休慶^㉓ 福履^㉔同所歸

多士 九位に^み盈ち 俯仰 玉聲に觀る
恂恂として俯仰し 載^{すなわ}ち其の輝^{ひか}りを爛^{かがや}かす
鼓鐘は天區を震わせ 禮容は皇闈に塞^みつ
思樂して休慶を窮め 福履は歸する所を同じくす

朝の太陽が輝き、万物すべてがあおぎ見る。

嘉き慶びごとは元旦にあり、礼儀も音楽もことごとく備わっている。

元日ははじまりの時、典章がかがやいている。

全土の者がすべて来て来て祝い、華人もえびすも宮廷に満ちる。

多くの人士が九つの位置に溢れ、ふるまいは観て佩玉の音に合わせる。

おだやかに慎み深くふるまい、その光をかがやかせる。

鼓と鐘が四方上下を震わせ、儀容が宮門にみちる。

楽しんで慶びを窮め、さいわいが帰する所（君子＝皇帝のもと）を同じくする。

○押韻 「觀」は上声10「炫」、「舉」は上声8「語」。「明」は下平12「庚」、「庭」は下平15「青」、「聲」は下平14「清」。「輝・

闈・歸」は上平8「微」。

①晨羲 朝の太陽。陶淵明「閑情賦」に「悲晨曦之易夕、感人
生之長勤。」

②萬物咸觀 聖人が出現して万物が仰ぎ見る。『周易』乾文言
伝に「九五曰『飛龍在天、利見大人。』何謂也。子曰『同聲相

應、同氣相求。……聖人作而萬物睹。」

③嘉慶 よろこびごと。『毛詩』小雅・節南山に「天方薦瘥、喪

亂弘多。民言無嘉、惛莫懲嗟（惛、曾也。箋云、懲、止也。

天下之民、皆以災害相弔唁、無一嘉慶之言）、『毛詩』周頌・

戴芑に、穫り入れ後の祭祀と饗宴を詠じて「匪且有且、匪今

斯今、振古如茲（且、此也。振、自也。箋云、匪、非也。振

亦古也。饗燕祭祀、心非云且、而有且、謂將有嘉慶、禎祥先

來見也。心非云今、而有此今、謂嘉慶之事、不聞而至也）《嘉

慶、謂王者所得美善之實事》。』また『宋書』樂志二・傅玄「前

所作天地郊明堂歌・地郊饗神歌」に「饗嘉慶、歆德馨」、ただ

し『詠注稿（一）』一〇三頁注⑮では「慶」を「泰」に改めた。

また王韶之「食挙歌」第四章に「繁嘉慶。繁嘉慶。」

④三朝 元旦。『文選』卷一・班固「東都賦」に「春王三朝、會

同漢京」、李善注に「三朝、歲首朔日也。」

⑤禮樂備舉 有徳を象徴している。『礼記』樂記に「知樂、則

幾於禮矣。禮樂皆得、謂之有徳。」

⑥元正 元日。『尚書』舜典に「月正元日、舜格于文祖」、偽孔

伝に「月正、正月。元日、上日也。舜服堯喪三年、畢、將即

政、故復至文祖廟告。」

⑦肇始 はじまる。『爾雅』釈詁に「初哉首基肇祖元胎俶落權

輿、始也。』『毛詩』周頌・維清に「肇禋」、毛伝に「肇、始。

禋、祀也」、鄭箋に「文王受命、始祭天而枝伐也。」

⑧典章 制度法令。『後漢書』順帝紀に「即皇帝位、年十一。

……尚書令劉光等奏言「……而即位倉卒、典章多缺。請條案

禮儀、分別具奏。』『孝經』諸侯章に「在上不驕、高而不危。

制節謹度、滿而不溢」、邢昺疏に「言不可奢僭、當須慎行禮

法、無所乖越、動合典章。皇侃云、謂宮室車旗之類、皆不奢

僭也。」

⑨萬方 あらゆる所の人々。『尚書』湯誥に「王歸自克夏、至

于亳、誕告萬方」、偽孔伝に「誕、大也。以天命大義、告萬方

之衆人。」

⑩來賀 やつてきて祝福する。『尚書』周官に「成王既伐東夷、

肅慎來賀。」また『毛詩』大雅・下武に「受天之祜、四方來

賀。」

⑪華裔 中央の華人と辺境のえびす。『左伝』定公十年に、魯

侯と齊侯が孔子の介添え（「相會儀也」）で会したおり、齊の

犁彌が齊侯に、萊人を使つて魯侯を脅かそうと入れ知恵した話がある。「犁彌言於齊侯曰『孔丘知禮而無勇。若使萊人以兵劫魯侯、必得志焉（萊人、齊所滅萊夷也）。』齊侯從之。孔丘以公退曰『士兵之以兵擊萊人。兩君合好、而裔夷之俘、以兵亂之（裔、遠也）。非齊君所以命諸侯也。裔不謀夏、夷不亂華。』」また『文選』卷七・潘岳「藉田賦」に「於是我皇乃降靈壇、撫御耦、……于斯時也、居靡都鄙、人無華裔。長幼雜選以交集、士女頒賦而咸戾」、李善注に「左傳、孔子曰、裔不謀夏、夷不亂華。王肅家語注曰、裔、邊裔也。」また『晋書』張祚伝に「永和十年（三五四）、祚納尉繚・趙長等議、僭稱帝位、立宗廟、舞八佾、置百官、下書曰『……今中原喪亂、華裔無主。』」

②多士 多くのすぐれた人材。『毛詩』大雅・文王に「濟濟多士、文王以寧。」

⑬九位 「位」は、儀礼の場で参列者各自に定められている位置か。『宋書』礼志一の儀礼を記述した段に以下のように類出する。「凡遣大使拜皇后・三公、及冠皇太子、及拜蕃王、帝皆臨軒。其儀、太樂令宿設金石四箱之樂於殿前。……漏上

四刻、侍中奏『外辦。』皇帝服袞冕之服、升太極殿、臨軒南面。謁者前北面一拜、跪奏『大鴻臚臣某稽首言、羣臣就位。謹具。』侍中稱制曰『可。』謁者贊拜、在位皆再拜。大鴻臚稱臣一拜、仰奏『請行事。』侍中稱制曰『可。』鴻臚舉手曰『可行事。』謁者引護當使者當拜者、入就拜位。『咸寧注、先正月一日、守宮宿設王公卿校便坐於端門外、大樂鼓吹又宿設四箱樂及牛馬帷閣於殿前。……漏未盡五刻、謁者僕射・大鴻臚各奏『羣臣就位定。』」また、同卷所収「南郊」殷祀の段にも「就位」「在位」「還位」がある。「南郊、……先郊日未晡五刻、夕牲。公卿京兆尹眾官悉壇東就位、太祝史牽牲入。」「殷祠、……上水一刻、皇帝著平冕龍袞之服、升金根車、到廟北門訖。治禮・謁者各引太樂・太常・光祿勳・三公等皆入在位。……太祝令跪讀祝文、訖、進奠神座前、皇帝還本位。」

「九」は、儀礼に参列する「九賓」を意識するか。『宋書』礼志一に「凡遣大使拜皇后・三公、及冠皇太子、及拜蕃王、帝皆臨軒。其儀、……治禮引大鴻臚入、陳九賓。」また『宋書』樂志二・傳玄「晋四箱樂歌三首之二」に「鍾鼓斯震、九賓備禮。正位在朝、穆穆濟濟。」同じく張華「晋四箱樂歌十六篇・

食挙東西箱樂詩十一章之三」に「九賓在庭、臚讀既通。」なお「九位」は、『後漢書』天文志上の李賢注所引張衡「靈憲」に「……斯謂太元、蓋乃道之實也。在天成象、在地成形。天有九位、地有九域。天有三辰、地有三形」とあるが、この「九位」は、「地」の「九域」すなわち九州に対応するので、本章の「九位」には重なりがたい。

⑭俯仰 挙措。『毛詩』邶風・柏舟の「威儀棣棣、不可選也」の毛伝に「君子望之、儼然可畏。禮容俯仰、各有威儀耳。」

⑮觀玉聲 姿を見、佩玉の音を聴くこと。『礼記』玉藻に「君子……既服、習容、觀玉聲（玉、佩）、乃出、揖私朝、燁如也。登車、則有光矣（私朝、自大夫家之朝也。揖其臣、乃行）（既服、著朝服已竟也。服竟而私習儀容、又觀容、聽已珮鳴、使玉聲與行步相中適。玉、珮玉也）。」

⑯恂恂 おだやかで慎み深いさま。『論語』郷党に「孔子於鄉黨、恂恂如也、似不能言者」、何晏集解に「王曰、恂恂、溫恭之貌。」

⑰載爛其輝 「載○其□」は、『毛詩』に三例ありすべて○□がVO構造をとる。『毛詩』邶風・凱風に「睨皖黃鳥、載好其

音」、鄭箋に「睨皖以興顏色說也。好其音者、興其辭令順也。」幽風・狼跋に「狼跋其胡、載寃其尾」、毛伝に「興也。跋、蹶。寃、跲也。老狼有胡、進則蹶其胡、退則跲其尾、進退有難、然而不失其猛。」また「狼跋」に「狼寃其尾、載跋其胡。」

⑱鼓鐘 大鼓と大鐘。『毛詩』大雅・靈台に「虞業維樅、賁鼓維鏞、於論鼓鍾、於樂辟廱（植者曰虞、橫者曰柶、業、大版也。樅、崇牙也。賁、大鼓也。鏞、大鍾也。論、思也。水旋丘如壁曰辟廱、以節觀者）」とあり、「賁鼓」と「鏞」を、次句に「鼓鍾」と称している。『宋書』樂志二・傳玄「祠廟饗神歌二篇之二」には「理管絃、振鼓鍾。舞象德、歌詠功。」同じく「晋四箱樂歌三首・天命十三章（食挙東西箱歌）之九」に「喤喤鼓鍾、鎗鎗磬管」、荀勗「晋四箱樂歌十七篇・食挙樂東西箱歌十二篇之十」に「哲哲庭燎、喤喤鼓鍾。笙磬詠德、萬舞象功」とあり、本例も含めすべて「鼓」「鍾（鐘）」という二つの名詞を並置する。なお前注⑬の「位」に挙げた『宋書』礼志一の儀礼の段では、以下のように、皇帝の出入に伴って「鍾鼓」が打ち鳴らされている。「咸寧注、先正月一日、守宮宿設王公卿校便坐於端門外、大樂鼓吹又宿設四廂樂及牛馬帷

閣於殿前。……漏盡、侍中奏『外辦』。皇帝出。鍾鼓作、百官皆拜伏。太常導皇帝升御座。鍾鼓止、百官起。……皇帝罷入、百官皆坐。晝漏上水六刻、諸蠻夷胡客以次入、皆再拜訖、坐。御入三刻、又出。鍾鼓作。……宴樂畢、謁者一人跪奏『請罷退』。鍾鼓作、羣臣北面再拜出。江左更隨事立位、大體亦無異也。宋有天下、多仍舊儀、所損益可知矣。」

⑲天區 四方上下。『文選』卷三・張衡「東京賦」に「聲教布濩、盈溢天區」、薛綜注に「布濩、猶散被也。天區、謂四方上下也。言天子教愛及之。尚書曰、聲教訖于四海。」同卷一〇・潘岳「西征賦」に「存威格乎天區、亡墳掘而莫禦。」

⑳禮容 儀礼に則った様相。『史記』孔子世家に「孔子爲兒嬉戲、常陳俎豆、設禮容。」

㉑皇闈 皇居の門。『文選』卷二五・傅咸「贈何劭王濟」に「赫赫大晉朝、明明闈皇闈」、李善注に「張衡陳公誄曰、穆穆皇闈、公寔省之。」

㉒思樂 樂しむ。『毛詩』魯頌・泂水に「思樂泂水、薄采其芹」
〈泂水、泂宮之水也。天子辟離、諸侯泂宮。……箋云、芹、水菜也。言己思樂僖公之脩泂宮之水、復伯禽之法、而往觀之、

采其芹也〉《是其思樂者、樂僖公所脩觀宮》。なお「思」が助辭か動詞か、「泂水」の毛伝・鄭箋・孔疏では不明だが、『毛詩』大雅・文王にある句頭の「思」については、毛伝が「辭」、鄭箋が「願」と解し、孔疏は鄭箋に賛同している。『毛詩』大雅・文王に「世之不顯、厥猶翼翼。思皇多士、生此王國」
翼翼、恭敬。思、辭也。……箋云、猶、謀。思、願也〉《釋詁文、以思之爲辭、止在句末。今句首言之、不宜爲辭。故易傳、以意之所思、必情之所願、故以思爲願》。本章では、「思樂」の対語の「福履」が類義複合語なので、「思樂」も類義複合語ととらえた。

㉓休慶 よろこび。『爾雅』釈言に「休、慶也《謂嘉慶也》。『後漢書』馬融伝・馬融「広成頌」に「方涉冬節、農事閑隙、宜辛廣成、……因講武校獵、使寮庶百姓、復觀羽旄之美、聞鍾鼓之音、歡嬉喜樂、鼓舞疆畔、以迎和氣、招致休慶。」

㉔福履 福祿。『毛詩』周南・樛木に「樂只君子、福履綏之」、毛伝に「履、祿。綏、安也」、鄭箋に「妃姜以禮義相與和、又能以禮樂樂其君子、使爲福祿所安。」

五玉既獻 三帛是薦^①

爾公爾侯^② 鳴玉華殿^③

皇皇聖后^④ 降禮^⑤南面^⑥

元首^⑦納嘉禮^⑧ 萬邦同歡願^⑨

休哉^⑩ 君臣嘉燕

建五旗^⑪ 列四縣^⑫

樂有文^⑬ 禮無倦^⑭

融皇風^⑮ 窮一變^⑯

五玉 既に獻じ 三帛 是れ薦む

爾公^{なんじ} 爾侯よ 玉を華殿に鳴らす

皇皇たる聖后 降禮して南面す

元首は嘉禮を納め 萬邦は歡願を同じくす

休きかな 君臣嘉燕す

五旗を建て 四縣を列ぬ

樂に文有り 禮に倦む無し

皇風^{なが}を融くし 一變を窮む

五玉が献上されると、三帛が薦められる。

お前たち公侯よ、宮殿に佩玉を鳴らす。

大いなる聖帝は、身を屈めて挨拶し南面する。

元首が嘉き礼を納め、天下が歎びと願いをともにする。

すばらしきかな、君と臣の嘉き宴は。

五色の旗を建て、四方の宮県を列ねる。

音楽にはあやが有り、儀礼は倦むことが無い。

大いなる風教を永くし、一變を窮め（て道に至）る。

○押韻 「獻・願」は去声25「願」、「薦・殿・燕・縣」は去声32「霰」、「面・倦・變」は去声33「線」。

①五玉既獻 三帛是薦 「五玉」「三帛」は、王が天や山川を祭る際、諸侯やその跡取りが王にまみえるために携えた礼物。

「五玉」は諸侯が、「三帛」は諸侯らの跡取りが献上する。『尚書』舜典に「歲二月東巡守、至于岱宗柴。望秩于山川、肆覲東后。協時月正日、同律度量衡、修五禮・五玉（修吉凶賓軍嘉之禮、五等諸侯執其玉）・三帛・二生・一死、贊（三帛、諸侯世子執纁、公之孤執玄、附庸之君執黃）（修五玉、公侯伯子男所執之圭璧也）。」

②爾公爾侯 諸侯へのよびかけ。お前たち公侯よ。『毛詩』小雅・白駒に「皎皎白駒、賁然來思。爾公爾侯、逸豫無期（爾公爾侯邪、何爲逸樂、無期以反也）（爾豈是公也、爾豈是侯也、何爲亦逸豫、無期以反乎）。」また『文選』卷二〇・曹植「責躬詩」に「帝曰爾侯、君茲青土」、李善注に「魏志曰、建安十九年、植封臨淄侯。臨淄屬齊郡、舊青州之境。尚書、帝曰爾諸。漢書、封齊王曰、受茲青土。」また『宋書』樂志二・張華「晉四箱樂歌十六篇・食舉東西箱樂詩十一章之三」に「九賓在庭、臚讀既通。升瑞奠贄、乃侯乃公。」

③華殿 宮殿。『漢書』外戚伝下・班婕妤伝・班婕妤「自悼賦」に「重日、潛玄宮兮幽以清、應門閉兮禁闔局。華殿塵兮玉階落、中庭萋兮綠草生。」

④皇皇聖后 大いなる聖なる皇帝。『毛詩』の「皇皇后帝」は、鄭箋によれば天帝を指す。『毛詩』魯頌・閟宮に「皇皇后帝、皇祖后稷（箋云、皇皇后帝、謂天也。成王以周公功大、命魯郊祭天、亦配之以君祖后稷）。」「聖后」は『晉書』劉曜載記に「曜大悅、讌羣臣于東堂、語及平生、泫然流涕、遂下書曰「蓋褒德惟舊、聖后之所先。念惠錄孤、明王之恒典。」」

⑤降禮 身をかがめる丁寧な挨拶。『韓詩外伝』卷一に「傳曰、……君人者、降禮尊賢而王、重法愛民而霸、好利多詐而危、權謀傾覆而亡。」「後漢書」光武十王列伝・東平王蒼伝に「其後諸王入宮、（帝）輒以輦迎、至省閣乃下。蒼以受恩過禮、情不自寧、上疏辭曰「……陛下至德廣施、慈愛骨肉、既賜奉朝請、咫尺天儀。而親屈至尊、降禮下臣。」」

⑥南面 聖人執政の際、すべてが見えるように南を向く作法。『周易』説卦に「離也者、明也。萬物皆相見、南方之卦也。聖

人南面而聽天下、嚮明而治、蓋取諸此也」、孔疏に「日出而萬物皆相見也、又位在南方、故聖人法南面而聽天下、嚮明而治也。故云、蓋取諸此也。」

⑦元首 君主。『尚書』益稷に「帝……乃歌曰『股肱喜哉、元首起哉、百工熙哉』」、偽孔伝に「元首、君也。」

⑧嘉禮 万民に親しむ礼。嘉礼には六種あり、その一種が四方の賓客に親しむ「饗宴の礼」。『周礼』春官・大宗伯に「以嘉禮、親萬民（嘉、善也。所以因人心所善者、而爲之制。嘉禮之別、有六）。以飲食之禮、親宗族兄弟。以昏冠之禮、親成男女。以賓射之禮、親故舊朋友。以饗燕之禮、親四方之賓客（賓客、謂朝聘者）。以脤膾之禮、親兄弟之國。以賀慶之禮、親異姓之國。」

⑨萬邦 天下。『尚書』堯典に「百姓昭明、協和萬邦、黎民於變時雍（昭、亦明也。協、合。黎、衆。時、是。雍、和也。言天下衆民、皆變化化上、是以風俗大和）。」

⑩歡願 欲びと願い。『文選』卷三〇・謝靈運「擬魏太子鄴中集詩八首・劉楨」に「辰事既難諧、歡願如今并。」

⑪休哉 よきかな。民の贊嘆の語。『礼記』祭統に「是故君子

之觀於銘也、既美其所稱、又美其所爲。……故衛孔悝之鼎銘曰「……公曰「叔舅、……乃考文叔、興舊耆欲、作率慶士、躬恤衛國、其勤公家、夙夜不解。」民咸曰「休哉。」……」此衛孔悝之鼎銘也。」

⑫五旗 五色の旗。『漢書』揚雄伝上・揚雄「河東賦」に「伊年暮春、將瘞后土。禮靈祇、謁汾陰于東郊。……鳴洪鍾、建五旗（……漢舊儀云、皇帝車駕建五旗。蓋謂五色之旗也）。」

⑬四縣 雅樂の樂器で「天子の宮縣」。『漢書』礼樂志・安世房中歌に「高張四縣、樂充宮庭」、顏師古注に「晉灼曰、四縣、樂四縣也、天子宮縣。」

⑭有文 あやがある。『論語』泰伯に「子曰「大哉、堯之爲君也。……巍巍乎其有成功也、煥乎其有文章（煥、明也。其立文垂制、又著明）。」

⑮無倦 倦むことがない。『論語』顔淵に「子張問政。子曰「居之無倦、行之以忠（王曰、言爲政之道、居之於身、無得解倦、行之於民、必以忠信）。」、同・述而に「子曰「默而識之、學而不厭、誨人不倦。何有於我哉。」

⑯融 長い。『毛詩』大雅・既醉に「昭明有融、高朗令終（融、

長。朗、明也。……箋曰、有、又。令、善也。天既其女、以光明之道、又使之長有高明之譽、而以善名終、是其長也。」

①⑦皇風 大いなる風教。『文選』卷一・班固「東都賦」に「於是

薦三犧、效五牲。禮神祇、懷百靈。觀明堂、臨辟雍。揚緡熙、

宣皇風。登靈臺、考休徵。」

①⑧一變 道に至る変化。『論語』雍也に「子曰『齊一變、至於

魯。魯一變、至於道（包曰、言齊魯有太公周公之餘化。太公大賢、周公聖人。今其政教雖衰、若有明君興之、齊可使如魯、魯可使如大道行之時）。』」

體至和 ① 感陰陽 ②

德無不柔 ③ 繁休祥 ④

瑞徽壁 ⑤ 應嘉鐘 ⑥

舞靈鳳 ⑦ 躍潛龍 ⑧

景星見 ⑨ 甘露墜 ⑩

木連理 ⑪ 禾同穗 ⑫

玄化洽 ⑬ 仁澤敷 ⑭

極禎瑞 ⑮ 窮靈符 ⑯

至和を體し 陰陽に感ず

德に柔らげざる無く 休祥繁し

徽壁瑞たり 嘉鐘應ず

靈鳳を舞わせ 潜龍を躍らす

景星見われ 甘露墜つ

木は理を連ね 禾は穗を同じくす

玄化洽く 仁澤敷く

禎瑞を極め 靈符を窮む

至高の和を体して、陰陽にはたらきかける。

徳は安んじないものとして無く、さいわいはあまた。

美しき玉が瑞祥となり、嘉き鐘の音が兆しとなる。

神秘の鳳凰を舞わせ、潜んでいた龍を躍り上がらせる。

景星が現れ、甘露がくだる。

木々は木目を連ね、稲々は穂を同じくする。

玄妙な教化はあまねく、仁愛の恩沢がゆきわたる。

よき瑞祥を極め、神秘のしるしを窮める。

○押韻 「陽・祥」は下平10「陽」。「鐘・龍」は上平3「鍾」。「墜・穗」は去声6「至」。「敷・符」は上平10「虞」。

①至和 陰と陽との至高の和。『文選』卷一八・成公綏「嘯賦」

に「變陰陽之至和、移淫風之穢俗」、李善注に「禮記曰、夫禮

樂行乎陰陽。又曰、移風易俗。鄭玄曰、樂用之則正人、和陰

陽。」

②陰陽 道の神秘なはたらき。『周易』繫辭伝上に「一陰一陽、

之謂道。……陰陽不測、之謂神。」

③柔 安んじる。『尚書』舜典に「柔遠能邇、惇德允元（柔、

安。邇、近。敦、厚也。元、善之長。言當安遠、乃能安近。

厚行德信、使足長善。」なお『宋書』樂志二・張華「晉四箱

樂歌十六篇・食舉東西箱樂歌十一章之三」も、「懷柔百神、輯

祥禎。潛龍躍、雕虎仁。儀鳳鳥、屈游麟。枯蠹榮、竭泉流。

「敷・符」は上平10「虞」。

菌芝茂、枳棘柔。和氣應、休徵滋」と、本章同様「柔」を織

りこむ句のあとに瑞祥を列挙しており、本章は「柔」の対象

を記さないが、張華樂府は「百神」と明記する。あるいは本

章は「神」のことを、次章は「民」のことを歌う構成か。

④休祥 よき事、さいわい。『尚書』泰誓中に「朕夢協朕卜、襲

于休祥、戎商必克」、偽孔伝に「言我夢與卜、俱合於美善、以

兵誅紂、必克之占。」

⑤瑞徽璧 應嘉鐘 『宋書』符瑞志上に、劉裕が即位する（四

二〇）前「三十二璧」「六鐘」「銅鐘十二枚」の符瑞があった、

と記す。「晉安帝義熙（四〇五〜四一八）初、帝（劉裕）始康

晉亂、而興霸業焉。廬江霍山常有鐘聲十二。帝將征關・洛、

霍山崩、有六鐘出、制度精奇、上有古文書一百六十字。冀州

有沙門法稱將死、語其弟子普嚴曰『嵩皇神告我云、江東有劉將軍、是漢家苗裔、當受天命。吾以三十二璧、鎮金一餅、與將軍爲信。三十二璧者、劉氏卜世之數也。』普嚴以告同學法義。法義以十三年七月、於嵩高廟石壇下得玉璧三十二枚、黃金一餅。漢中城固縣水際、忽有雷聲、俄而岸崩、得銅鐘十二枚。又鞏縣民宋燿得嘉禾九穗。後二年而受晉禪。」

⑥舞靈鳳 『尚書』益稷に、夔の言葉として「簫韶九成、鳳皇來儀（韶、舜樂名、言簫、見細器之備。雄曰鳳、雌曰皇、靈鳥也。儀有容儀、備樂九奏、而致鳳皇、則餘鳥獸、不待九而率舞）。」同時代の記録としては『宋書』符瑞志中に「鳳凰者、仁鳥也。……宋武帝永初元年（四二〇）七月戊戌、鳳皇見會稽山陰。」なお本章の「靈鳳」以下の瑞祥については、注⑩所引『白虎通德論』卷五・封禪も参照。

⑦躍潛龍 『周易』乾卦に「初九、潛龍勿用。……九四、或躍在淵、无咎。……文言曰、……或躍在淵、乾道乃革。飛龍在天、乃位乎天德。」また『宋書』符瑞志中に「宋武帝永初元年（四二〇）七月、青龍見義興陽羨。永初元年八月、青龍二見

南郡江陵。」

⑧景星 人君に徳があると現れる吉祥の明星。『史記』天官書に「天精而見景星（集解、孟康曰、精、明也。有赤方氣與青方氣相連、赤方中有兩黃星、青方中一黃星、凡三星合爲景星。……正義、景星、狀如半月、生於晦朔、助月爲明。見則人君有徳、明聖之慶也）。景星者、徳星也。其狀無常、常出於有道之國。」また『漢書』礼樂志・郊祀歌十九章・景星十二に「景星顯見、信星彪列（如淳曰、景星者、徳星也、見無常、常出有道之國。鎮星爲信星、居國益地）。象載昭庭、日親以察。」『宋書』符瑞志下には「景星、大星也。狀如半月、於晦朔助月爲明。（以下闕文）」

⑨甘露 侯王が道を守ると天が降す瑞祥の露。『老子』第三二章に「道常無名、樸雖小、天下莫能臣也。侯王若能守之、萬物將自賓、天地相合、以降甘露、河上公注に「侯王動作、能與天相應和、天即降下甘露善瑞也。」『宋書』符瑞志中には「甘露降」の記事が複数あり、元嘉三年（四二六）の甘露は、本篇の作者の王韶之が報告している。王韶之の没年は四三五年。「甘露、王者徳至大、和氣盛、則降。……晉安帝元興二

年（四〇三）十月、甘露降武昌王成基家竹。元興三年三月己卯、甘露降丹徒。元興三年四月己酉、甘露降蘭臺。宋武帝永初元年（四二〇）九月庚辰、甘露降丹徒峴山。永初元年十月庚午、甘露降興寧・永寧二陵、彌冠百餘里。文帝元嘉三年（四二六）閏正月己丑、甘露降吳興烏程、太守王韶之以聞。元嘉四年五月辛巳、甘露降齊郡西安臨朐城。元嘉四年十一月辛未朔、甘露降初寧陵。元嘉四年十一月己丑、甘露降南海熙安、廣州刺史江桓以聞。元嘉八年五月、甘露降南海番禺。元嘉九年十一月壬子、甘露降初寧陵。元嘉十一年八月甲辰、甘露降費縣之沙里、琅邪太守呂綽以聞。」

⑩木連理 禾同穗 異なる木々の木目が連なり、異なる稲々が穂を同じくする瑞祥。班固『白虎通德論』卷五・封禪に「天下太平符瑞所以來至者、以爲王者承統理、調和陰陽、陰陽和、萬物序、休氣充塞、故符瑞並臻、皆應德而至。德至天則斗極明、日月光、甘露降。德至地則嘉禾生、蓂莢起、拒鬯出、太平感。德至文表則景星見、五緯順軌。德至草木朱草生、木連理。德至鳥獸則鳳皇翔、鸞鳥舞、麒麟臻、白虎到、狐九尾、白雉降、白鹿見、白鳥下。德至山陵則景雲出、芝實茂、陵出

異丹、阜出蓮萏、山出器車、澤出神鼎。德至淵泉則黃龍見、醴泉通、河出龍圖、洛出龜書、江出大貝、海出明珠。德至八方則祥風至、佳氣時喜、鐘律調、音度施、四夷化、越裳貢。」『宋書』符瑞志下に「木連理、王者德澤純洽、八方合爲一、則生。……晉安帝……元興元年（四〇二）正月、木連理生泰山武陽。宋文帝元嘉八年（四三一）四月乙亥、東莞莒縣松樹連理、太守劉玄以聞。元嘉八年八月、木連理生東安新泰縣、嘉禾、五穀之長、王者德盛、則二苗共秀。於周德、三苗共穗。於商德、同本異穗。於夏德、異本同秀。……宋文帝元嘉二年十月、嘉禾生潁川陽翟、太守垣苗以聞。元嘉九年三月、嘉禾生義陽、豫州刺史長沙王義欣以獻。元嘉十年八月、嘉禾生汝南苞信、豫州刺史長沙王義欣以獻。」

⑪玄化 玄妙な教化。『文選』卷二〇・曹植「責躬詩」に「於穆顯考、時惟武皇。受命于天、寧濟四方。……玄化滂流、荒服來王（廣雅曰、玄、道也、謂道德之化也。蔡邕陳留太守頌曰、玄化洽矣。尚書曰、四夷來王）。」

⑫仁澤 仁愛の恩沢。『三國志』薛綜伝に「建衡三年（二五四）、（孫）皓追歎瑩父綜遺文、且命瑩繼作。瑩獻詩曰「……堂構

弗克、志存耦耕。豈悟聖朝、仁澤流盈。追錄先臣、愍其無成。是濟是拔、被以殊榮。」

⑬禎瑞 瑞祥。『三國志』張瑋伝に、張掖郡の川に現れた「靈龜」の形の石を、張瑋が「将来の禎瑞」だと読み解くくだりがある。「青龍四年（二三六）辛亥詔書『張掖郡玄川溢涌、激波奮蕩、寶石負圖、狀像靈龜、……實有魏之祚命、東序之世寶。』事頒天下。任令于綽連齋以問（張）瑋、瑋密謂綽曰『夫神以知來、不追已往。禎祥先見、而後廢興從之。漢已久亡、魏已得之、何所追興徵祥乎。此石、當今之變異而將來之禎瑞也。』」また『宋書』武帝紀所収の、劉裕に禪讓する晋帝の璽書の中に見える。「（元熙二年＝四二〇）六月、至京師。晋帝

禪位于王、……又璽書曰『……朕每敬惟道勳、永察符運、天之曆數、實在爾躬。……圖讖禎瑞、皎然斯在。』

⑭靈符 瑞祥。『三國志』文帝紀の裴松之注に「獻帝傳載禪代衆事曰『……侍中劉廙・常侍衛臻等奏議曰『……宜順靈符、速踐皇阼。』」また『宋書』樂志四・曹植「鞞舞歌・大魏篇」に「大魏應靈符、天祿方甫始。聖德政泰和、神明爲驅使。」また『文選』卷六〇・陸機「弔魏武帝文」に「信斯武之未喪、膺靈符而在茲」、李善注に「茲、此也。此、太祖也。……曹植大魏篇曰、大魏膺靈符、天祿方茲始。春秋孔演圖曰、靈符滋液、以類相感。」

懷荒裔^① 綏齊民^②
荷天祐^③ 靡不寶^④
靡不寶^⑤ 長世弘盛^⑥
昭明有融^⑦ 繁嘉慶^⑧
繁嘉慶^⑨ 熙帝載^⑩
合氣成和^⑪ 蒼生欣戴^⑫

荒裔を懷け 齊民を綏んず
天祐を荷い 寶せざるもの靡し
寶せざるもの靡く 長世に弘盛たり
昭明にして有に融く 嘉慶繁し
嘉慶繁く 帝の載を熙む
氣を合し和を成し 蒼生 欣び戴く

三靈協瑞^⑪ 惟新皇代^⑫

三靈は瑞に協い^{かな} 惟れ皇代を新たにす^こ

辺境のえびすをなつて、平民たちを安んじる。

天の助けを受け、賓服しない者は無い。

賓服しない者は無く、永き世に盛ん。

輝いてしかも永遠に、よきことは弥^い頻^しく。

よきことは弥頻き、帝のみわざをひろめゆく。

陰陽の気が合して和と成り、人民は欣喜戴く。

天地人の三靈が瑞祥にかない、大いなる御代を新たにす。

○押韻 「民・賓」は上平17「眞」。「盛」は去声45「勁」、「慶」は去声43「映」。「載・戴・代」は去声19「代」。

①荒裔 辺境のえびす。『文選』卷五六・班固「封燕然山銘」に

「鏖王師兮征荒裔、勦凶虐兮截海外。覓其邈兮互地界、封神

丘兮建隆嶠。熙帝載兮振萬世（尚書曰、有能奮庸、熙帝之

載）。」

②齊民 一般の民。『莊子』漁父に「子貢對曰『……孔氏者、

……上以忠於世主、下以化於齊民』」、陸徳明の釈文に「李云、

齊、等也。許慎云、齊等之民也。如淳云、齊民、猶平民。」

『史記』平準書に「漢興、接秦之弊、……而將相或乘牛車、齊民無藏蓋」、「集解」に「如淳曰、齊等無有貴賤、故謂之齊民。若今言平民矣。晉灼曰、中國被教之民也。」

③天祐 天からのたすけ。『周易』大有に「上九、自天祐之、吉

无不利。」また『尚書』咸有一德に、伊尹が太甲に夏殷革命を語って「非天私我有商。惟天佑于一德（非天私商而王之。佑助一德、所以王）。」

④長世 治世が長く続く。『左伝』僖公十一年に「天王使召武

公・内史過賜晉侯命（天王、周襄王。召武公、周卿士。内史過、周大夫。諸侯即位、天子賜之命圭爲瑞）。受玉情。過歸告王曰「晉侯其無後乎。……不敬則禮不行、禮不行則上下昏、何以長世（爲惠公不終張本）。」

⑤昭明有融 輝いてしかも永い。『毛詩』大雅・既醉に「昭明有融、高朗令終」、毛伝に「融、長。朗、明也。始於饗燕、終於享祀」、鄭箋に「有、又。令、善也。天既其女、以光明之道、又使之長有高明之譽、而以善名終、是其長也。」

⑥嘉慶 美にして善なる事実。さいわい。『毛詩』周頌・戴芟に、穫り入れ後の祭祀と饗宴を詠じて「匪且有且、匪今斯今、振古如茲」、毛伝に「且、此也。振、自也」、鄭箋に「饗燕祭祀、心非云且、而有且、謂將有嘉慶、禎祥先來見也。心非云今、而有此今、謂嘉慶之事、不聞而至也。言脩德行禮、莫不獲報、乃古古而如此、所由來者久、非適今時」、孔疏に「嘉慶、謂王者所得美善之實事。禎祥、謂嘉慶之前先見爲徵應者也。」

⑦熙帝載 帝の事を広める。『尚書』舜典に「咨四岳有能奮庸

熙帝之載」、偽孔伝に「奮、起。庸、功。載、事也。訪羣臣、有能起發其功、廣堯之事者。」注①も参照。

⑧合氣成和 「合氣」は、天と地が氣を合すること。百財を生む。「成和」も、陰陽が和して物を生むこと。『史記』龜策列伝に「元王曰「……雖然、禍不妄至、福不徒來。天地合氣、以生百財。」」莊子」田子方に「至陰肅肅、至陽赫赫。肅肅出乎天、赫赫發乎地。兩者交通成和而物生焉。」

⑨蒼生 人民。『文選』卷四七・史岑「出師頌」に「蒼生更始、朔風變楚」、李善注に「蒼生、猶黔首也。尚書曰、至于海隅蒼生。」なお『尚書』益稷には「禹曰、兪哉。帝光天之下、至于海隅、蒼生」、偽孔伝には「光天之下、至于海隅、蒼蒼然生草木。言所及廣遠」とあつて、偽孔伝によれば『尚書』の「蒼生」は草木の生ずること。

⑩欣戴 喜んで推戴する。『国語』周語上に「商王帝辛、大惡于民。庶民不忍、欣戴武王、以致戎于商牧。」なお「蒼生」と「欣戴」をともに織りこむ文は、『文選』卷三七・劉琨「勸進表」に「況茂勳格于皇天、清暉光于四海、蒼生顒然、莫不欣戴、聲教所加、願爲臣妾者哉」、李善注に「淮南子曰、聖人呼

吸陰陽之氣、而群生莫不喁喁然仰其德以和順。國語、祭公謀父曰、商王大惡、庶人不忍、欣戴武王。」

⑪三靈 天地人。『文選』卷四八・班固「典引」に「答三靈之蕃祉、展放唐之明文」、李善注に「三靈、天地人也。」

⑫協瑞 瑞祥を承けてそれになう。『漢書』武帝紀太始二年（前九五年）三月の詔に、「白麟」「天馬」「泰山黃金」の瑞祥に「協」して馬蹄金を鑄造させた、とある。「三月、詔曰『有司議曰、往者朕郊見上帝、西登隴首、獲白麟以饋宗廟、渥洼水出天馬、泰山見黃金、宜改故名。今更黃金爲麟趾褭蹄、以協瑞焉』」、應劭の注に「獲白麟、有馬瑞、故改鑄黃金如麟趾褭蹄、以協嘉祉也。古有駿馬名要褭、赤喙黑身、一日行萬五千里也」、顏師古の注に「既云宜改故名、又曰更黃金爲麟趾褭蹄、是則舊金雖以斤兩爲名、而官有常形制、亦由今時古字

王道四達^① 流仁布德^②
窮理詠乾元^③ 垂訓順帝則^④
靈化侔四時^⑤ 幽誠通玄默^⑥

王道 四達し 仁を流し徳を布く
理を窮めて乾元を詠じ 訓を垂れて帝則に順う
靈化 四時と侔^ひしく 幽誠 玄默に通ず

金挺之類矣。武帝欲表祥瑞、故普改鑄爲麟足馬蹄之形、以易舊法耳。今人往往於地中得馬蹄金、金甚精好、而形製巧妙。」ただしこれは強權が「協瑞」した例だが、同王莽伝・符命四十二篇には、「符瑞」が「五命」（五行の順次）を「協成」させた、とある。「帝王受命、必有德祥之符瑞、協成五命、申以福應」師古曰、五命、謂五行之次、相承以受命也。申、重也。』

⑬惟新 新たにする。『毛詩』大雅・文王に「周雖舊邦、其命維新」、毛伝に「乃新在文王也」、鄭箋に「至文王而受命、言新者、美之也。」

⑭皇代 大いなる御代。『文選』卷四五・班固「答賓戲」に「主人道爾而笑曰『……今吾子處皇代而論戰國、曜所聞而疑所覲。』」

（佐竹保子）

德澤被八紘^⑦ 乾寧軌萬國^⑧

德澤 八紘を被い 乾寧 萬國を軌^{したが}わしむ

王の徳が四方に行きわたり、仁愛と恩徳を世におし広げる。

万物の道理を窮めつくして天のはたらきを讃え、教えを示して天道の法則を守りしたがわせる。

くすしき教化は四時のはたらきと並び、静かな真心は大いなる沈黙と通じ合う。

天子の徳の恵みは天下をくまなく覆い、天の安らかさで万国を統一された。

○押韻 「徳・則・默・國」は入声25「徳」。

①王道四達 「王道」は王たるものの道德。『尚書』洪範に「無

偏無黨、王道蕩蕩。無黨無偏、王道平平。無反無側、王道正

直（言所行無反道不正、則王道平直）」というのは先王の統

治。『礼記』樂記に「食三老五更於大學。天子袒而割牲、執

醬而饋、執爵而醕、冕而摠干、所以教諸侯之弟也。若此、則

周道四達、禮樂交通。」というのは道德。『宋書』樂志一に「故

仲尼答賓牟賈之問曰、『周道四達、禮樂交通』。」

②流仁布徳 善政を施すことをいう。『礼記』月令の孟春に「命

相布徳和令、行慶施恵、下及兆民（相謂三公。相王之事也。

徳謂善教也。令謂時禁也。慶謂休其善也。恵謂恤其不足

也。』

③窮理詠乾元 「窮理」は天下の道理をきわめる。『周易』説

卦伝に「昔者聖人之作易也、幽贊於神明而生蓍。参天兩地而

倚數。觀變於陰陽而立卦、發揮於剛柔而生爻、和順於道德而

理於義、窮理盡性以至於命（命者生之極。窮理則盡其極也。）」

「乾元」は天をいう。ここは万物を生む天の働きのことか。

「詠」は次句の「順」と同じく動作の主体が民で、民衆がたた

えると解した。「詠」はあるいは「永」に通じて、天の作用が

とこしえに続くことをいうか。『周易』乾に「彖曰、大哉乾

元、萬物資始、乃統天。」

④垂訓順帝則 民が天帝の道にしたがうよう、天子が教えを

垂れることをいうか。嵇康「答釈難宅無吉凶撰生論」に「夫

先王垂訓、開端中人。言之所樹、賢愚不違、事之所由、古今

不忒、所以致教也。」「毛詩」大雅・皇矣に「帝謂文王、予懷

明德。不大聲以色、不長夏以革。不識不知、順帝之則（箋云、

……不長諸夏以變更王法者、其爲人不識古不知今、順天之法

而行之者、此言天之道尚誠實貴性自然）。」「この歌は「列子」

仲尼にも載せる。

⑤侔四時 季節のはたらきに匹敵し、時機をあやまたないこ

とをいう。成公綏「晋四箱歌十六篇」に「明燿參日月、功化

侔四時」と既出。

⑥玄默 人智には計り知れない奥深さをいうか。『淮南子』主

術訓に「太一之精、通於天道。天道玄默、無容無則、大不可

極、深不可測、尚與人化、知不能得」揚雄「長楊賦」に「且

人君以玄默爲神、澹泊爲德、今樂遠出以露威靈、數搖動以罷

車甲、本非人主之急務也。」

⑦德澤被八紘 『毛詩』小雅・車輦の序に「大夫刺幽王也。褒

姒嫉妬、無道並進、讒巧敗國、德澤不加於民。」揚雄「解難」

に「日月之經不千里、則不能燭六合、燿八紘（師古曰、燭、

照也。六合、謂天地四方。八紘、八方之綱維也）。」「

⑧乾寧軌萬國 『周易』乾に「彖曰、大哉乾元……乾道變化、

各正性命、保合大和、乃利貞。首出庶物、萬國咸寧。」

皇猷^① 威熙泰^②

禮儀煥帝庭^③ 要荒服遐外^④

被髮襲纓冕^⑤ 左衽回衿帶^⑥

天覆地載^⑦ 流澤汪濊^⑧

聲教布護^⑨ 德光大^⑩

皇猷^① 緝^{かが} 緝^み 威熙泰たり

禮儀 帝庭に煥とし 要荒 遐外に服す

被髮 纓冕を襲ね 左衽 衿帶を回らす

天は覆い地は載せ 澤を流すこと汪濊たり

聲教 布護たり 德は光大なり

大いなるはかりごとが光りかがやき、民はみなゆつたりとやわらいでいる。

礼儀が整つて帝都の宮廷にかがやき、要服や荒服の異民族が地の果てで服従している。

髪を振り乱した者も冠を着け、左前に着物を着る者も帯を締めている。

天が覆い地が載せる世界中に、恩沢が広く豊かにあふれる。

名声と教化があまねく行きわたり、天子の徳は広大にかがやく。

○押韻 「泰・外・帶・濊・大」は去声9「泰」。

①皇猷緝 皇帝のはかりごとや教化がかがやく。「皇猷」は「王猷（猶）」と同義。『毛詩』大雅・常武に「王猶允塞、徐方既來。」「緝」は、あるいは継ぐの意か。『毛詩』大雅・文王に「穆穆文王、於緝熙敬止。假哉天命、有商孫子（穆穆、美也。緝熙、光明也）。」

②咸熙泰 ことごとくゆつたりと安らか。陳劭「箏賦」（「初學記」一六）に「總八風而熙泰、羌貫徹而洞靈。」「尚書」堯典に「帝曰、咨汝羲暨和。朞、三百有六旬有六日、以閏月定四時、成歲。允釐百工、庶績咸熙（咸、皆。熙、廣也。言定四時成歲歷、以告時授事、則能信治百官、衆功皆廣、歎其善）。」

③禮儀煥帝庭 「禮儀」は礼のきまりと儀式の作法。『毛詩』

小雅・楚茨に「獻醑交錯、禮儀卒度（度、法度也）。」「尚書」金縢で天にいる周の王への祈禱で「乃元孫、不若旦多材多藝。不能事鬼神。乃命于帝庭、敷佑四方、用能定爾子孫于下地」というのは、天帝の宮を指す。ここは天子の宮廷に解した。

④要荒服遐外 「要服」「荒服」は古代に王都からの遠近で分けた五服のうち、四番目と五番目に遠い地。ここはその地に住む異民族を指す。『尚書』禹貢に「五百里要服（綏服外之五百里。要東以文教）、三百里夷、二百里蔡。五百里荒服（要服外之五百里、言荒又簡略）、三百里蠻、二百里流。」「週外」はるか遠方の地。『三国志』呉書・賀邵伝の注に引く虞預『晉書』に、賀循を推薦した上表文を載せ「賀循德量遠

茂、才鑒清遠、服膺道素、風操凝峻。歷踐三城、刑政肅穆、守職下縣、編名凡萃、出自新邦、朝無知己、恪居遐外、志不自營。」

⑤被髮襲纓冕 左衽回衿帶 「被髮」はまげを結わずに髪をふりみだす。「左衽」は左前の服を着る。ともに夷狄の風俗。底本は「左」を「在」に作る。「襲」は重ね着をする。「纓冕」は冠のひもを結ぶ。「冕」は礼式用のかんむり。「衿帶」は着物の帯。ともに礼装の一。『論語』憲問に「微管仲、吾其被髮左衽矣。」「漢書」終軍伝に「若此之應、殆將有解編髮、削左衽、襲冠帶、要衣裳、而蒙化者焉。」「孟子」離婁下に「今有同室之人鬪者、救之、雖被髮纓冠、而救之可也。鄉鄰有鬪者、被髮纓冠、而往救之、則惑也。雖閉戸可也。」曹植「雜詩」其四「玉台新詠」二二に「束身奉衿帶、朝夕不墮傾。儻願終顧眄、永副我中情。」

⑥天覆地載 『礼記』中庸に「舟車所至、人力所通、天之所覆、地之所載、日月所照、霜露所隊、凡有血氣者、莫不尊親、故

曰配天。」

⑦汪濊 豊富なさま。双声の語。「郊祀歌十九章」赤蛟「漢書」礼楽志に「延壽命、永未央。杳冥冥、塞六合、澤汪濊、輯萬國（師古曰、……汪濊、言饒多也。濊音於廢反、又音烏外反）。」

⑧聲教布護 天子の名声と教化が広く及ぶ。「布護」は「布護」に通じる。疊韻の語。『尚書』禹貢に「東漸于海、西被于流沙、朔南暨聲教、訖于四海（此言五服之外、皆與王者聲教而朝見）。」司馬相如「上林賦」（『漢書』本伝）に「布護閭澤、延曼太原（郭璞曰、布護猶布露也）。」張衡「東京賦」に「敬愼威儀、示民不偷、我有嘉賓、其樂愉愉、聲教布護、盈溢天區（布護、猶散被也。天區、謂四方上下也。言天子教愛及之）。」

⑨德光大 成公綏「晋四箱歌」に「圖書煥炳、金石有徵。德光大、道熙隆。」と既出。『周易』坤の象伝に「坤厚載物、德合无疆。含弘光大、品物咸亨。」

開元辰^① 畢來王^②

開元の辰^と 畢く王に來たる^{いひいひ}

奉貢職^③ 朝后皇^④

貢職を奉じ 后皇に朝す

鳴珩佩^⑤ 觀典章^⑥

珩佩を鳴らし 典章を觀る

樂王度^⑦ 說徽芳^⑧

王度を樂しみ 徽芳を説ぶ^{よまう}

陶盛化^⑨ 游太康^⑩

盛化に陶し 太康に遊ぶ

丕昭明 永克昌^⑪

丕^{おほ}いに昭明にして 永えに克昌ならん

一年の始まりである元旦に、諸侯がこぞつて王のもとに参内する。

貢ぎものを献上して、皇帝に朝見する。

帯び玉を鳴らして、儀式の規律をながめ見る。

王者としての制度を樂しみ、すばらしい徳をよろこぶ。

さかんな教化をよろこび、安寧をたのしむ。

大いにかがやき、永遠にいや増しに榮えるように。

○押韻 「王・章・芳・昌」は下平10「陽」、「皇・康」は下平11「唐」。

①開元辰 「開元」は元日。顏延之「宋南郊雅樂登歌三篇」(『宋

書』樂志二詠注稿(二)一〇六頁)に「開元首正、禮交樂

舉。」あるいは「元辰を開く」とよむか。『礼記』月令の孟春

の「乃擇元辰、天子親載耒耜、措之于參保之御間、帥三公九

卿諸侯大夫、躬耕帝藉(元辰、蓋郊後吉辰也)」は、上辛の次

の辛の日で、吉日をいう。荀勗「正旦大会王公上寿酒歌」に

「踐元辰、延顯融」(同・訳注稿(三))「一三二頁」、張華「食拳東西箱樂詩」に「三正元辰、朝慶麟萃」(同・訳注稿(四))「五二頁」。

②來王 諸侯や異民族が天子に仕える。『尚書』大禹謨に「罔違道以干百姓之譽、罔拂百姓以從己之欲、無怠無荒、四夷來王。」

③奉貢職 貢納する。『史記』漢興以來諸侯王年表に「諸侯稍微。大國不過十餘城、小侯不過數十里、上足以奉貢職、下足以供養祭祀、以蕃輔京師。」

④后皇 「郊祀歌十九章」后皇十四の「后皇嘉壇、立玄黃服(師古曰、壇、祭壇也。服、祭服也)。物發冀州、兆蒙祉福」は、皇天后土を指す。ここは天子を指すか。

⑤鳴珩佩 「珩」は帯び玉の上部につける飾り玉。「珩佩」でさまざまな玉をまとめた佩玉をいうか。『西京雜記』二に「漢諸陵寢、皆以竹爲簾、簾皆爲水紋及龍鳳之像。昭陽殿織珠爲簾、風至則鳴、如珩佩之聲。」『毛詩』鄭風・女曰鷄鳴に「知子之來之、雜佩以贈之(雜佩者、珩・璜・琚・瑀・瑯・衡牙之類)。」『礼記』玉藻に「古之君子必佩玉。右徵角、左宮羽。……故

君子在車則聞鸞和之聲、行則鳴佩玉。」

⑥典章 制度、法令。王韶之「宋四箱樂歌五篇」に「元正肇始、典章暉明。萬方畢來賀、華裔充皇庭」(本訳注稿八八頁)と既出。

⑦王度 王にふさわしい法度。荀勗「大豫舞歌」に「潛邈幽遐、式遵王度」(『宋書』樂志二訳注稿(三))「一七一頁」、張華「食拳東西箱樂詩」に「崇夷簡、尚敦德。弘王度、表遐則」(同・訳注稿(四))「八二頁」。張衡「東京賦」にも見える。あるいは広い度量をいうか。『左伝』昭公十二年に「其詩曰、祈招之愔愔、式昭德音。思我王度、式如玉、式如金。」

⑧徽芳 美德をたとえる。あるいは功績をいうか。班固「典引」の「將紆萬嗣、揚洪輝、奮景炎、扇遺風、播芳烈、久而愈新、用而不竭」の「芳烈」に近いかもしれない。

⑨陶盛化 盛大な教化をたのしむ。謝靈運「酬從弟惠連」詩に「儻若果歸言、共陶暮春時。」あるいは「陶」はやしなう意で、教化を享受すると受身に読むか。『三國志』吳書・三嗣主伝・孫皓の注に引く「会稽邵氏家伝」に邵疇の遺言として「置辭曰、疇生長邊陲、不閑教道、得以門資、廁身本郡、踰越儕類、

位極朝右、不能贊揚盛化、養之以福。」

⑩游太康 太平の世を氣ままにゆく。「莊子」大宗師に「孔子曰、彼游方之外者也、而丘游方之内者也。」魏・曹睿「野田黃雀行」(『文選』二二・「張子房詩」注引)に「四夷重譯貢、百姓謳吟詠太康。」

⑪克昌 子孫が栄えるようにする。『毛詩』周頌・離に「燕及皇天、克昌厥後。綏我眉壽、介以繁祉」(箋云、……又能昌大其子孫安助之、以考壽與多福祿)。傅玄「饗天地五郊歌」に「克昌厥後、永言保之」(『宋書』樂志二詠注稿(二)) 八八頁)と既出。

惟永初 ^①	德不顯 ^②	惟れ永初	德丕 ^③ に顯 ^④ わる
齊七政 ^⑤	敷五典 ^⑥	七政を齊 ^⑦ え	五典を敷 ^⑧ く
彝倫序 ^⑤	洪化闡 ^⑥	彝倫序 ^⑦ で	洪化 ^⑧ 闡 ^⑨ く
王澤流	太平始 ^⑦	王澤流 ^⑧ れ	太平始 ^⑨ む
樹聲教	明皇紀 ^⑧	聲教を樹 ^⑨ て	皇紀を明らかにす
和靈祇	恭明祀 ^⑨	靈祇を和 ^⑩ し	明祀を恭しくす
衍景祚	膺嘉祉 ^⑩	景祚 ^⑪ を衍 ^⑫ き	嘉祉 ^⑬ を膺 ^⑭ く

永えの初めたる永初の年に、天子の徳は大いにかがやく。

日月五星の運行をととのえ、五常を全土にしきのべる。

民の守るべき道は順序だち、大きな教化は広まりゆく。

帝王の恩沢が流れ行き、太平の世が始まる。

名声と教化を確立し、大いなる紀綱を明らかにする。

天地の神を和ませ、重要な祭祀をうやうやしくとりおこなう。
大きなさいわいを後世に伝え、民はよき幸を受けんことを。

○押韻 「顯・典」は上声27「銑」、「闡」は上声28「彌」。「始・紀・祀・社」は上声6「止」。

①惟永初 「永初」は南朝宋の武帝の年号。四二〇年—四三二年。

②德不顯 徳が大いに明らか。『尚書』洛誥に「〔成〕王若曰、公、明保予冲子。公稱丕顯德、以予小子、揚文武烈、奉答天命、和恆四方民、居師〔言公當留學大明徳、用我小子、褒揚文武之業而奉順天〕。』

③齊七政 日月五星がひとつの星座にそろっていて、天が賛同していることを示す。『尚書』舜典に「正月上日、受終于文祖。在璿璣玉衡、以齊七政。」傳玄「晋四箱樂歌三首」其一二

「『宋書』樂志二詠注稿（三）」一〇〇頁）に既出。

④敷五典 五常（義・慈・友・恭・孝）の教えをのべる。『尚書』周官に「司徒掌邦教。敷五典、擾兆民（地官卿司徒主國教化。布五常之教、以安和天下衆民、使小大皆協睦）。』

⑤彝倫序 民の常道が秩序立っている。『尚書』洪範に「王乃

言曰、嗚呼、箕子、惟天陰隲下民、相協厥居。我不知其彝倫攸敘〔言我不知天所以定民之常道理次敘。問何由〕。』荀勗「晋四箱樂歌」邦国に「思我皇度、彝倫攸序」〔『宋書』樂志二詠注稿（三）〕一二八頁）と既出。

⑥洪化闡 「洪化」は、皇帝による大いなる教化。成公綏「晋四箱歌十六篇」に「播仁風、流惠康。邁洪化、振靈威」〔『宋書』樂志二詠注稿（四）〕一三四頁）と既出。「闡」は明らかに広まる。

⑦王澤流 太平始 「王澤」は君王の恩沢。張華「晋四箱樂歌」に「八紘一、六合寧。六合寧、承聖明。王澤洽、道登隆。綏函夏、總華戎」〔『宋書』樂志二詠注稿（四）〕八一頁）と既出。韋昭「吳鼓吹曲十二篇」第十二「〔宋書』樂志四）に「玄

化者、言上修文訓武、則天而行、仁澤流洽、天下喜樂也。」

『三國志』呉書・三嗣主伝・孫皓に「鄱陽言歷陽山石文理成字、凡二十、云『楚九州渚、呉九州都、揚州土、作天子、四世治、太平始』。」

⑧樹聲教 明皇紀 『尚書』禹貢に「東漸于海、西被于流沙、朔南暨聲教、訖于四海。」「聲教」は本訳注稿一〇六頁にも既出。

「皇紀」は皇帝が統治する制度や体系。『後漢書』祭祀志下の賛に「賛曰、天地禋郊、宗廟享祀、咸秩無文、山川具止。淫乃國紊、典惟皇紀。肇自盛敬、孰崖厥始。」

⑨和靈祇 恭明祀 「和靈祇」は神靈をやわらげる。張衡「南都賦」に「於其宮室、……聖皇之所逍遙、靈祇之所保綏」、李善注に「靈祇、天地之神也。」「三國志」魏書・文帝紀注に引

禮有容 樂有儀^①

禮に容有り 樂に儀有り

金石陳 牙羽施^②

金石 陳なり 牙羽 施さる

邁武護 均咸池^③

武護を邁^すぎ 咸池に均^{ひと}し

歌南風^④ 舞德稱^⑤

南風を歌い 德^{かな}の稱^なうを舞う

く「獻帝伝」に「王令曰、……若夫唐堯・舜・禹之蹟、皆以聖質茂德處之、故能上和靈祇、下寧萬姓、流稱今日。」

「明祀」は祖先から受け継いだ神の祭り。『左伝』僖公二十一年に、母の成風が僖公に言ったことばに「崇明祀、保小寡、周禮也（明祀、大睥有濟之祀）。」「後漢書」章帝紀に「壬戌、詔曰、朕聞明君之德、啓迪鴻化、緝熙康乂、光照六幽、訖惟人面、靡不率俾、仁風翔于海表、威霆行乎鬼區。然後敬恭明祀、膺五福之慶、獲來儀之貺。」

⑩衍景祚 膺嘉祉 「衍景祚」は大いなる帝位を伝えることをいう。成公綏「晋四箱歌十六篇」に「超百代、揚休烈、流景祚、顯萬世」（『宋書』樂志二訳注稿（四）一四〇頁）と既出。「嘉祉」はよき幸い。司馬相如「難蜀父老」に「今封疆之内、冠帶之倫、咸獲嘉祉、靡有闕遺矣。」

文武煥^⑦ 頌聲興^⑧

文武煥たり 頌聲興る

礼にはすぐれた容儀かたちがあり、楽には礼儀になつた作法がある。

金石の楽器が設置され、楽器を懸ける台に飾りが居ならぶ。

周の武王や殷の湯王の韶・濩の楽を超え、堯の咸池の舞と肩をならべる。

舜の南風のごとき楽をうたい、徳のすぐれた者をたたえて舞にあらわす。

文武ともにかがやき、賛美する民の声が響き起こる。

○押韻 「儀・施・池」は上平5「支」。「稱・興」は下平16「蒸」。

①禮有容 樂有儀 「禮有容」は礼儀になつた姿を重んじる

ことをいう。傳玄「晋宗廟歌十一篇」(『宋書』樂志二詠注

稿(二)「一〇一頁」に「四海來格、禮儀有容」、曹毗「四時

祠祀歌」(同・詠注稿(二)「一三六頁」)にも既出。『毛詩』周

頌・振鷺に「振鷺于飛、于彼西雛。我客戾止、亦有斯容」(箋

云、白鳥集于西雛之澤。言所集得其處也。興者喻杞宋之君

有潔白之德、來助祭於周之廟、得禮之宜也。其至止亦有此容、

言威儀之善如鷺然。』

②金石陳 牙羽施 鐘や磬をつらね、鐘磬を懸ける部分に装

飾を施し、その上に飾りとして羽を立てる。成公綏「晋四箱

歌十六篇」に「建五旗、羅鐘虡。列四縣、奏韶武。鐸金石、

揚旌羽」(『宋書』樂志二詠注稿(四)「一三七頁」)と既出。

『毛詩』周頌・有瞽に「有瞽有瞽、在周之庭。設業設虡、崇

牙樹羽」(崇牙、上飾。卷然可以縣也。樹羽、置羽也。』

③邁武護 「護」は「濩」に通じる。「武濩」は周の武王の樂と

殷の湯王の樂。『周礼』春官・大司樂に「以樂舞教國子。舞

雲門・大卷・大咸・大磬・大夏・大濩・大武。以六律・六同・

五聲・八音・六舞、大合樂以致鬼神示、以和邦國、以諧萬民、

以安賓客、以説遠人、以作動物（此周所存六代之樂。……大濩、湯樂也。湯以寛治民而除其邪、言其德能使天下得其所也。大武、武王樂也。武王伐紂以除其害、言其德能成武功。）」

④咸池 堯の音楽。『周礼』春官・大司楽に「乃奏黄鍾、歌大呂、舞雲門、以祀天神。乃奏大蕤、歌應鍾、舞咸池、以祭地示（咸池、大咸也。地祇所祭、於北郊、謂神州之神及社稷。）」

⑤歌南風 「南風」は舜がうたつたとされる歌。民衆のうらみを解消して、財を富ませることをうたつたという。『礼記』楽記に「昔者舜作五弦之琴、以歌南風。變始制樂、以賞諸侯（變、欲舜興天下之君共此樂也。南風、長養之風也。以言父母之長養已、其辭未聞也。變、舜時典樂者也。書曰、夔命女典樂。）」『孔子家語』弁樂解に「昔者舜彈五弦之琴、造南風之詩、其詩曰、南風之薰兮、可以解吾民之慍。南風之時兮、可以阜吾民之財兮。」

王道純 德彌淑^①
寧八表 康九服^②
道禮讓^③ 移風俗^④

王道純にして 德彌いよ淑し^①
八表を寧らかにし^② 九服を康んず^③
禮讓を道き^④ 風俗を移す^⑤

⑥舞德稱 「德稱」は德のある諸侯や民衆を推薦して挙げること。ここは德がすぐれている者を帝が舞に表現したと解した。舞が德の内容をあらわすものであることは『礼記』楽記に「故觀其舞、知其德。聞其謚、知其行也。」「尚書」君奭に「矧威奔走、惟茲惟德稱、用乂厥辟（王猶秉德憂臣、況臣下得不皆奔走、惟王此事、惟有德者舉用治其君事。）」

⑦文武煥 文武の両面において輝きを発する。荀勗「食举楽東西箱歌十二篇」猗歟に「愼徽五典、帝載是勲。文武發揮、茂建嘉勳」（『宋書』樂志二 詠注稿（三）一四四頁）と既出。
⑧頌聲興 太平を称賛する民の声がおこる。『公羊伝』宣公十五年に、十人で公田一を保つことについて「什一者、天下之中正也。什一行而頌聲作矣（頌聲者、太平歌頌之聲、帝王之高致也。）」『史記』周本紀に「興正禮樂、度制於是改、而民和睦、頌聲興。」

移風俗 永克融^⑥

風俗を移し 永えに克く融くす^{なが}

歌盛美^⑦ 造成功^⑧

盛美を歌いて 成功を造し^な

詠微烈^⑨ 邈無窮^⑩

微烈を詠じて 邈として窮まり無し

右食舉歌十章

右食舉歌十章

黃鍾・太簇二箱更作^⑪。黃鍾作晨義・體至和・王道・開元辰・禮有容五曲。太簇作五玉・懷荒裔・皇猷緝・惟永初・王道純

五曲。

黃鍾・太簇の二箱 更^なこも作す。黃鍾は晨義・體至和・王道・開元辰・禮有容の五曲を作す。太簇は五玉・懷荒裔・皇猷緝・惟永初・王道純の五曲を作す。

帝王の道はまじり氣がなく、徳はますますすぐれる。

地の果てまで安寧に、国内はすべて安らかに平定した。

礼をわきまえた謙讓の徳に導き、風俗をよき方向に手引きする。

風俗をよき方向に手引きし、とこしえによくつづく。

盛大な美をうたい、功業を成し遂げて、

すばらしき功烈をうたいあげ、はるか遠くまでつづくように。

右、食舉歌十章。

黃鍾と太簇の二つのボックスが交互に演奏する。黃鍾は「晨義」「體至和」「王道」「開元辰」「礼有容」の五曲を奏し、太簇は「五玉」「懷荒裔」「皇猷緝」「惟永初」「王道純」の五曲を奏する。

○押韻 「淑・服」は入声1「屋」、「俗」は入声3「燭」。「融・功・窮」は上平1「東」。

①王道純 德彌淑 王として統治する道が純粹で、徳がすぐ

れている。「純」はあるいは「大い」の意か。『漢書』鼂錯伝に「所爲天下興利除害、變法易故、以安海內者、大功數十、皆上世之所難及、陛下行之、道純德厚、元元之民幸矣。」『後漢書』安帝紀に「殤帝崩、……皇太后詔曰、先帝聖德淑茂、早弃天下。」

②八表 八方の外。魏明帝「苦寒行」(『宋書』樂志三)に「光我=皇=祖=、軒=耀=同=其=榮=。遺化布四海、八表以肅清。四解」

③康九服 「九服」は王畿の外、五百里ごとに九つに分けた地域。内から順に侯服・甸服・男服・采服・衛服・蠻服・夷服・鎮服・藩服。『周礼』夏官・職方氏に「乃辨九服之邦國。」『宋書』礼志三に「明帝泰始二年(四六六)十一月辛酉、詔曰、朕載新寶命、仍離多難、戎車過駕、經略務殷、禋告雖備、弗獲親禮。今九服既康、百祀咸秩、宜聿遵前典、郊謁上帝。」

④禮讓 礼による謙遜。『論語』里仁に「子曰、能以禮讓爲國

乎、何有。不能以禮讓爲國、如禮何。」

⑤移風俗 習俗をよい方向に改める。「毛詩大序」に「先王以是經夫婦、成孝敬、厚人倫、美教化、移風俗。故詩有六義焉。」張華「晋四箱樂歌十六篇」に「聲教洋溢、惠滂流。惠滂流、移風俗」(『宋書』樂志二詠注稿(四)「七一頁」と既出。

⑥融 ながい。王韶之「宋四箱樂歌五篇」食舉歌其二に「樂有文、禮無倦。融皇風、窮一變」(本詠注稿九四頁)、同・其四に「昭明有融、繁嘉慶」(本詠注稿一〇二頁)と既出。

⑦歌盛美 「歌」の主体は後の句の「詠」と同様に民衆と解した。「盛美」は盛んでうるわしい。『史記』循吏列伝・孫叔敖に「三月爲楚相、施教導民、上下和合、世俗盛美、政緩禁止、吏無姦邪、盜賊不起。」

⑧造成功 『尚書』禹貢に「禹錫玄圭、告厥成功。」『宋書』樂志一に「昔蕭韶九奏、親於虞帝之庭、武・象・大武、亦振於文・武之阼。特以顯其德教、著其成功、天下被服其光輝、習詠其風聲者也。」中華書局点校本は「造」を「告」に作る。

⑨徽烈 偉大な功業。「晋書」儒林伝に「及嬴氏慘虐、棄德任

刑、煬墳籍於埃塵、填儒林於坑穽、嚴是古之法、抵挾書之罪、先王徽烈、靡有孑遺。」

⑩無窮 『尚書』畢命に「公其惟時成周、建無窮之基、亦有無

窮之聞。」司馬相如「難蜀父老」に「休烈顯乎無窮、聲稱浹乎

于茲。」

⑪黃鍾・太簇二箱更作 「黃鍾」「太簇」は十二律の陽声六律の

うち、第一と第二。「南齊書」樂志に南齊の元会儀礼の歌を

引いて「右黃鍾先奏晨儀篇、太簇奏五玉篇、餘八篇二箱更奏

之。」底本は「五玉」を「五五」に、「五曲」を「王曲」に作るが、誤りと考えて改めた。

(釜谷武志)

宋前舞後舞歌^①二篇

王韶之造^②

宋の前舞・後舞歌二篇 王韶之造る

於赫景明^③ 天監^④是臨

於^あ赫たる景明 天監 是れ臨めり

樂來伊陽 禮作^⑤惟陰

樂の來たる 伊^これ陽 禮^なの作る 惟れ陰

歌自德富 俾由^⑥功深

歌は德の富めるに自^より 俾は功の深きに由る

庭列宮縣 陞羅瑟琴

庭には宮縣を列し 陞^{きよはし}には瑟琴を羅^{つら}ぬ

翻^⑦簫繁會 笙磬^⑧諧音

翻^{くうぐ}簫繁會し 笙磬 音を諧^{ととの}う

簫韶^⑨雖古 九成^⑩在今

簫韶 古なりと雖も 九成 今に在り

道志和聲 德音^⑪孔宣

志^{みち}を道^{みち}びき聲を和せしめ 德音 孔^{わお}いに宣^{のたま}ふ

光我帝基 協靈配乾^⑫

我^わが帝基を光^あいにし 靈^{かな}に協^あい乾に配す

儀形六合^⑬ 化穆^⑭自然

六合に儀形し 化穆 自然り

如彼雲漢 爲章于天^⑭

彼の雲漢の如く 章を天に爲す

熙熙萬類^⑮ 陶和當年^⑯

熙熙たる萬類 當年に陶和す

擊轅中韶^⑰ 永世弗騫^⑱

轅^{ながえ}を撃ちて韶^あに中たる 永世^か騫げざれ

右前舞歌一章 晉正徳之舞^⑲

蕤賓箱^㉑作

右は前舞歌一章 晉の正徳の舞なり

蕤賓箱^㉑作す

ああ、明々と光り輝く日の光、天のまなざしが人間世界に降り注ぐ。

音楽が奏でられればそれは陽であり、礼容が整えばそれは陰である。

歌は徳の豊かさに触れて生まれ、舞は功の奥深さに由来するものだ。

庭には宮懸が並べられ、階には琴瑟が連ねられる。

旗飾りや笛を手にした舞人たちが多彩に集い、笙や磬の楽器が音を調和させる。

舜の音楽「蕭韶」は古のものではあるが、今このすばらしい世に九たび演奏される。

人々の心を善へと導き、五声を調和させ、天下泰平の音楽が大いに奏でられる。

我らが帝業の礎を大いに輝かせ、神霊と響きあい、天の徳と並ぶものとするのである。

天地四方に規範を示し、教化して和睦へと導くあり様は自然である。

それはまるで、かの天の川が、天上に美しい文様を織りなしているさまに等しい。

和やかに楽しみあう万物は、今この時、陶冶され調和した状態にある。

轅を打ち鳴らす音が舜の音楽に合致する、この和平が永遠に欠けることのないよう祈る。

右は前舞の歌辞一章。晋の「正徳」の舞である。蕤賓のオーケストラボックスが演奏する。

○押韻 「臨・陰・深・琴・音・今」は下平21「侵」。「宣・乾・然・鶯」は下平2「仙」、「天・年」は下平1「先」。

①宋前舞後舞歌 『宋書』樂志二に、宋の武帝の永初元年（四

二〇）七月、黃門侍郎の王韶之による雅樂の新歌辭七首が、同年十二月、王韶之の改作した大樂の諸歌舞詩三十二章が施用されたことに続けて、「又改正德舞曰前舞、大豫舞曰後舞」とある。同樂志二に、「晉正德大豫二舞歌二篇」として、傳玄、荀勗、張華の作を収載する。『宋書』樂志二詠注稿（四）九八頁注①を参照。

②王韶之 『宋書』樂志二詠注稿（二）一四一頁注②を参照。

③於赫景明 「於」は感嘆詞。「赫」は輝かしいさま。『毛詩』

商頌・那に「於赫湯孫、穆穆厥聲。庸鼓有數、萬舞有奕。」傳玄「晉四箱樂歌三首・上寿酒歌」に「於赫明明、聖德龍興」と既出。『宋書』樂志二詠注稿（三）一〇四頁注①を参照。「景明」は、日光の明るさをいう。用例が少ない語。

④天監 天が人間世界を見守ること。『毛詩』大雅・大明に「天監在下、有命既集。」傳玄「晉四箱樂歌三首・正旦大会行礼歌」にも「天鑒有管、世祚聖皇」と。『宋書』樂志二詠注稿

（三）一〇一頁注②を参照。

⑤樂來伊陽 禮作惟陰 礼・樂をそれぞれ陰・陽に結び付ける

例として、『白虎通』礼樂に、「太平乃制禮作樂何。夫禮樂、所以防奢淫。天下人民飢寒、何樂之乎。功成作樂、治定制禮。樂言作、禮言制何。樂者、陽也。動作倡始、故言作。禮者、陰也。繫制於陽、故言制。樂象陽、禮法陰也。」

⑥歌自德富 儻由功深 同じ発想が、傳玄「晉宗廟歌十一篇・

祠廟饗神歌二篇」其二にも「舞象功、歌詠德」と見えている。

『宋書』樂志二詠注稿（二）一〇四頁注⑬を参照。

⑦翻翻繁會 「翻」は、羽舞に用いる旗飾り。『毛詩』王風・君

子陽陽に「君子陶陶、左執翻、右招我由敖」、毛伝に「翻、籀也、翳也」、鄭箋に「翳、舞者所持、謂羽舞也。君子左手持羽、右手招我、欲使我從之。」「籀」は、舞人が手にする六孔の笛。『毛詩』邶風・簡兮に「左手執籀、右手秉翟」、毛伝に「籀、六孔。翟、翟羽也。」「繁會」は、多彩なものが集まって響きあうこと。『楚辭』九歌・東皇太一に「五音紛兮繁會。」

ここでは多彩な舞人たちの集まるさまをいう。

⑧笙磬諧音 「笙磬」が舞と対句を為す例として、荀勗「食舉

樂東西箱歌十二篇・既宴」に「笙磬詠德、萬舞象功」と。『宋書』樂志二詠注稿(三)「一五七頁注⑦を参照。『諧音』は、音を調和させる。

⑨簫韶雖古 九成在今 「簫韶」は、舜が作ったという樂曲。

阿句は、『尚書』益稷に「簫韶九成、鳳皇來儀」、偽孔伝に「韶、舜樂名。言簫見細器之備」とあるのを踏まえる。荀勗「食舉樂東西箱歌十二篇・嘉会」に「簫韶九成」、成公綏「晋四箱歌十六篇・雅樂正旦大会行礼詩十五章」其三に「簫韶作、詠九成」と。『宋書』樂志二詠注稿(四)「一一九頁注④を参照。

⑩道志和聲 德音孔宣 「道志」は、音楽によって人々の心を

善き方向へ導く。『礼記』礼器に「禮也者反其所自生、樂也者樂其所自成。是故先王之制禮也以節事、脩樂以道志(勸之善也)。」『和聲』は、『礼記』樂記にいう「天下大定、然後正六律、和五聲、弦歌詩頌、此之謂德音」の「和五聲」を響かせる。「德音」は、天下が定まった後に演奏される音楽。前掲『礼記』樂記を踏まえる。張華「晋四箱樂歌十六篇・食舉

樂東西箱歌十一章」其十一に「邁德音、流英聲」と既出。『宋

書』樂志二詠注稿(四)「八三頁注⑤を参照。曹毗「晋江左宗廟歌十三篇・歌憲宗成皇帝」にも「式宣德音」と見え、そこでは「德音」を、仁徳にあふれた天子の言葉と解釈している。要再考。「孔」は、非常に。『爾雅』釈言に「孔、甚也。」

⑪配乾 「乾」は、天。天に並ぶ。『尚書』君奭に「故殷禮陟配

天、多歷年所」、『礼記』中庸に「博厚配地、高明配天、悠久無疆。」

⑫儀形六台 「儀形」は、模範を示す。『毛詩』大雅・文王に

「儀刑文王、萬邦作孚(刑、法。孚、信也)。」「形」は「刑」に通ず。「六合」は、天地四方。『宋書』樂志二詠注稿(四)「八四頁注⑧を参照。

⑬化穆 教化して、和やかに睦み合う状態へと導く。用例と

して、『宋書』后妃伝(孝懿肅皇后)に、「伏惟太妃母儀之德、化穆不言、保翼之訓、光被洪業」と。

⑭如彼雲漢 爲章于天 『毛詩』大雅・棫櫟に「倬彼雲漢、爲

章于天」、毛伝に「雲漢、天河也」、鄭箋に「雲漢之在天其爲文章、譬猶天子爲法度于天下」とあるのを踏まえる。

⑮熙熙萬類 「熙熙」は、和やかに楽しげなさま。『漢書』礼楽

志、「郊祀歌十九章・青陽」に「衆庶熙熙」、顔師古注に「熙熙、和樂貌也。」一句の類似表現として、司馬相如「封禪文」

（『文選』卷四八）に「萬物熙熙、懷而慕思」、遡つては『逸周書』太子晋解に「穆穆虞舜、明明赫赫、立義治律、萬物皆作、分均天財、萬物熙熙、非舜而誰能」と。

⑯陶和當年 「陶和」は、陶冶され調和した状態にあること。

用例として、晋の袁宏『後漢紀』孝章皇帝紀上に「古之哲王、知治化本於天理、陶和在於物類」と。「當年」は、その年。たとえば、『韓詩外伝』卷六に「先生者當年霸、楚莊王是也。後生者三年而復、宋昭公是也。」

⑰擊轅中韶 「擊轅」は、庶民が轅を打ち鳴らす音。「韶」につ

いては、前掲注⑨を参照。同一句が、崔駰「西巡頌表」（『太平御覽』卷五八八）に、「唐虞之世、樵夫牧監、擊轅中韶、感於和也」と見える。

⑱永世弗騫 「騫」は、欠ける。『毛詩』小雅・天保に、「如南山之壽、不騫不崩（騫、虧也）。」『尚書』微子之命にいう「作

賓于王家、與國咸休、永世無窮」をも響かせる。

⑲正德之舞 前掲注①を参照。

⑳蕤賓箱 十二律のひとつである「蕤賓」を主音として構成されたオーケストラボックス。

假樂聖后 寔天誕德^②

積美^③自中 王猷^④四塞^④

龍飛在天^⑤ 儀形萬國^⑥

欽明惟神^⑦ 臨朝淵默^⑧

不言之化^⑨ 品物咸德^⑩

告成于天^⑪ 銘勳是勒^⑫

假樂す 聖后 寔に天は德を誕べしむ

積美 中自りし 王猷 四に塞つ

龍飛びて天に在り 萬國に儀形す

欽明なること惟れ神のごとく 朝に臨みて淵默す

言わざるの化 品物 咸德とす

成を天に告げ 勳を銘じて是れ勒す

翼翼厥猶 娓娓其仁^⑬

翼翼たる厥の猶 娓娓たる其の仁

順命捫制 因定和神^⑭

命に順いて制を捫^つり 定まるに因りて神を和す

海外有截 九圍無塵^⑮

海外 截する有り 九圍 塵無し

冕塗司契 垂拱臨民^⑯

冕塗して契を司り 垂拱して民に臨む

乃舞大豫^⑰ 欽若天人^⑱

乃ち大豫を舞い 欽^つんで天人に若^{したが}う

純嘏孔休^⑲ 萬載彌新^⑳

純嘏^{はなは} 孔^うだ休^{るわ}し 萬載 彌々新たなり

右後舞歌一章 晉大豫之舞 蕤賓箱作

右は後舞歌一章 晉の大豫の舞なり 蕤賓箱 作す

よろこばしき聖天子、まことに天はこの天子の徳を大いに延べ広げた。

すばらしい仁徳が衷心から積み重ねられ、帝王としてのほかりごとが天下に満ちる。

龍が天に飛翔するように君臨し、万国に規範を示される。

敬虔で聡明なことは神のようで、朝政に臨んでは、深遠なる沈黙を守られる。

言葉を紹介さない無為自然の教化が施され、万物はみなありがたくその恩恵に浴している。

ことの成就を天に告げ、その勲功が金石に刻み付けられる。

恭しく慎み深いそのほかりごと、孜々として勤め励むその仁政。

天命に従って国家の制度を創り上げ、治世を安定させたことにより神の御心を和らげる。

四海の外の人々はうち揃って帰服し、国土の内は塵ひとつなく清らかだ。

冕旒をたらし、割り符を手にしつつ無為有徳の治を行い、両手をつかねて民たちに向かい合う。

そこで、我々は大豫の舞を舞って、謹んで天人たる皇帝陛下に従おう。

大いなる福のなんとすばらしいこと、万歳の後までも、これが永遠にいよいよ新たであり続けるよう祈る。

右は後舞の歌辞一章。晋の「大豫」の舞である。麋賓のオーケストラボックスが演奏する。

○押韻 「徳・塞・國・默・徳・勒」は入声25「徳」。「仁・神・塵・民・人・新」は上平17「眞」。

①假樂聖后 「假樂」は、慶賀し楽しませる。『毛詩』大雅・仮

樂に「假樂君子、顯顯令徳、宜民宜人、受祿于天」、毛伝に「假、嘉也」、鄭箋に「天嘉樂成王有光光之善徳。安民官人、皆得其宜、以受福祿於天。」「聖后」は、聖なる君主。

②誕徳 徳を大いに敷き広げる。『尚書』大禹謨に「帝乃誕敷

文徳（遠人不服、大布文徳以來之、舞干羽于兩階。」用例として、沈約「齊故安陸昭王碑文」（『文選』卷五九）に「膺期誕徳、絶後光前」、李善注に引く曹植「上文帝誄表」に「階青雲而誕徳。」

③積美 仁徳を積み重ねる。用例として、『荀子』王霸に「國

者天下之制（制字、王先謙『荀子集解』は衍字とす）利用也。人主者天下之利執也。得道以持之、則大安也、大榮也、積美之源也。」「尚書』盤庚上に見える「積徳」と同義。

④王猷四塞 「王猷」は、帝王のはかりごと。『毛詩』大雅・常

武に「王猶（猶、謀也）允塞、徐方既來。」「猷」は「猶」に同じ。一句の類似表現として、曹毗「晋江左宗廟歌十三篇・

歌太祖文皇帝」に「太祖齊聖、王猷誕融、仁教四塞、天基累崇」、荀勗「食舉樂東西箱歌十二章・嘉会」に「王猷允塞、萬

載無傾」、成公綏「晋四箱歌十六篇・雅樂正旦大会行礼詩十五章」其「一」に「流化罔極、王猷允塞」と。『宋書』樂志二詠注稿（四）一一三頁注⑥を参照。

⑤龍飛在天 『周易』乾卦、九五爻辞にいう「飛龍在天、利見

大人」を踏まえる。成公綏「晋四箱歌十六篇・雅樂正旦大会行礼詩十五章」其十五に「明明聖帝、龍飛在天」と既出。『宋書』樂志二詠注稿（四）一五〇頁注②を参照。

⑥儀形萬國 「儀形」は、前詩「前舞歌」に既出。注⑫を参照。

類似句として、張華『晋四箱樂歌十六篇・雅樂正旦大会行礼詩四章』其二に「成民立政、儀刑萬邦」と。『宋書』樂志二詁注稿（四）八九頁注⑥を参照。

⑦欽明惟神 「欽明」は、敬虔で聡明である。皇帝の徳を形容する常套語。『尚書』堯典に「欽明文思安安、允恭克讓、光被四表、格于上下。」「惟神」は、まるで神のようだという感嘆の辞。班固『兩都賦』（『文選』卷二）の「辟雍」詩に「洪化惟神。」

⑧淵默 無為自然を体现して、静かに沈黙を守る。『莊子』在宥に「故君子苟能无解其五藏、无擢其聰明、尸居而龍見、淵默而雷聲、神動而天隨、從容无爲而萬物炊累焉。」

⑨不言之化 言語を介さない無為自然の教化。『老子』第二章に「是以聖人處無爲之事、行不言之教。」

⑩品物咸徳 「品物」は、万物。一句は、『周易』坤卦、象伝に「坤厚載物、徳合无疆。含弘光大、品物咸亨」を意識する。「徳」は、「得」にも通ず。恩恵をありがたく受け取る。

⑪告成于天 「告成」は、事の完成を上へ報告する。表現としては、『毛詩』大雅・江漢に「告成于王」に近い。

⑫銘勳是勒 天子の勲功を金石に刻み付ける。張衡『東京賦』（『文選』卷三）に「高祖膺籙受圖、順天行誅、杖朱旗而建大號。……咸用紀宗存主、饗祀不輟、銘勳彝器、歷世彌光」、薛綜注に「銘、勒也。勒銘於宗廟之器于鐘鼎、萬祀彌益光明。」

⑬翼翼厥猶 娓娓其仁 「翼翼」は、恭しく慎むさま。『毛詩』大雅・大明に「維此文王、小心翼翼（箋云、小心翼翼、恭慎貌。）」「猶」は、はかりごと。前掲注④を参照。「娓娓」は、努め励むさま。『毛詩』大雅・文王に「翼翼文王、令聞不已（臺臺、勉也。）」「娓娓」は「臺臺」と音義通ず。「翼翼」と合

わせたかたちで、成公綏『晋四箱歌十六篇』の「雅樂正旦大会行礼詩十五章」其九に「娓娓翼翼、樂不及荒」と。

⑭順命協制 因定和神 「順命」は、天の命に従う。『周易』革卦、象伝に「湯武革命、順乎天而應乎人。」また、『漢書』董仲舒伝に引くその対策に「是故王者上謹於承天意、以順命也。下務明教化民、以成性也。」「制」は、「創」に同じ。「創制」は、天下を統治する制度を創出する。『管子』霸言篇に「霸王之形、象天則地、化人易代、創制天下、等列諸侯、賓屬四海、時匡天下。」「因定和神」は、治世が定まることで、神の

御心を和らげる。両句の表現は、班固「典引」(『文選』巻四八)にいう「順命以創制、因定以和神」を踏まえる。

⑮海外有截 九圍無塵 上の句は、四海の外も、うち揃って帰服することという。『毛詩』商頌・長発に「相土烈烈、海外有截」(箋云、截、整齊也)。「九圍」は、九州、国土全体。前掲『毛詩』周頌・長発に「帝命式于九圍(九圍、九州也)」。両句の表現は、陸雲「大將軍譙会被命作詩」(『文選』巻二〇)にいう「函夏無塵、海外有謐」を踏まえる。

⑯冕塗司契、垂拱臨民 「冕塗」は、冕旒に同じ。貴人の冠に垂らす飾り玉。天子はこれで目を覆い、臣下に寛大な姿勢を示す。「司契」は、手形を掌る。『老子』第七十九章にいう「聖人執左契、不責於人。故有德司契、無德司徹」に基づき、有徳者の天の理に基づく寛大な治政をいう。「垂拱」は、手をこまねいて何もしない。天子の教化が行き届いたことによる無為の治をいう。『尚書』武成に「垂拱而天下治」。両句の表現は、左思「魏都賦」(『文選』巻六)にいう「上垂拱而司契」を踏まえる。

⑰大豫 晋の舞「大豫」。ここに収載する「後舞」の前身。前詩「前舞歌」の注①を参照。あわせて、文字どおり大いにやわらぐ様をもいうか。

⑱欽若天人 「欽若」は、謹んで従う。『尚書』堯典に「乃命羲和、欽若昊天。」「天人」は、宇宙の根本原理を体得した人。『莊子』天下に「不離於宗、謂之天人。」ここでは特に天子をいう。用例として、応貞「晋武帝華林園集詩」(『文選』巻二〇)に「脩時貢職、入覲天人」と。

⑲純嘏孔休 「純嘏」は、大いなる福。『毛詩』小雅・賓之初筵に「錫爾純嘏、子孫其湛。」「孔」は、非常に。前詩「前舞歌」の注⑩を参照。「休」は、すばらしい。『毛詩』豳風・破斧に「周公東征、四國是遘。哀我人斯、亦孔之休(休、美也)。」

⑳萬載彌新 長い歳月を経ても、永遠にいよいよ清新な状態を保つ。内容的に、班固「典引」(『文選』巻四八)にいう「將絳萬嗣、揚洪輝、奮景炎、扇遺風、播芳烈、久而愈新、用而不竭」を意識しているか。

㉑蕤賓箱 前詩「前舞歌」の注⑳を参照。

(柳川順子)

章廟舞樂歌詞^① 雜歌悉同用太廟詞 唯三后別撰^② 殷淡^③造

章廟の舞樂の歌詞 雜歌は悉く同じく太廟の詞を用う 唯だ三后のみ別に撰す 殷淡造る。

賓出入奏肅成樂歌詞二章^④ 賓の出入するに肅成樂を奏する歌詞二章

彝承孝典^⑤ 恭事嚴聖^⑥ 彝^{つね}に孝典を承け 恭しく嚴聖に事う

浹天奉^⑦ 罄壤齊慶^⑧ 浹^{しやう}天 費^{しん}を奉じ 罄壤 慶びを齊しくす

司儀具序^⑨ 羽容夙彰^⑩ 司儀具に序し 羽容夙に彰らかなり

分枝颺烈^⑪ 黼構周張^⑫ 分枝颺烈し 黼構周く張る

助寶奠軒^⑬ 耐珍充庭^⑭ 助寶 軒に奠^おき 耐珍 庭に充つ

璆縣凝會^⑮ 涓朱竚聲^⑯ 璆縣 凝會し 涓^{けん}朱 聲を竚^{とど}む

先期選禮^⑰ 肅若有承^⑱ 期^きに先んじて禮を選し 肅^{うやま}い 若^{しか}えば承くる有り

祇對靈祉^⑲ 皇慶昭膺^⑳ 祇^{うやま}いて靈祉に對し 皇慶 昭らかに膺く

章太后廟の舞樂の歌詞 雜歌はいずれも同じく太廟の詞を用いるが、ただ三后のみ別に撰する。 殷淡の作。

賓客が出入する際に肅成樂を奏する歌詞二章

つねに宗廟の祭祀のきまりをうけつぎ、恭しく嚴聖なる父君に仕える。

天も地もあまねく慶びを表す。

司儀は具さに儀礼の次第をととのえ、樂舞はつとに美しくすぐれた様を示している。

分かれた枝に掛けられた樂器は香気を放つかのごとく美しい音色を響かせ、斧形の刺繍が施されたあやぎぬが四周に張り

巡らされている。

祭祀を助ける多くの宝物は車に置かれ、献上された珍宝は朝廷に満ち満ちている。

縣けられた玉製の楽器は多くの音色をそこに集め、水の流れにも似た朱弦はその音色をとどめている。

あらかじめ決められた日までに礼を選び、敬いしたがえば、神霊はその礼をお受けになる。

靈妙なる福に敬い対し、大いなる幸いを受ける。

○押韻 「聖」は去声45「勁」、「慶」は去声43「映」。「彰・張」は下平10「陽」。「庭」は下平15「青」、「聲」は下平14「清」、「承・膺」は下平16「蒸」。

①章廟舞樂歌詞 「章廟」は章太后廟。『宋書』樂志一に「文帝章太后廟未有樂章、孝武大明中使尚書左丞殷淡造新哥、明帝又自造昭太后宣太后哥詩。」

『宋書』后妃列伝に「武帝胡婕妤諱道安、淮南人。義熙初、爲高祖所納、生文帝。五年、被譴賜死、時年四十二。葬丹徒。高祖踐阼、追贈婕妤。太祖卽位、有司奏曰、……臣等遠準春秋、近稽漢・晉。謹上尊號曰章皇太后、陵曰熙寧。立廟於京師。」中華書局本は「舞樂」を「樂舞」に作る。

②雜歌悉同用……三后別撰 「雜歌」はここに挙げられる引牲樂などの歌を指すか。『隋書』音樂志上に「是時北中郎司馬

何佟之上言、「案周禮『王出入則奏王夏、尸出入則奏肆夏、牲出入則奏昭夏』。今樂府之夏、唯變王夏爲皇夏、蓋緣秦・漢以來稱皇故也。而齊氏仍未儀注、迎神奏昭夏、皇帝出入奏永至、牲出入更奏引牲之樂。其爲舛謬、莫斯之甚。請下禮局改正。」周捨議、以爲禮「王入奏王夏」、大祭祀與朝會、其用樂一也。而漢制、皇帝在廟、奏永至樂、朝會之日、別有皇夏。二樂有異、於禮爲乖、宜除永至、還用皇夏。又禮『尸出入奏肆夏』、『賓入大門奏肆夏』、則所設唯在人神、其與迎牲之樂、不可濫也。宋季失禮、頓虧舊則、神入廟門、遂奏昭夏、乃以牲牢之樂、用接祖考之靈。斯皆前代之深疵、當今所宜改也」

とあり、宋末には礼にそぐわない歌が用いられたことが記されている。

「三后」は『毛詩』大雅・下武に「三后在天、王配于京」、毛伝に「三后、大王・王季・文王也。王、武王也。」ここでは章太后・昭皇太后・宣皇太后を指す。雜歌は太廟の歌辞を用いたが、三后のみ別の歌辞が作られたことに関しては、『宋書』樂志二の王韶之「宋宗廟登歌八篇」の末尾に「石祠七廟享神登歌。并以歌章太后篇」と見える。

③殷淡 字は夷遠、陳郡長平の人。殷淳、殷冲の弟。『宋書』殷淳伝附伝に「冲弟淡、字夷遠、亦歷黃門吏部郎、太子中庶子、領歩兵校尉。大明世、以文章見知、爲當時才士。」

④賓出入奏肅成樂歌詞二章 「肅成樂」は『樂府詩集』卷八では「成」を「咸」に作る。

『隋書』音樂志上に「衆官出入、宋元徽三年儀注奏肅成樂、齊及梁初亦同」、また「陳初、武帝詔求宋・齊故事。太常卿周弘讓奏曰、「齊氏承宋、咸用元徽舊式、宗祀朝饗、奏樂俱同、唯北郊之禮、頗有增益。……衆官並出、奏肅成。此乃元徽所闕、永明六年之所加也。」

この歌詞二章は、『樂府詩集』卷八では宋の殷淡によるものとして収載しているが、同卷二にも同じ歌辞を謝超宗による「齊明堂樂歌」の「肅成樂二首」として収載している。『南齊書』樂志には「建元二年……太廟登歌宜用司徒褚淵餘悉用黃門郎謝超宗辭。超宗所撰、多刪顏延之、謝莊辭以爲新曲、備改樂名。永明二年、太子歩兵校尉伏曼容上表、宜集英儒、刪纂雅樂。詔付外詳、竟不行。羣臣出入、奏肅成之樂。……建元初、詔黃門郎謝超宗造明堂夕牲等辭、並採用莊辭。建武二年、零祭明堂、謝朓造辭、一依謝莊、唯世祖四言也。賓出入奏肅成樂、歌詞二章」とあり、その直後に殷淡と同じ歌辞を載せる。南齊が宋の儀注に拠って礼に反した音楽を用いたことは、注②所引の『隋書』音樂志上の何佟之の言に見える。

⑤彝承孝典 『毛詩』大雅・烝民に「民之秉彝、好是懿德」、毛伝に「彝、常。懿、美也。」

「孝典」はこの詩以外に用例無し。『二十四史全訳』は「彝承孝典の常道」とする。章太后は文帝劉義隆の母であり、注①所引の『宋書』によれば、高祖武帝即位時に婕妤を追贈され

ただけであつたのを、文帝は即位後に太后を追贈して廟を立てている。次の句に見える「嚴聖」は父武帝を指しており、ここでは父母を正式に祀る意を示すものと思われることから、「孝典」も父母を含めた宗廟での祭祀のきまりを指すか。

- ⑥恭事嚴聖 『尚書』康誥に「于弟弗念天顯、乃弗克恭厥兄」、偽孔伝に「於爲人弟不念天之明道、乃不能恭事其兄、是不恭。」
『後漢書』蔡邕伝所引「陳政要七事」に「國之大事、實先祀典、天子聖躬、所當恭事。」

『南齊書』樂志三「牲出入奏引牲之樂」に「皇乎敬矣、恭事上靈。」（『樂府詩集』卷二では謝超宗の作。）

- ⑦決天奉貴 『荀子』君道に「古者先王審禮、以方皇周浹於天下」、王先謙集解に「郝懿行曰、周、浹、皆偏也。」

- 『說文』に「賁、會禮也」、段注に「以財貨爲會合之禮也。」
⑧磬壤齊慶 『毛詩』小雅・天保に「天保定爾、俾爾戩穀。磬無不宜、受天百祿」、毛伝に「磬、盡也。」

『晉書』安帝紀、元興三年五月甲申の詔に「社稷載安、四海齊慶。」

- ⑨司儀具序 司儀は官名。賓客を接待する儀礼を掌る。『周

礼』秋官に「司儀、掌九儀之賓客擯相之禮。以詔儀容辭令揖讓之節」、鄭玄注に「出接賁曰擯、入贊禮曰相、以詔者、以禮告主。」次の句の「羽容」を客人と解する場合（注⑩参照）、この句は「司儀 具く序び」と訓めるかもしれない。

- ⑩羽容夙彰 「羽容」はこの詩以外に用例無し。

『礼記』文王世子に「春夏學干戈、秋冬學羽籥、皆於東序」、注に「干、盾也。戈、句矛戟也。干戈、萬舞、象武也。用動作之時學之。羽籥、籥舞、象文也」とある。これについて、明の胡広等撰『礼記大全』卷八「文王世子」第八には、「山陰陸氏曰、先王之制舞也、文必以羽籥、武必以干戚者、蓋籥、聲也、羽、容也。聲音以紀之、文物以昭之者、文也」とあり、「羽容」は羽籥などの舞の様子をいうか。あるいは、「司儀」との対であることを考えれば、「羽容」は「羽儀」の意で、祭祀に参列する客人をいうか。『周易』漸に「鴻漸於陸、其羽可用爲儀吉」、疏に「處高而能不位自樂、則其羽可用爲物之儀表、可貴可法也。故曰其羽可用爲儀吉也」とある。『礼記』雜記下に「威容稱其服」、鄭玄注に「容、威儀也」とある。また『文選』卷一四班固「幽通賦」に「皇十紀而鴻漸兮、有

羽儀於上京。」

⑪分枝颺烈 中華書局本は「分」を「芬」に作る。校勘記に「〔芬〕各本並作「分」、據南齊書樂志改」とある。

『漢書』礼楽志「安世房中歌十七章」其一に「大孝備矣、休德昭清。高張四縣、樂充宮庭。芬樹羽林、雲景杳冥（顔師古曰、言所樹羽葆、其盛若林、芬然衆多、仰視高遠、如雲日之杳冥也）。金支秀華、庶旒翠旌（張晏曰、金支、百二十支。秀華、中主有華黼也。旒、鍾之旒也。文穎曰、析羽爲旌、翠羽爲之也。臣瓚曰、樂上衆飾、有流遡羽葆、以黃金爲支、其首敷散、若草木之秀華也。師古曰、金支秀華、瓚說是也。庶衆也。庶旒翠旌、謂析五采羽、注翠旒之首而爲旌耳）」とあり、「分枝」はこの「金支秀華」をふまえ、樂器の上に施された裝飾、またはそこに掛けられた樂器をいうか。

『尚書』益稷に「工以納言、時而颺之」、偽孔伝に「工、樂官。當誦詩以納諫、當是正其義而颺道之」、疏に「若有不悟、當正其義而揚道之。揚、舉也。舉而道向君也。」「文選」卷八司馬相如「上林賦」に「應風披靡、吐芳揚烈」、李善注に「烈、酷烈、香氣盛也」、呂延濟注に「言衆草吐揚芳香也。揚、動、

烈、華也。」

⑫黼黻周張 『漢書』礼楽志「郊祀歌十九章・天地八」に「黼黻周張、承神至尊。」顔師古注に「白與黑畫爲斧形謂之黼、

王先謙補注に「周張、謂周遍張設於壇上。」
「黼黻」は斧の形の刺繡を施したあやぎぬ。「黼黻」はこの詩以外に用例はなく未詳。「構」は木を組んだもの。或いは「构」に通じ欄干のことか。なお漢語大詞典では「黼構」は「華麗的建築物」、「二十四史全訳」は「屏風」とする。いずれにせよ、祭祀の場を示す語であろう。

⑬助寶奠軒 『毛詩』召南・采蘋に「於以奠之、宗室牖下」、毛伝に「奠、置也。」「左伝」哀公十一年に「或淫于外州、外州人奪之軒以獻」、杜預の注に「外州、衛邑。軒、車也。」

⑭酌珍充庭 「酌」は献じる。『史記』平準書に「至酌、少府省金、而列侯坐酌金失侯者百餘人」、集解に「如淳曰、漢儀注、王子爲侯、侯歲以戸口酌黄金於漢廟、皇帝臨受獻金以助祭。」「文選」卷三張衡「東京賦」に「龍輅充庭、雲氣拂霓」、薛綜注に「馬八尺曰龍輅、天子之車也。故曰龍輅。充、滿也。庭、朝廷。」

⑮ 瑤縣凝會

「瑤」は玉製の磬。『尚書』禹貢に「厥貢瑤鐵銀鏤
簠簋」、偽孔伝に「瑤、玉名。」「国語」晋語四に「官師之所材
也、戚施直罇、遵蔭蒙瑤」、韋昭注に「蒙、戴也。瑤、玉磬也。
不能俛、故使之戴磬。」「礼記」曲礼下に「歲凶、……馳道不
除、祭事不縣」、鄭玄注に「縣、樂器、鍾磬之屬也。」

『宋書』樂志二王韶之「宋前舞後舞歌二篇」其一に「庭列宮
縣、陞羅瑟琴。翻籥繁會、笙磬諧音」、また『宋書』江夏文獻
王義恭伝に「義恭上表曰、臣聞雲和備樂、則繁會克諧」とあ
り、「繁會」は多くの音があつまるといふことから、「凝
會」も同様の意か。

⑯ 涓朱竚聲 中華書局本校勘記に「涓」南齊書樂志作「涓」。
樂府詩集八作「涓」とある。「涓朱」は未詳。『説文』に「涓、
小流也。」「瑤縣」との対を考えると、「涓」は形状や材質をい
う語か。「朱」は弦樂器を指すか。『礼記』樂記に「清廟之瑟、
朱弦而疏越」、鄭玄注に「朱弦、練朱絃。練則聲濁」、疏に「案
虞書傳云、古者帝王升歌清廟之樂、大瑟練弦。此云朱弦者、
明練之可知也。云練則聲濁者、不練則體勁而聲清、練則絲熟
而弦濁。」また『漢書』礼樂志「郊祀歌十九章・天地八」に

「九歌畢奏斐然殊、鳴琴竿瑟會軒朱、瑤、磬、金鼓、靈其有喜。
……展詩應律銷玉鳴、函宮吐角激徵清」とある。「軒朱」に
ついて顏師古注には「軒朱郎朱軒也。言總合音樂、會於軒檻
之前」とあり、朱塗りの欄干の前に音が集まるさまとする。
「銷玉」については晋灼が「銷、鳴玉聲也」とする。この二句
はこの郊祀歌の表現を踏まえたものか。

「竚」は「佇」に同じ。『文選』卷十一孫綽「游天台山賦」に
「惠風佇芳於陽林、醴泉涌溜於陰渠」、李善注に「邊讓章華臺
賦曰、惠風春施。宁猶積也。佇與宁同。」

⑰ 先期選禮

『礼記』祭統に「先期旬有一日、宮宰宿夫人、夫
人亦散齊七日、致齊三日。」

『宋書』樂志二、殷淡「太祝裸地奏登歌詞二章」其一に「具
司選禮、翼翼振振。」

⑱ 肅若有承

『漢書』礼樂志「郊祀歌十九章・天地八」に「丞
相匡衡奏罷「黼黻周張」、更定詩曰「肅若舊典」、顏師古注に
「肅、敬也。若、順也。」なお和刻本は「肅若として」と訓む。
「郊祀歌十九章・五神十六」に「交於神、若有承」、顏師古注
に「言神來降臨、故盡其肅恭。」

①9 祇對靈社

『毛詩』商頌・長髮に「昭假遲遲、上帝是祇」、鄭

②0 皇慶昭膺

『文選』卷二〇陸機「皇太子宴玄圃宣猷堂有令賦

箋に「祇、敬」とある。『宋書』武帝紀に「王其允答人神、君

詩」に「淳曜六合、皇慶攸興。」「尚書』畢命に「予小子永膺

臨萬國、時膺靈祉、酬于上天之眷命。』

多福」、偽孔伝に「我小子亦長受其多福」とある。

尊事威儀^① 暉容昭敘^②

尊事 威儀あり 暉容 昭敘あり

迅恭神明^③ 梁盛牲俎^④

迅^{すみ}やかに神明を恭しみ 梁盛あり牲俎あり

肅肅嚴宮^⑤ 藹藹崇基^⑥

肅肅たる嚴宮 藹藹たる崇基

皇靈降祉^⑦ 百祗具司^⑧

皇靈 祉を降し 百祗 司を具さにす

戒誠望夜^⑨ 端列承朝^⑩

戒誠 夜に望み 端列 朝に承く

依微昭旦^⑪ 物色輕宵^⑫

昭旦に依微たり 輕宵に物色たり

鴻慶遐邇^⑬ 嘉薦令芳^⑭

鴻慶 遐かに邇^のび 嘉薦 令芳あり

翊帝明德^⑮ 永胙流光^⑯

帝の明德を翊^{たす}けて 永胙 流光せん

恭しく行ふ儀礼には威嚴があり、輝かしいそのさまは明らかに秩序だっている。

我先にと神をうやまい、祭祀の供物には穀物と肉。

嚴肅なる宮殿、盛大なる高壇。

神靈は福をもたらし、地上の多くの神々がそれぞれの役割を果たしている。

戒めとまことの心とをもって夜に儀式を望み、整列して朝に続く。

物の様子が明け方にはほんやりとしていたのが、空にはつきりとしたものが見えてくる。

大いなる幸いがどこまでも広がり、供物は芳しい香を放つ。

皇帝の明德をたすけ、幸いをとこしえに伝えん。

○押韻 「敍・俎」は上声8「語」。「基・司」は上平7「之」。「朝・宵」は下平4「宵」。「芳」は下平10「陽」。「光」は下平11「唐」。

①尊事威儀 『尚書』立政に「古之人迪惟有夏、乃有室大競、

簫俊尊上帝」、偽孔伝に「古之人道惟有夏禹之時、乃有卿大夫室家大強、猶乃招呼賢俊、與共尊事上天。」

『毛詩』大雅・行葦序に「周家忠厚、仁及草木、故能內睦九族、外尊事黃耆。」

②暉容昭敘 『尚書』舜典に「納于百揆、百揆時敘」、疏に「於是皆得次序、無廢事也。」

③迅恭神明 『楚辭』招魂に「九侯淑女、多迅衆些」、王逸注に

「迅、疾也。言復有九國諸侯好善之女、多才長意、用心齊疾、勝於衆人也。」『尚書』皋陶謨に「愿而恭」、偽孔伝に「慤愿而

恭恪也。』『周易』説卦に「昔者聖人之作易也、幽贊於神明而生著。」

④梁盛牲俎 『左伝』桓公六年に「公曰、吾牲牷肥腍、黍盛豐

備、何則不信（注…黍稷曰黍、在器曰盛）、……奉盛以告曰、絜粢豐盛、謂其三時不害、而民和年豐也（疏…乃言民之糧食盡豐多也）。』『周礼』地官・閭師に「不耕耨者、祭無盛」、注に「盛、黍稷也。」「梁」はここでは「梁」或いは「黍」と同じく穀物の意か。なお『南齊書』樂志では「梁」は「黍」に作る。

『毛詩』小雅・楚茨に「執爨蹕蹕、爲俎孔碩。或燔或炙、君婦莫莫」、鄭箋に「燔、燔肉也。炙、肝炙也。皆從獻之俎也。」

⑤肅肅嚴宮 『毛詩』小雅・黍苗に「肅肅謝功、召伯營之」、鄭箋に「肅肅、嚴正之貌。」

⑥藹藹崇基 『毛詩』大雅・卷阿に「藹藹王多吉士」、毛伝に「藹藹、猶濟濟也。』『文選』卷七潘岳「藉田賦」に「結崇基之

靈趾兮、啓四塗之廣阡」、李善注に「崇基、謂壇也。」

- ⑦皇靈降祉 曹植「怨歌行」に「皇靈大動變、震雷風且寒。」陸雲「晋故散騎常侍陸府君誄」に「皇靈靡顧、大命奄臻。」「史記」魯周公世家に「天降祉福、唐叔得禾、異母同穎。」

- ⑧百祇具司 『尚書』微子に「今殷民乃攘竊神祇之犧牲牲用以容、將食無災」、釈文に「天曰神、地曰祇。」

『宋書』樂志二謝莊「宋明堂歌・迎神歌」に「百禮肅、群司虔。」司は官吏の意をもつが、さらにその職掌や持ち場を指す。『尚書』胤征に「倂擾天紀、遐棄厥司」、偽孔伝に「司、所主也。」

- ⑨戒誠望夜 「戒誠」はこの詩以外に用例無し。『南齊書』樂志、謝超宗による「齊南郊樂歌」に、「牲出入、奏引牲之樂。……陟配在京、降德在民。奔精望夜、高燎佇晨。」第九「十二句は、夕べに供物や祭具を調べ、朝に至るまでの夕牲の様子を詠じた場面であろう。」

- ⑩端列承朝 鮑照「園葵賦」に「承朝陽之麗景、得傾柯之所投。」
⑪依微昭旦 謝靈運「江妃賦」に「建羽旌而逶迤、奏清管之依微。」『宋書』謝莊伝所引「舞馬賦」に「於是順斗極、乘次躡、

戒懸日於昭旦、命月題於上年。」

- ⑫物色輕霄 中華書局本校勘記に「霄」各本並作「宵」、據南齊書樂志改。『西京雜記』卷二に「高帝既作新豐、并移舊社、衢巷、棟宇、物色惟舊。」『後漢書』寒朗伝に「朗心傷其冤、試以建等物色獨問忠・平」、李賢注に「物色、謂形狀也。」「輕宵」はこの詩以外に用例無し。『文選』卷四、左思「蜀都賦」に「擢脩幹、竦長條、扇飛雲、拂輕霄。」

- ⑬鴻慶遐邇 『宋書』孝武帝紀、孝建二年九月の詔に「朕雖寡德、終膺鴻慶。」『漢書』郊祀志上に「草木鬯茂」、顏師古注に「邇與暢同。」

- ⑭嘉薦令芳 『儀禮』士冠礼に「甘醴惟厚、嘉薦令芳」、鄭玄注に「嘉、善也。善薦、謂脯醢。芳、香也。」

- ⑮翊帝明德 『尚書』君陳に「黍稷非馨、明德惟馨。」

- ⑯永昨流光 中華書局本は「昨」を「祚」に作る。『宋書』樂志二、成公綏「晋四廂歌十六篇・正旦大会行礼詩十五章」其五に「保茲永祚、與天比崇。」詠注稿（四）一二六頁注⑮参照。『穀梁伝』僖公十五年に「德厚者流光、德薄者流卑。」『後漢書』左雄伝に「流光垂祚、永世不刊。」

牲出入引牲樂歌詞^①

維誠潔饗^② 維孝奠靈^③

敬芬黍稷^④ 敬滌犧牲^⑤

騂繭在俎^⑥ 載溢載豐^⑦

以承宗祀^⑧ 以肅皇衷^⑨

蕭芳四舉^⑩ 華火周傳^⑪

神監孔昭^⑫ 嘉是柔牲^⑬

牲出入して牲を引く樂の歌詞

維れ誠にして潔饗し 維れ孝にして奠靈す

敬しんで黍稷を芬らしめ 敬しんで犧牲を滌ぐ

騂繭^{さいん}俎^{かん}に在り 載ち溢 載ち豐

以て宗祀^さを承げ 以て皇衷を肅しむ

蕭芳 四に舉がり 華火 周く傳わる

神監孔昭なり 是の柔牲を嘉す

犠牲が出入する際の「引牲樂」の歌詞

まごころある者が祭祀を清め、孝心ある者が神靈に供物をすすめる。

うやうやしく黍稷を供えかおらせ、つつしんで犠牲を清め供える。

赤い仔牛は穀物で大切に養われ、満ちあふれ、豊か。

先祖や神に祖宗への祀りをささげ、大いなる福をつつしんでうける。

よもぎの香が四方に挙がり、華やかな灯りはあまねくつづく。

神靈ははつきりとご覧になり、この若く柔らかないけにえをよろこばれる。

○押韻 「靈」は下平15「青」、「牲」は下平12「庚」。「豐・衷」は上平1「東」。「傳・牲」は下平2「仙」。

①牲出入引牲樂歌詞 中華書局本では「牲出入奏引牲樂歌詞。」

②維誠潔饗 『礼記』郊特性に「歲十二月、合聚萬物而索饗之也」、注に「饗者、祭其神也。」また『礼記』月令に「賦之犧牲、以共皇天上帝社稷之饗」、注に「饗、獻也。」

③維孝奠饗 顏延之「宋南郊雅樂登歌・天地郊迎送神歌」に「維聖饗帝、維孝饗親。」『毛詩』召南・采蘋に「于以奠之、宗室牖下」、毛伝に「奠、置也。宗室、大宗之廟也。大夫士祭於宗廟、奠於牖下。」『説文』に「奠、置祭也。」

④敬芬黍稷 『尚書』君陳に「黍稷非馨、明德惟馨。」『毛詩』小雅・楚茨に「苾芬孝祀、神嗜飲食」、鄭箋に「苾苾芬芬、有馨香矣。」

⑤敬滌犧牲 『尚書』泰誓上に「犧牲粢盛、既于凶盜。」『尚書』禹貢に「九山刊旅、九川滌源、九澤既陂」、偽孔伝に「九州之川已滌除、泉源無壅塞矣。」

⑥駢黼在象 『礼記』郊特性に「牲用駢、尚赤也。」『礼記』王制に「祭天地之牛角黼栗。」「国語」楚語下に「郊禘不過黼栗、烝賞不過把握」、韋昭注に「角如黼栗、郊禘祭天也。」『周礼』地官・廩人に「掌黍祭祀之犬」鄭玄注に「養犬豕曰黍。」『礼

記』樂記に「夫黍豕爲酒、非以爲禍也」、鄭玄注に「以穀食犬豕曰黍。」『漢書』礼樂志「郊祀歌十九章・練時日」に「牲黼栗、粢盛香、尊桂酒、賓八鄉」、顏師古注に「黼栗、言角之小如黼及栗之形也。八鄉、八方之神。」三六句はこの詩句を踏まえた表現か。

⑦載溢載豐 『毛詩』小雅・四牡に「翩翩者騅、載飛載下、集于苞栩。」傳玄「晋四廂樂歌・天命十三章、章四句、食舉東西廂歌」に「八音克諧、載夷載簡。」

⑧以承宗祀 『孝經』聖治に「昔者周公郊祀后稷以配天、宗祀文王於明堂以配上帝。」

⑨以肅皇衷 『尚書』湯誥に「惟皇上帝、降衷于下民」、偽孔伝に「皇、大也。衷、善也。」

⑩蕭芳四舉 『毛詩』王風・采芣に「彼采蕭兮、一日不見、如三秋兮」、毛伝に「蕭、所以共祭祀。」『漢書』礼樂志「郊祀歌十九章・練時日」に「炳簫蕭、延四方」、注に「李奇曰、簫、腸間脂也。蕭、香蒿也。師古曰、以蕭炳脂合馨香也。四方、四方之神也」とあるのを踏まえた表現。

⑪華火周傳 『尚書』舜典に「重華協于帝」、偽孔伝に「華謂文

德、言其光文重合於堯、俱聖明。」「莊子」養生主に「指窮於

爲薪、火傳也、不知其盡也。」釈文に「傳者、相傳繼續也。」

⑫神監孔昭 『毛詩』小雅・鹿鳴に「我有嘉賓、德音孔昭」、鄭

箋に「孔、甚。昭、明也。」「文選」卷四七夏侯湛「東方朔画

贊」に「天秩有禮、神監孔明」、張銑注に「秩、次也。言天下

之次序、有祭祀之禮。則神監其忠信、甚可明也。」

⑬嘉是柔牲 『尚書』微子に「今殷民乃攘竊神祇之犧牲用」、

偽孔伝に「色純曰犧、體完曰牲。」牲はまると一頭の仔牛をいう。

薦豆呈毛血奏嘉薦樂歌詞

豆を薦め毛血を呈し嘉薦樂を奏する歌詞

肇禋戒祀^③ 禮容咸舉^④

禋^{まつ}りを肇め祀^{そな}りに戒え 禮容 咸く舉ぐ

六典飾文^⑤ 九司昭序^⑥

六典 文を飾り 九司 序を昭らかにす

牲柔既昭^⑦ 儀剛既陳^⑧

牲柔 既に昭らかにして 儀剛 既に陳ぶ

恭滌惟清^⑨ 敬事惟神^⑩

恭しく滌するは惟れ清く 敬しんで事うるは惟れ神

加籩再御^⑪ 兼俎重薦^⑫

加籩^{へん} 再び御し 兼俎 重ねて薦む

節動軒越^⑬ 聲流金縣^⑭

節は軒越に動き 聲は金縣に流る

弈弈闔闔^⑮ 娓娓嚴闐^⑯

弈弈たる闔闔 娓娓たる嚴闐

潔誠夕鑑^⑰ 端服晨暉^⑱

潔誠 夕べに鑑み 端服 晨に暉く

聖靈戾止^⑲ 翊我皇則^⑳

聖靈 戾^{いた}止り 我が皇則を翊^{たす}く

上綏四寓^㉑ 下洋萬國^㉒

上は四寓^うを綏らかにし 下は萬國^{あふ}に洋る

永言孝饗^㉓ 孝饗有容^㉔

永く言に孝饗す 孝饗 容有り

賓僚贊列^㉔ 肅肅離離^㉕

賓僚 贊列し 肅肅として離離たり

右夕牲歌詞

右は夕牲の歌詞

豆を薦め毛血を呈し嘉薦樂を演奏する その歌詞

祭祀を始めるにその備えをし、礼の儀容をことごとくとりおこなう。

六つの法は礼樂などの制度をととのえ、九人の大臣は整列している。

柔らかな犠牲は立派なすがたを呈し、揺るぎない儀礼は並びととのえられる。

うやうやしく洗った犠牲は清らかで、つつしんで仕えるさまは神妙である。

籩に盛った供物は数を増やしてさらに供え、倍する犠牲を重ねて献上する。

音楽の節奏は高ぶり、金石の音色が流れる。

美しく神靈なる帳、盛大で嚴肅なる宮門。

汚れない誠をもつて夕べによく見極め、整った服のままで朝を迎える。

聖靈が来臨し、我が皇の則を補佐する。

上は四方を安らかにし、下は万国にさいわいを溢れさせる。

永く孝心をもつて供物をそなえ、孝によるもてなしには礼にかなった姿がある。

賓僚は列び居り、恭しく和やかである。

右は夕牲の歌詞。

○押韻 「舉・序」は上声8「語」。「陳・神」は上平17「眞」。「薦・縣」は去声22「霰」。聞・暉は上平8「微」。「則・國」は入声25「德」。「容・離」は上平3「鍾」。

①薦豆呈毛血 「薦豆」は祭祀において供物を入れた器をすすめること。『礼記』祭義に「是故孝子臨尸而不作。君牽牲、夫人奠盥。君獻尸、夫人薦豆」、鄭玄注に「此時君牽牲、將薦毛血、君獻尸、而夫人薦豆、謂繹日也。」

『毛詩』大雅・生民に「卬盛于豆、于豆于登」、毛伝に「木曰豆、瓦曰登。豆、薦菹醢也。」「毛血」は祭祀用の犠牲。『孔子家語』問礼に「玄酒以祭、薦其毛血。」

なお、『南齊書』樂志では第十二句までを一首とし、二首として収録している。

②嘉薦樂 「嘉薦」は祭祀の供物。『儀礼』士冠礼に「甘醴惟厚、嘉薦令芳」、鄭玄注に「嘉、善也。善薦、謂脯醢。芳、香也。」「儀礼」士虞礼に「嘉薦普淖」、鄭玄注に「普淖、黍稷也。普、大也。淖、和也。德能大和、乃有黍稷、故以爲號云。」「漢書」礼樂志二「安世房中歌十七章」其十三に「嘉薦芳矣、告靈饗矣。」

③肇禋戒祀 「肇禋」は祭祀を始めること。『毛詩』周頌・維清

に「維清緝熙、文王之典。肇禋、迄用有成、維周之禎」、毛伝に「肇、始。禋、祀也」、鄭箋に「文王受命、始祭天而枝伐也。周禮以禋祀、祀昊天上帝。」「戒祀」は他に用例なし。『毛詩』小雅・大田に「大田多稼、既種既戒、既備乃事」、鄭箋に「大田、謂地肥美、可墾耕、多爲稼、可以授民者也。將稼者、必先相地之宜、而擇其種。季冬、命民出五種、計耦耕事、脩耒耜、具田器、此之謂戒。是既備矣、至孟春、土長冒櫟、陳根可拔而事之」とあり、「戒祀」は祭祀に備える意か。『宋書』礼志四に「元嘉七年四月乙丑、有司奏曰、「禮喪服傳云、「有死於宮中者、則爲之三月不舉祭。」今祀祀既戒、而掖庭有故。」但し和刻本は「肇めて戒祀を禋し」と訓む。

④禮容 『史記』孔子世家に「孔子爲兒嬉戲、常陳俎豆、設禮容。」

⑤六典飾文 「六典」は六つの法。『周礼』天官・大宰に「大宰之職、掌建邦之六典、以佐王治邦國。一曰治典、以經邦國、以治官府、以紀萬民。二曰教典、以安邦國、以教官府、以擾

萬民。三曰禮典、以和邦國、以統百官、以諧萬民。四曰政典、以平邦國、以正百官、以均萬民。五曰刑典、以詰邦國、以刑百官、以糾萬民。六曰事典、以富邦國、以任百官、以生萬民。」「文」は儀礼や礼樂などの制度か。『論語』子罕に「文王既没、文不在茲乎」、朱熹集注に「道之顯者謂之文、蓋禮樂制度之謂。」「荀子」礼論に「故至備、情文俱盡。其次、情文代勝（楊倞注…文謂禮物威儀也。）……故文飾羸惡、聲樂哭泣、恬愉憂戚、是反也。然而禮兼而用之、時舉而代御。故文飾聲樂恬愉、所以持平奉吉也。」

⑥九司昭序 「九司」は九卿のこと。『文選』卷一「何晏」景福殿賦に「三事、九司、宏儒碩生」、李善注に「九司、九卿也。」「周礼」考工記・匠人に「外有九室、九卿居焉」、鄭玄注に「六卿三孤爲九卿、三孤佐三公論道、六卿治六官之屬。」「宋書」樂志二、顏延之「宋南郊雅樂登歌・天地郊夕牲歌」に「六典聯事、九官列序」とある。また『南齊書』樂志「送神奏肆夏樂歌辭」に「昭序溢、幽饗餘。」

⑦儀剛既陳 中華書局修訂本の校勘記によると、「儀」は『南齊書』樂志、『樂府詩集』卷八によって「犧」に改めたところ

る。それにしたがってこの二句を解釈すれば、剛柔の犠牲が準備万端整えられて、礼のとおりになべられていえることがきよう。『礼記』曲礼下に「凡祭宗廟之禮、牛曰一元大武、豕曰剛鬣、豚曰腍肥、羊曰柔毛、雞曰翰音、犬曰羹獻、雉曰疏趾、兔曰明視、脯曰尹祭、鰾魚曰商祭、鮮魚曰鮓祭、水曰清滌、酒曰清酌」とあるのによれば、犠牲には剛鬣・柔毛と称する豚や羊が用いられている。一方、底本が「儀」であることから、第五・七句が犠牲、第六・八句が儀礼について述べたものとも理解できる。『周易』乾に「大哉乾乎、剛健中正、純粹精也」、疏に「剛健中正謂純陽剛健、其性剛強、其行勁健」とあり、「儀剛」は儀礼が正しく純粹で剛強な性質をもつものであることを言うか。ここではひとまず底本の表記に従い、後者で解する。

⑧恭滌性清 『周礼』天官・大宰に「及執事、眡滌濯」、注に「執事、初爲祭事前祭日之夕。滌濯、謂溉祭器及甑甗之屬。」また『公羊伝』宣公三年に「帝牲在于滌三月」、何休注に「滌、宮名、養帝牲三牢之處也。謂之滌者、取其蕩滌潔清。」

『尚書』虞書舜典に「夙夜惟寅、直哉惟清」、偽孔伝に「夙、

早也。言早夜敬思其職、典禮施政教、使正直而清明。」

⑩加籩再御 籩は竹製のたかつき。『周礼』天官・籩人に「籩

⑪兼組重薦 組は犠牲をのせる器。『毛詩』小雅・楚茨に「執爨踏踏、爲組孔碩。或燔或炙、君婦莫莫」、毛伝に「爨、爨爨、燔爨也。踏踏、言爨竈有容也。燔、取脾脅。炙、炙肉也」、鄭箋に「燔、燔肉也。炙、肝炙也。皆從獻之俎也。其爲之於爨、必取肉也肝也。」「南齊書」樂志「薦豆呈毛血奏嘉薦之樂」に「嘉俎重薦、兼藉再升。」

の物を表す語であるべきだが、その例は見当たらない。こ

「憲音軒……軒、起也。」『文選』卷二木華「海賦」に「翔霧連軒、洩洩淫淫」、李善注に「軒、舉也。」『礼記』聘義に「叩之、其聲清越以長」、注に「越猶揚也。」

設象筵、庭宿金懸」、張銑注に「金懸、謂金鼓之樂也。」『宋書』樂志一に「魏氏三祖、風流可懷、京洛相高、江左彌重。諒以金縣干戚、事絕於斯。」

恤、實實枚枚（毛傳：闕、閉也。先妣姜嫄之廟在周、常閉而無事。孟仲子曰、是祿宮也。恤、清淨也。實實、廣大也。枚、簪密也。鄭箋：闕、神也。姜嫄神所依、故廟曰神宮）。……新廟奕奕、奚斯所作（毛傳：新廟、閔公廟也。有大夫公子奚斯者作是廟也。鄭箋：奕奕、姣美也）。『文選』卷五左思「吳都賦」に「締交翩翩、儼從奕奕」、呂向注に「奕奕、盛貌」。

⑮ 妮妮嚴闇 『毛詩』陳風・防有鵲巢に「誰侑予美、心焉切切」、

釈文に「美、韓詩作妮、音尾、妮、美也。」「宋書」五行志二に「司馬元顯時、民謠詩云、……「金刀既以刻、妮妮金城中」。此詩云襄陽道人竺曇林所作、多所道、行於世。……金刀、劉也。倡義諸公、皆多姓劉。妮妮、美盛貌也。」「全訳」は「妮妮」を倦むことなく勤める意でとる。

⑯ 潔誠夕鑑 鮑照「代白紵舞歌詞」其四に「思君厚德委如山、潔誠洗志期暮年。」

⑰ 端服晨暉 『文選』卷二〇、顔延之「皇太子釈奠会作」に「肴乾酒澄、端服整弁。」李善注は以下の『礼記』を引く。『礼記』聘義に「聘射之禮、至大禮也。質明而始行事、日幾中而后禮成。非強有力者、弗能行也。故強有力者、將以行禮也（注：禮成、禮畢也。或曰行成）。酒清、人渴而不敢飲也。肉乾、人飢而不敢食也。日莫人倦、齊莊正齊、而不敢解惰、以成禮節。」「端服」は、ここでは整った衣服のまま儀礼を行うこと。

『魏書』高閭伝所収「至德頌」に「重光麗天、晨暉疊旦。」

⑱ 聖靈戾止 曹植「制命宗聖侯孔羨奉家祀碑」に「於是魯之父老、諸生、遊士、睹廟堂之始復、觀俎豆之初設、嘉聖靈於髣

髴、想禎祥之來集。」「文選』卷二〇顔延之「皇太子釈奠会作」詩に「敬躬祀典、告奠聖靈」、李善注に「禮記曰、……凡人之始立學者、先釋奠于先聖先師」、劉良注に「言其恭敬敬行祀典、奠酌先聖之神靈也。禮之盛也。」

『毛詩』周頌・有瞽に「我客戾止、永觀厥成。」

⑲ 翊我皇則 『新序』雜事四に「然而名號顯榮者、三士翊之也。」「三國志」蜀書、呂凱伝所引「答雍閭書」に「今諸葛丞相英才挺出、深觀未萌、受遺託孤、翊贊季興、與衆無忌、錄功忘瑕。」

⑳ 上綏四寓 「寓」は「宇」の古字。『藝文類聚』卷三八王粲「荊州文学記」に「敷格皇穹、聲被四字。」また、『初学記』卷一三王粲「大廟頌」に「綏庶邦、和四字。」

㉑ 下洋萬國 『文選』卷四四、司馬相如「難蜀父老」に「蓋聞中國有至仁焉、德洋恩普、物靡不得其所、劉良注に「至仁、謂天子也。洋、溢。普、徧。靡、無。」なお、『漢語大詞典』では当該の詩句を引いて、「洋」は「祥」に通ずるとする。

㉒ 永言孝饗 『毛詩』周頌・載見に「永言保之、思皇多祐。」「宋書」礼志四「（大明二年二月庚寅）夫以孝饗親、尊愛罔極、既殷薦太祖、亦致盛祀於小廟。譬有事於尊者、可以及卑。」「宋

書」樂志二、顏延之「宋南郊雅樂登歌三篇・天地郊迎送神歌」に「維聖饗帝、維孝饗親。」

②③孝饗有容 『毛詩』周頌・振鷺に「振鷺于飛、于彼西雝。我客戾止、亦有斯容」、鄭箋に「白鳥集于西雝之澤。言所集得其處也。興者、喻杞宋之君有潔白之德、來助祭於周之廟、得禮之宜也。其至止亦有此容、言威儀之善如鷺然。」

②④儋僚贊列 「儋、僚」はいずれも祭祀に従事する者をいうか。

「儋」は、『文選』卷七、揚雄「甘泉賦」に「選巫咸兮叫帝閭、開天庭兮延羣神。儋暗謫兮降清壇、瑞穰穰兮委如山」、注に「張晏曰、儋、贊也。善曰、鄭玄周禮注曰、接賓曰儋、然謂贊禮者也。暗謫、衆盛貌也。委、積也。」「僚」は、『尚書』皋

陶謨に「百僚師師、百工惟時」、偽孔伝に「僚・工、皆官也。師師、相師法。百官皆是、言政無非。」「贊」は補佐する意。

②⑤肅肅離離 「肅肅」は恭しいさま。『毛詩』大雅・思齊に「離離在宮、肅肅在廟」、毛伝に「肅肅、敬也。」「離離」は和やかなさま。『毛詩』周頌・離に「有來離離、至止肅肅」、鄭箋に

「離離、和也。」中華書局本は「雍雍」に作る。『史記』樂書に「詩曰、肅雍和鳴、先祖是聽。夫肅肅、敬也。雍雍、和也。」

②⑥夕牲歌詞 「夕牲」は祭祀の前夜に祭祀の品や器物を調べること。『漢書』丙吉伝に「從祠高廟、至夕牲日、乃使出取齋衣」、顏師古注に「未祭一日、其夕展視牲具、謂之夕牲。」

(林 香奈)

迎神奏韶夏樂歌詞①

閼宮黝黝② 復殿微微③
璿除肅炤④ 鉦壁彤輝⑤
黼帟神凝⑥ 玉堂嚴馨⑦
圓火夕耀⑧ 方水朝清⑨

神を迎うるに韶夏樂を奏する歌詞

閼宮黝黝たり 復殿微微たり
璿除肅かに炤り 鉦壁彤く輝く
黼帟神凝し 玉堂嚴馨あり
圓火夕べに耀き 方水朝に清し

金枝委樹^⑩ 翠鐙竚縣^⑪
淳波澄宿^⑫ 華漢浮天^⑬
恭事既夙^⑭ 虔心有慕^⑮
仰降皇靈^⑯ 俯寧休胙^⑰

金枝樹に委ね 翠鐙縣に竚^{たくわ}う
淳波宿を澄ませ 華漢天に浮かぶ
恭事既に夙なり 虔心慕う有り
仰ぎて皇靈を降し 俯して休胙を寧んず

祖先の神を迎えるときに「韶夏楽」を演奏する その歌詞

深く閉ざされた神宮は黒くひっそりと、屋根の上に屋根を置く神殿は奥深く静かである。

玉のきざしは厳かに照り映え、金の飾りがはめ込まれた壁は赤く輝く。

黒白の斧が描かれた幕は神々しく静止していて、うつくしき宮殿にはおごそかな香りが漂っている。

天の火は夕べにかがやき、地の水は朝に清く澄む。

金でつくられた枝が「樹」（のようなかたちをした装飾物）に付けられ、翠色の（カワセミの羽で飾られた？）燭台が楽器のセツトに据えられている。

波の収まった水面に星々が映り、天の川が夜空に懸かっている。

身を慎んで仕えるのはすでにおごそかで、敬虔なるまごころには思いを寄せるところがある。

仰いで祖先の御霊が降りてくるのを迎え、俯いて大いなる幸いを安んずる。

○押韻 「微・輝」は上平8「微」。「馨」は下平15「青」。「清」は下平14「清」。「縣・天」は下平1「先」。「慕・胙」は去声11「暮」。

①迎神奏韶夏樂歌詞 『隋書』音樂志上に「降神及迎送、宋元

徽三（四七五）年儀注奏韶夏、齊及梁初亦同。」「宋書」樂志二・明帝「送神奏韶夏之樂舞歌詞二章」。

②闕宮黝黝 「闕宮」は深く閉ざされた神宮。『毛詩』魯頌・闕宮に「闕宮有恤、實實枚枚」、毛伝に「闕、閉也。先妣姜嫄之廟在周、常閉而無事、孟仲子曰、是祿宮也」、鄭箋に「闕、神也。姜嫄神所依、故廟曰神宮。」「黝黝」は黒いさま。『文選』卷五・左思「魏都賦」に「黝黝桑柘、油油麻紵」、李善注に「爾雅曰、黒謂之黝。郭璞曰、黝、黒貌也。」

③復殿微微 「復殿」は屋根の上に屋根を置く神殿。復廟。「復」は「複」に通じる。『礼記』明堂位に「山節・藻梲・復廟・重檐」云々とあり、鄭注に「復廟、重屋也」、正義に「復廟者、上下重屋也。」「微微」は奥深くて静かなさま。『文選』卷四・張衡「南都賦」に「章陵鬱以青蔥、清廟肅以微微」、李善注に「爾雅曰、青謂之蔥。林木茂盛之貌。微微、幽靜貌。」後の用例としては『隋書』音樂志上・梁「宗廟皇帝初獻奏登歌七曲」其七に「神宮肅肅、靈寢微微。」

④璿除肅炤 「璿除」は玉で飾ったさざし。璿除。玉階。『宋

書』樂志二・宋・明帝の「送神奏韶夏之樂舞歌詞二章」其二に「背璿除、端玉輅。」「肅炤」は厳かに照り映える。「炤」は「照」に同じ。『荀子』天論に「列星隨旋、日月遞炤、四時代御、陰陽大化、風雨博施」、楊倞注に「列星、有列位者、二十八宿也。隨旋、相隨回旋也。炤與照同。」

⑤鉦壁彤輝 金の飾りがはめ込まれた壁が赤く輝く。「鉦」は宮殿の壁の間に渡す横木に付けられた飾りもの。金鉦。『文選』卷一・班固「西都賦」に「昭陽特盛、隆乎孝成。……金鉦銜壁、是爲列錢」、李善注に「漢書曰、孝成趙皇后弟絕幸、爲昭儀、居昭陽舍。其壁帶、往往爲黃金鉦、兩藍田壁、明珠翠羽飾之。音義曰、謂壁中之橫帶也。……說文曰、鉦、鍑鐵也。列錢、言金鉦銜壁、行列似錢也。」「彤」は朱色。『毛詩』小雅・彤弓に「彤弓昭兮、受言藏之」、毛伝に「彤弓、朱弓也。以講德習射。昭、弛貌。言、我也。」「輝」は輝く。

⑥黼帟神凝 「黼帟」は白と黒の斧のかたちを縫い取りした幕。『尚書』益稷に「藻火粉米、黼黻絺繡」、偽孔伝に「藻、水草有文者。火爲火字、粉若粟冰、米若聚米、黼若斧形、黻爲兩己相背、葛之精者曰絺、五色備曰繡」、經典釈文に「黼音甫、

白與黑謂之黼。」「周礼」幕人に「幕人掌帷幕幄帘綬之事、鄭注に「王出宮則有是事。在旁曰帷、在上曰幕。幕或在地、展陳于上。帷幕皆以布爲之。四合象宮室曰幄、王所居之帷也。鄭司農云、帘、平帳也。綬、組綬、所以繫帷也。玄謂、帘主在幕若幄中、坐上承塵。」「神凝」は玄妙に静止しているようす。『周易』繫辭伝下に「神而化之、使民宜之」、正義に「神而化之、使民宜之者、言所以通其變者、欲使神理微妙而變化之、使民各得其宜。」「楚辭」九歎・憂苦に「留思北顧、涕漸漸兮、折銳摧矜、凝汜濫兮」、王逸注に「摧、挫也。矜、嚴也。凝、止也。汜濫、猶沈浮也。」

⑦玉堂嚴馨 「玉堂」は宮殿の美称。『楚辭』九歎・逢紛に「芙蓉蓋而淩華車兮、紫貝闕而玉堂」、王逸注に「紫貝、水蟲名。援神契曰、江水出大貝也。一云、白玉堂。」「嚴馨」はおごそかに（遠くまで）香ること。『毛詩』小雅・六月に「有嚴有翼、共武之服」、毛伝に「嚴、威嚴也。翼、敬也。」「毛詩」大雅・鳧鷖に「爾酒既清、爾殽既馨、公尸燕飲、福祿來成」、毛伝に「馨、香之遠聞也。」

⑧圓火夕耀 天の星大火が夕べにかがやくこと。「圓」は天。

『周易』説卦伝に「乾爲天、爲圓。」「呂氏春秋」序意に「爰有大圓、在上」、高誘注に「圓、天也。」「圓火。次句の「方」と合わせて天地を意味する。『淮南子』本経訓に「戴圓履方、抱表懷繩」、高誘注に「圓、天也。方、地也。」「漢書」律曆志上に「規矩相須、陰陽位序、圓方乃成。」「耀」は照る。かがやく。『淮南子』覽冥訓に「日行月動、星耀而玄運」、高誘注に「耀、照。玄、天也。運、行也。」

⑨方水朝清 地の水が朝に清らかであること。「方」は大地。

⑩金枝委樹 金で飾った灯が「樹」（裝飾物の土台か）に付けられる。『漢書』礼楽志「安世房中歌十七章」其一に「金支秀華、庶旒翠旌」、顔師古注に「張晏曰、「金支、百二十支。秀華、中主有華鬘也。旒、鍾之旒也。」「文穎曰、「析羽爲旌、翠羽爲之也。」「臣瓚曰、「樂上衆飾、有流遡羽葆、以黃金爲支、其首敷散、若草木之秀華也。」「師古曰、「金支秀華、瓚說是也。庶、衆也。庶旒翠旌、謂析五采羽、注翠旒之首而爲旌耳。」「文選」卷二七・顔延之「宋郊祀歌」に「金枝中樹、廣樂四陳」、呂向注に「金枝謂燈以金飾之。」

⑪翠鐙竚縣 「翠鐙」は（カワセミの羽根飾りがついた）翠色

の灯。『楚辭』招魂に「蘭膏明燭、華鎧錯些」、王逸注に「言鎧錠盡雕琢錯鏤、飾設以禽獸、有英華也。」「玉台新詠」卷一「相逢狹路間」に「中庭生桂樹、華鎧何煌煌。」「竚」は「佇」。積む。たくわえる。『文選』卷一一・孫綽「遊天台山賦」に「惠風佇芳於陽林、醴泉涌溜於陰渠」、李善注に「邊讓章華臺賦曰、惠風春施。宁、猶積也。佇與宁同。」「縣」は鍾磬の樂器を懸けるセツト。『周礼』春官・小胥に「正樂縣之位、王宮縣、諸侯軒縣、卿大夫判縣、士特縣、辨其聲」、鄭注に「樂縣謂鐘磬之屬、縣於筍簾者。鄭司農云、宮縣四面縣、軒縣去其一面、判縣又去其一面、特縣又去其一面、四面象宮室、四面有牆、故謂之宮縣。」「宋書」樂志二・宋・明帝「送神奏昭夏之樂舞歌詞二章」其二に「解羽縣、輟華樹。」

⑫渟波澄宿 波の収まった水面に星々が映ること。「渟」は靜止したさま。「宿」は星宿。『漢書』天文志に「凡以宿星通下之變者、維星散、句星信、則地動。」「文選」卷一一・何晏「景福殿賦」に「屯坊列署、三十有二、星居宿陳、綺錯鱗比」、李善注に「宿、星宿也。」

⑬華漢浮天 天の川が夜空に浮かぶこと。「漢」は天の川。『毛

詩』小雅・大東に「維天有漢、監亦有光」、毛伝に「漢、天河也。」「華漢」の用例としては、『宋書』樂志二・宋・明帝「皇帝詣便殿奏休成之樂歌詞」に「神儀駐景、華漢亭虛。」

⑭恭事既夙 「恭事」は身を慎んで仕えること。『尚書』康誥に「于弟弗念天顯、乃弗克恭厥兄」、偽孔伝に「於爲人弟不念天之明道、乃不能恭事其兄、是不恭。」「夙」は肅敬。『毛詩』大雅・生民に「履帝武敏歆、攸介攸止、載震載夙、載生載育、時維后稷」、鄭箋に「夙之言肅也。」同じく殷淡「賓出入奏肅成樂歌詞二章」其一に「彝承孝典、恭事嚴聖。」

⑮虔心有慕 「虔心」は敬い慎むまごころ。『左伝』莊公二十四年に「女贄、不過榛栗棗脩、以告虔也」、杜預注に「榛、小栗。脩、脯。虔、敬也。皆取其名以示敬。」用例としては、北周・庾信「祀円丘歌」に「翼翼虔心、明明上徹。」「慕」は祖先のことを慕い思うこと。『宋書』樂志二・傅玄「晋宗廟歌十一篇 祠廟饗神歌二篇」其一に「蒸蒸永慕、感時興思。」

⑯仰降皇靈 仰いで帝王たる祖先の御霊を迎える。後漢・崔駰「禮銘」に「皇靈既祐、祉祿來臻。本文百世、子子孫孫。」後漢・蔡邕「文範先生陳仲弓銘」に「君秉皇靈之清和、受明

哲之上姿。」殷淡「賓出入奏肅成樂歌詞二章」其二に「皇靈降
社、百祗具司。」

らしい幸福。「胙」は「祚」に通じる。帝位を表すこともあ
る。『宋書』樂志二・荀勗「正旦大会王公上寿酒歌一篇・踐元

①⑦俯墮休胙 俯いて大いなる幸いを安んじる。「休胙」はすば

辰一章」に「本枝舊百世、休祚鍾聖躬。」

皇帝入廟北門奏永至樂歌詞① 皇帝廟の北門に入るに永至樂を奏する歌詞

皇明邇矣② 孝容以昭③ 皇明ちやう邇たり 孝容以て昭らかなり

鑾華羽迺④ 拂漢涵瀉⑤ 鑾華にして羽迺はらう 漢を拂い瀉を涵いる

申申嘉夜⑥ 翊翊休朝⑦ 申申たる嘉夜 翊翊たる休朝

行金景送⑧ 歩玉風韶⑨ 行金 景送おい 歩玉 風韶うぐ

師承祀則⑩ 肅對禋祧⑪ 祀則を師承し 肅つつしんで禋祧に對す

皇帝陛下が廟の北門から入るときに「永至樂」を演奏する その歌詞

聖明なる皇帝陛下の大徳はのびやかに、ご先祖を思われるお姿は明らかである。

陛下の御車は光かがやき、かざしを手にした舞人はその前にあつて先導し、銀河を払い水の光を映し出す。

ゆつたりとした佳き夜、おごそかな素晴らしき朝。

行進に金の飾りや玉の佩びものの響きがあり、それによき光と風とが付き従う。

祭祀のきまりを受けついで、つつしんで祖先の廟の祭祀に向かいたまう。

○押韻 「昭・朝・韶」は下平4 「宵」「瀟」は上声32 「皓」「祧」は下平3 「蕭」。

①皇帝入廟北門奏永至樂歌詞 『漢書』礼楽志に「皇帝入廟門、

奏永至、以爲行步之節、猶古采齊・肆夏也。」「隋書」音楽志上に「皇帝出入、宋孝建二年秋起居注奏永至、齊及梁初亦同。」

②皇明鬯矣 皇帝の聖明なる徳がのびゆくこと。「皇明」は天子の明徳。「文選」卷一・班固「西都賦」に「天人合應、以發

皇明」、劉良注に「皇、大也。此則天意人事合應、以發我皇大明之徳。」「鬯」は暢に通ず。『漢書』礼楽志「安世房中歌」に

「清明鬯矣、皇帝孝徳」、顔師古注に「鬯、古暢字。暢、通也。」

③孝容以昭 祖先への孝徳の姿が明らかであること。「容」は姿、様子。『毛詩』周頌・振鷺に「振鷺于飛、于彼西雝。我客

戾止、亦有斯容」、鄭箋に「白鳥集于西雝之澤、言所集得其處也。興者、喻杞・宋之君有絜白之徳、來助祭於周之廟、得禮

之宜也。其至止亦有此容、言威儀之善如鷺然。」殷淡「薦豆

呈毛血奏嘉薦樂歌詞」に「永言孝饗、孝饗有容。」

④變華羽迺 「變」は君主の車馬の鈴。ここでは天子の乗る車

(變駕)を指すか。『後漢書』荀彧伝に「今變駕旋軫、東京榛蕪、義士有存本之思、兆人懷感奮之哀。」「華」は光り輝くこ

と。『礼記』楽記に「樂者、徳之華也」、正義に「樂者、徳之華也者、徳在於内、樂在於外、樂所以發揚其徳、故樂爲徳之光華也。」「羽」は舞う際に舞人が持つかざし。またその舞。

『周礼』地官・舞師に「舞師、掌教兵舞、帥而舞山川之祭祀、教帔舞、帥而舞社稷之祭祀、教羽舞、帥而舞四方之祭祀、教

皇舞、帥而舞旱暵之事」、鄭注に「羽、析白羽爲之、形如帔也。四方之祭祀謂四望也。」ここでは舞人と解した。あるいは、羽林を意味するか。「迺」ははらう。露払いをする意に

解した。『文選』卷二・張衡「西京賦」に「迺卒清候、武士赫怒」、李善注に「鄭玄禮記注曰、迺、遮也。迺、旅結切。清

候、清道候望也。」

⑤拂漢涵澍 「拂漢」は天の河を払う。「漢」は天の川。『毛詩』小雅・大東に「維天有漢、監亦有光」、毛伝に「漢、天河也。」

「涵澍」は水の光る様子を映し出す。『毛詩』小雅・巧言に「亂之初生、僭始既涵」、毛伝に「僭、數。涵、容也。」「文選」卷

八・司馬相如「上林賦」に「然後灑漾潢漾、安翔徐回。翺乎

澍澍、東注太湖、衍溢陂池」、李善注に「郭璞曰、水白光貌

也。鶯、胡角切。瀉、音鎬。」

⑥申申嘉夜 「申申」はなごやかでのどやかなさま。『論語』

述而に「子之燕居、申申如也、夭夭如也」、何晏集解の引く馬融の注に「申申、夭夭、和舒之貌也。」「嘉夜」は佳き夜。『漢書』礼楽志・郊祀歌十九章「練時日」に「俠嘉夜、茝蘭芳」注に「如淳曰、佳・俠、皆美人之稱。嘉夜、芳草也。師古曰、俠與挾同、言懷挾芳草也。茝即今白芷。茝音昌改反。」これによれば、「練時日」の「嘉夜」は芳草となる。

⑦翊翊休朝 「翊翊」はつつしむさま。『漢書』礼楽志に「既畏

茲威、惟慕純德、附而不驕、正心翊翊」、顔師古注に「言畏威懷德、皆來賓附、無敢驕怠、盡虔敬。」「休朝」はよき朝。『毛詩』小雅・菁菁者莪に「既見君子、我心則休」、鄭箋に「休者、休休然」、經典釈文に「休、虛虬反、美也。」

⑧行金景送 歩玉風韶 行進に金の飾りや玉の佩びものの響

きがあり、それによき光と風とが付き従う。『礼記』経解に「天子者、與天地參、故德配天地、兼利萬物、與日月竝明、明照四海而不遺微小。其在朝廷則道仁聖禮義之序、燕處則聽雅頌之音、行步則有環佩之聲、升車則有鸞和之音。」「景」

は日の光。『文選』卷二・張衡「西京賦」に「飾華楨與壁璫、流景曜之韓曄」、李善注に「景、光景也。」「送」は追う。付き従う。『毛詩』鄭風・大叔于田に「抑磬控忌、抑縱送忌」、毛伝に「騁馬曰磬、止馬曰控、發矢曰縱、從禽曰送。」「韶」は繼ぐ。『礼記』樂記に「韶、繼也」、鄭注に「舜樂名也。韶之言紹也、言舜能繼紹堯之德。」

⑨師承祀則 「師承」は師から教えを受けること。『後漢書』

儒林伝序に「若師資所承、宜標名爲證者、乃著之云。」「祀則」は祭祀のきまり。祀儀・祀典に近い意味か。『後漢書』祭祀志下に「時寇賊未夷、方務征伐、祀儀未設。」「礼記」祭法に「及夫日月星辰、民所瞻仰也。山林川谷丘陵、民所取財用也。非此族也、不在祀典。」

⑩肅對禋祧 「禋」はまつること。『毛詩』大雅・生民に「厥初

生民、時維姜嫄。生民如何、克禋克祀、以弗無子」、鄭箋に「克、能也。弗之言祓也。姜嫄之生后稷如何乎、乃禋祀上帝於郊禋、以祓除其無子之疾、而得其福也。能者、言齊肅當神明意也。二王之後、得用天子之礼。」「祧」は遠祖の廟。『礼記』祭法に「天下有王、分地建國、置都立邑。設廟・祧・壇・

壇而祭之、乃爲親疏多少之數。是故王立七廟、一壇一墀、曰
考廟、曰王考廟、曰皇考廟、曰顯考廟、曰祖考廟、皆月祭之。

遠廟爲祧、有二祧、享嘗乃止。去祧爲壇、去壇爲墀。壇墀有
禱焉、祭之、無禱乃止。」

(狩野 雄)

太祝裸地奏登歌樂詞二章

太祝 地に裸するに奏する登歌の樂詞二章

帝容承祀^② 練時涓日^④

帝容 祀を承け 時を練び日を涓ぶ

九重徹關^④ 四靈賓室^⑤

九重 關を徹り 四靈 室に賓たり

肅倡函音^⑥ 庶旄委佾^⑦

肅倡 音を函み 庶旄 佾を委む

休靈告饗^⑧ 嘉薦尚芬^⑨

休靈 告げて饗し 嘉薦 尚お芬る

玉瑚飾列^⑩ 桂簋昭陳^⑪

玉瑚 飾列し 桂簋 昭陳す

具司選禮^⑫ 翼翼振振^⑬

司を具え禮を選び 翼翼振振たり

太祝が獻酒を地にそそぐ裸の儀式に演奏する登歌の樂詞 二章

皇帝に相応しきありさまで祭祀を継ぎ行い、良き時と日を選ぶ。

九重の天門はかんぬきを取りさり、四種の靈獸が宮室に來臨す。

嚴肅な歌は音を包みこみ、盛んな旗飾りは列を重ねる。

めでたき神靈に報告してもてなし、良きお供え物はまだなお香り立つ。

玉で作られた瑚璉の器は美しくならび、桂で作られた簋簋の器はかがやき列なる。

官司を具備し儀礼を選定し、衆多にして盛大。

○押韻 「日・室・侑」は入声5「質」。「芬」は上平20「文」、「陳・振」は上平17「眞」。

①太祝裸地 「太祝」は祭祀の祈禱を掌る官。『周礼』春官・宗伯に「大祝 下大夫二人、上士四人、小祝中士八人、下士十有六人、府二人、史四人、胥四人、徒四十人」、鄭玄注に「大祝、祝官之長」、その疏に「案其職云掌六祝之辭、以事鬼神示、亦是事鬼神之法。故列職於此也。」また『宋書』百官志上には「太祝令、一人。丞一人。掌祭祀讀祝迎送神。太祝、周舊官也。漢西京置太祝令・丞、武帝太初元年、更名曰廟祀。漢東京改曰、太祝」とある。「裸」は獻酒を地にそそぎ、神の降臨を求める祭祀。『尚書』洛誥に「王入太室、裸」とあり、その疏に「王肅云、太室清廟中央之室、清廟神之所在、故王入太室。裸、獻鬯酒以告神也。裸者灌也。王以圭瓚酌鬯之酒、以獻尸。尸受祭而灌於地、因奠不飲、謂之裸」とある。また『周礼』春官・大宗伯には「以肆獻裸享先王」、鄭玄注に「裸之言灌。灌以鬯鬯。謂始獻尸求神時也」とある。

②帝容承祀 「帝容」は皇帝の威嚴あるありさま。班固「東都

賦」(『文選』卷二)に「爾乃盛禮興樂、供帳置乎雲龍之庭。

陳百寮而贊羣后、究皇儀而展帝容」とある。また『三國志』魏書・明帝紀に引く『魏書』に「帝容止可觀、望之儼然。自在東宮、不交朝臣、不問政事、唯潛思書籍而已」とある。「承祀」は先祖より祭祀を受け継いで執り行ふ。『毛詩』魯頌・閟宮に「周公之孫、莊公之子、龍旂承祀、六轡耳耳。春秋匪解、享祀不忒」とあり、鄭箋に「交龍爲旂。承祀謂視祭事也」、疏に「正義曰、交龍爲旂。春官司常文。承者奉持之義。故云承祀謂視祭事。此龍旂承祀、謂視宗廟之祭」とある。また類似した表現が「安世房中歌十七章」其十六(『漢書』礼樂志)に「孔容之常、承帝之明」とある。

③練時涓日 「練時」は時を選ぶ。「郊祀歌十九章・練時日」(『漢書』礼樂志)に「練時日、侯有望」とあり、師古注に「練、選也」とある。「涓日」は吉日を選ぶ。左思「魏都賦」(『文選』卷六)に「量寸旬、涓吉日。陟中壇、即帝位」とあり、

李善注に「涓、擇也」とある。

④九重徹關 「九重」は九層の天。「楚辭」天問に「圓則九重、孰營度之」とあり、王逸注に「言天圓而九重、誰營度而知之乎」とある。九層の天の門が開いて福祥が下ることは、「郊祀歌十九章・練時日」(『漢書』礼樂志)に「九重開、靈之旂」とあり、師古注に「天有九重、言皆開門而來降厥福。」とある。「徹關」は門のかんぬきを取りさる。「毛詩」小雅・楚茨に「諸宰君婦、廢徹不遲」とあり、鄭箋に「廢去也。尸出而可徹諸宰、徹去諸饌、君婦簋豆而已。不遲以疾爲敬也。」

⑤四靈寶室 「四靈」は麒麟、鳳凰、龜、龍の靈獸。『礼記』礼運に「何謂四靈。麟鳳龜龍、謂之四靈。」とあり、その疏に「何謂四靈、麟鳳龜龍、謂之四靈者、問答四靈名也。謂之靈者謂神靈。以此四獸皆有神靈、異於他物。故謂之靈。」また宋の武帝が禪讓されたときに四靈が現れたことが、『宋書』武帝紀中に(義熙二年)六月、至京師。晉帝禪位于王、詔曰、「……故四靈効瑞、川嶽啓圖、嘉祥雜遝、休應炳著」と見える。

「寶室」は四靈が宮殿に來臨する。傅玄「晋天地郊明堂歌五

篇・天郊饗神歌」に「整泰壇、祀皇神。精氣感、百靈賓」とある。『宋書』樂志二詁注稿(一)九五頁参照。

⑥肅倡函音 「肅倡」は嚴肅に唱われる歌。「安世房中歌十七章」其二(『漢書』礼樂志)に「七始華始、肅倡和聲。神來宴娛、庶幾是聽」とあるのを踏まえる。その師古注に「肅、敬也。言歌者敬而倡諧和之聲」とあるが、王先謙注に「肅倡和聲相爲爲文。敬而和也。樂記注倡發歌句也」とある。「函音」は音を包み込む。「函」は含む。「郊祀歌十九章・天地」(『漢書』礼樂志)に「展詩應律銷玉鳴、函宮吐角激徵清。發梁揚羽申以商、造茲新音永久長」とあり、師古注に「晉說非也。自函宮吐角以下、總言五聲之備耳。申、重也。發梁、歌聲繞梁也。函與合同」とある。「安世房中歌十七章」其二(既引)の「和聲」を踏まえ、複数の音を包み込むように諧和させることを言うか。

⑦庶旒委佻 「庶旒」は多くの旗飾り。「安世房中歌十七章」其一(『漢書』礼樂志)に「金支秀華、庶旒翠旒」とあり、その注に「張晏曰、金支、百二十支。秀華、中主有華豔也。旒、鍾之旒也。文穎曰、析羽爲旒、翠羽爲之也。臣瓚曰、樂上衆

飾、有流遡羽葆、以黃金爲支、其首敷散、若草木之秀華也。師古曰、金支秀華、瓚說是也。庶、衆也。庶旄翠旌、謂析五采羽、注翠旄之首而爲旌耳」とある。「佾」は舞人の隊列を言う。『論語』八佾に「孔子謂季氏、八佾舞於庭」とあり、注に「馬曰、……佾、列也。天子八佾、諸侯六、卿大夫四、士二。八人爲列、八八六十四人」とある。また『郊祀歌十九章・天地』（『漢書』礼樂志）に「千童羅舞成八溢、合好效歡虞泰一」とあり、師古注に「溢與佾同。佾、列也」とある。旗飾りと八佾とがともに用いられる例は、成公綏「雅樂正旦大会行礼詩十五章」に「建五旗、羅鐘虡。列四縣、奏韶武。鏗金石、揚旌羽。縱八佾、巴渝舞」とある。『宋書』樂志二記注稿（四）一三七頁参照。

⑧休靈告饗 「休靈」はめでたき神靈。『後漢書』礼儀志上に「正月甲子若丙子爲吉日、可加元服、儀從冠禮」とあり、その注に引く『博物記』に「孝昭帝冠辭曰、陛下擯顯先帝之光耀、以承皇天之嘉祿、欽奉仲春之吉辰、普尊大道之郊域、秉率百福之休靈、始加昭明之元服」とある。「告饗」は神靈に報告してもてなす。「安世房中歌十七章」其十三（『漢書』礼

樂志）に「嘉薦芳矣、告靈饗矣。告靈既饗、德音孔臧」とある。

⑨嘉薦尚芬 「嘉薦」は祭祀の供物。『儀礼』士冠礼に「醴辭曰、『甘醴惟厚、嘉薦令芳』」とあり、鄭玄注に「嘉、善也。善薦謂脯醢。芳香也」とある。また「安世房中歌十七章」其十三（既引）「嘉薦芳矣、告靈饗矣」とあり、殷淡「章廟樂舞歌詞・賓出入奏肅成樂歌詞二章」其二に「鴻慶遐邇、嘉薦令芳」と既出。本記注稿一三五頁の注⑭参照。

⑩玉瑚飾列 「瑚」は祭祀で黍稷を盛る器。『礼記』明堂位に「有虞氏之兩敦、夏后氏之四連、殷之六瑚、周之八簋」とあり、鄭玄注に「皆黍稷器。制之異同未聞」とあり、その疏に「正義曰、簋是黍稷之器。敦與瑚璉共簋簋、連文。故云、黍稷器也。按鄭注周禮舍人云、方曰簠、圓曰簋。此云未聞者、謂瑚璉之器與簋異同、未聞也。鄭注論語云、夏曰瑚、殷曰璉、不同者。皇氏云、鄭注論語誤也。此言兩敦・四璉・六瑚・八簋者、言魯之所得唯此耳」とある。また『論語』公冶長に「子貢問曰、『賜也、何如。』子曰、『女器也。』曰、『何器也。』曰、『瑚璉也』」、注に「包曰、瑚璉、黍稷之器。夏曰瑚。殷曰璉。

周曰簠簋。宗廟之器貴者」とある。

⑪ 桂簋昭陳 「簋」は祭祀で黍稷などを盛る器。『周礼』地官・

舍人に「凡祭祀共簠簋、實之陳之」とあり、鄭玄注に「方曰簠、圓曰簋。盛黍稷稻粱器」とある。「昭陳」はかがやきつらなる。「昭列」に同じ。王延寿「魯靈光殿賦」(『文選』卷一

一)に「承明堂於少陽、昭列顯於奎之分野」とあり、その李善注に「言承漢明堂而在少陽之位、其光昭列、顯於奎之分野也。」とある。また顔延之「宋文帝元皇后哀策文」(『文選』

卷五八)に「皇塗昭列、神路幽嚴」とあり、李善注に「皇塗、古制、故曰昭列」とある。なお殷淡「章廟樂舞歌詞・薦豆呈毛血奏嘉薦樂歌詞」に「六典飾文、九司昭序。牲柔既昭、儀剛既陳」と「昭」と「陳」を対句に用いる例が見える。本訳注稿一三八頁参照。

⑫ 具司選禮 「具司」は百官の職掌を完備する。『礼記』祭義

に「孝子將祭、慮事不可以不豫。比時具物、不可以不備。……薦其薦俎、序其禮樂、備其百官、奉承而進之。於是論其

志意、以其恍惚以與神明交、庶或饗之」とある。また殷淡「章

廟樂舞歌詞・賓出入奏肅成樂歌詞二章」其二に「皇靈降祉、百祗具司」とある。本訳注稿一三五頁の注⑧参照。「選禮」は儀礼を正しく選定する。殷淡「章廟樂舞歌詞・賓出入奏肅成樂歌詞二章」其一に「先期選禮、肅若有承」とある。本訳注稿一三二頁の注⑬参照。

⑬ 翼翼振振 「翼翼」「振振」はいずれも盛んなさま。『毛詩』

小雅・楚茨に「我黍與與、我稷翼翼。我倉既盈、我庾維億」とあり、鄭箋に「黍與與、稷翼翼、蕃廩貌。陰陽和、風雨時、則萬物成。萬物成、則倉庾充滿矣。倉言盈、庾言億、亦互辭、喻多也。十萬曰億」とある。また「安世房中歌十七章」其七(『漢書』礼樂志)に「馮馮翼翼、承天之則」とあり、師古注に「馮馮、盛滿也。翼翼、衆貌也」とある。「振振」については、『左伝』僖公五年に「均服振振、取號之旂」とあり、杜預注に「振振、盛貌」とある。また顔延之「宋郊祀歌二首」其一(『文選』卷二七)に「遙興遠駕、曜曜振振」とある。

裸崇祀典^① 耐恭孝時^②
禮無爽物^③ 信靡媿詞^④
精華孚鬯^⑤ 誠監昭通^⑥
升歌羽節^⑦ 下管調風^⑧
皇心履變^⑨ 敬明尊親^⑩
大哉孝德 至矣交神^⑪

裸は祀典を崇^つび 耐は孝時を恭^つしむ
禮に物に爽^{たが}う無く 信に詞に媿^{たが}づる靡し
精華 孚に鬯^のび 誠監 昭かに通^つづ
升歌 節を翊^{たす}け 下管 風を調^う
皇心 變を履^{おこな}い 敬んで親を尊ぶを明らかにする
大いなるかな 孝德 至れるかな 交神

裸の儀式は祭祀の典礼を尊び、献げ物は父祖への孝をつつしみ深くする。

儀礼に違うものなく全て揃い、信の心に神靈への言葉に恥づることもない。

精華はたしかにゆきわたり、誠実な皇帝の見識は明らかで行き届いている。

登上の歌は節操を支え、堂下の笛は風俗をととのえる。

皇帝の心は変革を實踐され、慎みて祭祀を行い先祖を尊ぶ事を明らかにされる。

大いなることよ 孝の徳、この上なき 神靈との交わり。

○押韻 「時・詞」は、上平7「之」。「通・風」は、上平1「東」。「親・神」は、上平17「眞」。

①裸崇祀典 「裸」は献酒を地にそそぎ、神の降臨を求める祭

謂祭祀也、疏に「非此族也、不在祀典者、合結上事也。族類

祀。前詩注①参照。「祀典」は祭祀の儀礼。『礼記』祭法に「非

也。若非上自厲山以下及日月丘陵之等無益於民者、悉不得

此族也、不在祀典」とあり、鄭玄注に「族、猶類也。祀典、

預於祭祀之典也」とある。また儀礼に関する同時期の例と

して、顔延之「皇太子釈奠會作詩」（『文選』卷二〇）に「敬躬祀典、告奠聖靈」とある。

- ② 酎恭孝時 「酎」は献じる。もとは礼楽に用いる濃い酒を言う。『礼記』月令・孟夏之月に「是月也、天子飲酎、用禮樂」とあり、鄭玄注に「酎之言、醇也。謂重釀之酒也。春酒至此始成、與羣臣以禮樂飲之於朝、正尊卑也」とある。「酎」を献じる意味で用いる例は、『史記』平準書に「至酎、少府省金、而列侯坐酎金失侯者百餘人」集解に「如淳曰、漢儀注、王子爲侯、侯歲以戸口酎黃金於漢廟、皇帝臨受獻金以助祭」とある。また殷淡「章廟樂舞歌詞・賓出入奏肅成樂歌詞二章」其一に「助寶奠軒、酎珍充庭」とある。本訳注稿一三三頁の注⑭参照。「孝時」は祭祀を行う時をいう。『礼記』祭統に喪の後には祭祀を行うことが孝であると言う。『礼記』祭統に「祭者、所以追養繼孝也。孝者畜也。順於道不逆於倫、是之謂畜。是故、孝子之事親也、有三道焉。生則養、沒則喪、喪畢則祭。養則觀其順也、喪則觀其哀也、祭則觀其敬而時也。盡此三道者、孝子之行也」とある。

- ③ 禮無喪物 祭祀が礼に違わずに全て揃っていることを言う。

祭祀の準備が整っていることが孝の心の現れであることは、『礼記』祭義に「孝子將祭、慮事不可以不豫。比時具物、不可以不備。虛中以治之。宮室既修、牆屋既設、百物既備、夫婦齊戒沐浴、盛服奉承而進之、洞洞乎、屬屬乎、如弗勝、如將失之、其孝敬之心至也與」とある。「爽」は相違する。『左伝』昭公五年に「晉侯謂女叔齊曰、『魯侯不善善於禮乎。』對曰、『魯侯焉知禮。』公曰、『何爲。自郊勞至于贈賄、禮無違者、何故不知。』對曰、『是儀也。不可謂禮。禮所以守其國、行其政令、無失其民者也』」とある。

- ④ 信靡媿詞 「媿詞」は神靈に告げる言葉に恥じる。一句は思いに偽りの無いことを言う。『宋書』礼志四に「晉武帝泰始元年十二月、詔『昔聖帝明王、修五嶽・四瀆、名山川澤、各有定制。所以報陰陽之功、而當幽明之道故也。然以道莅天下者、其鬼不神、其神不傷人也。故祝史薦而無媿詞、是以其人敬慎幽冥、而淫祀不作』」とある。

- ⑤ 精華孚鬯 「精華」はすぐれて美しいもの。『史記』天官書に「故候息耗者、入國邑、視封疆田疇之正治、城郭室屋門戶之潤澤、次至車服畜產精華。實息者、吉。虛耗者、凶」とある。

り、「楚辭」九歎・惜賢に「遊蘭皋與惠林兮、睨玉石之嵯峨、揚精華以眩耀兮、眩耀光兒」、芳鬱渥而純美（渥厚芳）」とある。また殷淡「皇帝還東壁受福酒奏嘉時之樂舞詞」に「澄明臨四表、精華延八鄉」とある。本訳注稿一七二頁の注⑮参照。「鬯」はのびる。「安世房中歌十七章」其四（「漢書」礼楽志）に「王侯秉德、其鄰翼翼、顯明昭式。清明鬯矣、皇帝孝德。竟全大功、撫安四極」とあり、師古注に「鬯、古暢字。暢、通也。」とある。また殷淡「章廟樂舞歌詞・賓出入奏肅成樂歌詞二章」其二に「鴻慶遐鬯、嘉薦令芳」、「皇帝入廟北門奏永至樂歌詞」に「皇明鬯矣、孝容以昭」とある。本訳注稿一三五頁の注⑬及び一五〇頁の注②参照。

⑥誠監昭通 「誠監」は誠実な皇帝の見識。「監」は見守る。傅玄「晋宗廟歌十一篇・祠廟夕牲歌」に「神鑒厥誠、博碩斯歆。祖考降饗、以虞孝孫之心」とあり、殷淡「章廟樂舞歌詞・牲出入奏引牲樂歌詞」に「神監孔昭、嘉是柔牲」とある。前者については「宋書」樂志二訳注稿（二）八一頁注⑥、後者については本訳注稿一三八頁の注⑫参照。これらは天の見識を指すが、ここでは皇帝の見識を言う。また「通」はゆ

き届くの意で解したが、天に通じるの意である可能性もある。王韶之「宋四箱樂歌五篇・食舉歌十章」其五に「靈化倬四時、幽誠通玄默」とある。本訳注稿一〇四頁参照。

⑦升歌翊節 「升歌」は堂上で歌唱される歌。『礼記』郊特牲に「奠酬而工升歌、發德也。歌者在堂、匏竹在下、賁人聲也」、「周礼」春官・大司馬に「大祭祀、帥瞽登歌、令奏擊拊（鄭司農云、登歌歌者在堂也）。下管、播樂器、令奏鼓鞀（鄭司農云、下管、吹管者在堂下）」とある。また謝莊「宋明堂歌・登歌」に「肆夏式敬、升歌發德」、王韶之「宋宗廟登歌・祠高祖武皇帝登歌」に「降德兆民、升歌清廟」とあり、「升歌」は德を發揚し、文王の德を讃えた「清廟」を歌うとある。前者については「宋書」樂志二訳注稿（一）一一二八頁の注⑧、後者については「宋書」樂志二訳注稿（二）一五五頁の注⑮参照。「翊節」は節操を助ける。「翊」は助ける。殷淡「章廟樂舞歌詞・賓出入奏肅成樂歌詞二章」其二に「翊帝明德、永祚流光」、「章廟樂舞歌詞・薦豆呈毛血奏嘉薦樂歌詞」に「聖靈戾止、翊我皇則」とある。それぞれ本訳注稿一三三頁及び一四三頁の注⑨参照。「節」は節操。又は礼節。登歌に「清廟」を歌

う意義について、『礼記』文王世子に「反登歌清廟（反謂獻羣老畢、皆升就席也。反就席、乃席正於西階上。歌清廟以樂之）。既歌而語。以成之也。言父子君臣長幼之道、合德音之致。禮之大者也（既歌謂樂正告正歌備也。語談說也。歌備而旅。旅而說父子君臣長幼之道。說合樂之所美、以成其意。郷射記曰、古者於族也語）」とある。

⑧下管調風 「下管」は堂下で演奏される管楽器。前注参照。

「調風」は風俗をととのえる。『宋書』礼志三に「（大明）四年四月辛亥、有司奏曰、『……太祖文皇帝以啓邁泰運、景望震凝、采樂調風、集禮宣度、祖宗相映、軌迹重暉』」とある。

⑨皇心履變 「皇心」は皇帝の御心。顔延之「拜陵廟作」（『文選』卷二三）に「皇心憑容物、民思被歌聲」とあり、李善注に「皇心、謂文帝也」とある。「履變」は変革を行う。王韶之「宋四箱樂歌五篇・食拳歌十章」其二に「融皇風、窮一變」とある。この「一變」については、『論語』雍也に「子曰、齊一變、至於魯。魯一變、至於道」とあり、注に「包曰、言齊魯有太公、周公之餘化。太公大賢、周公聖人。今其政教雖衰、若有明君興之、齊可使如魯、魯可使如大道行之時」とある。

本訳注稿九七頁の注⑬参照。

⑩敬明尊親 「敬明」はつつしみ明らかにする。『尚書』康誥

に「王曰、『嗚呼、封、敬明乃罰』（歎而勅之。凡行刑罰、汝必敬明之、欲其重慎。）」とあり。その疏に「正義曰、以上既言明德之理、故此又云慎罰之義。而王言曰、嗚呼封、又當敬明汝所行刑罰、須明其犯意」とある。また『毛詩』魯頌・泮水に「穆穆魯侯、敬明其德。敬慎威儀、維民之則」とあり、その疏に「正義曰、言穆穆然美者是魯侯。僖公能敬明其德、又敬慎其舉動威儀、内外皆善、維爲下民之所法則也」とある。「尊親」は孝の中で最も大切な行為。『礼記』祭義に「曾子曰、『孝有三。大孝尊親。其次弗辱。其下能養』」とあり、その疏に「孝有三者、大孝尊親、一也。卽是下文云、『大孝不匱』。聖人爲天子者也。尊親、嚴父配天也」とある。

⑪至矣交神 「交神」は神靈と通じる。『漢書』郊祀志に「後成都侯王商爲大司馬衛將軍輔政、杜鄴說商曰『……詩曰『率由舊章』。舊章、先王法度、文王以之、交神于祀、子孫千億。宜如異時公卿之議、復還長安南北郊』」とある。また『礼記』祭義に「於是論其志意、以其恍惚、以與神明交、庶或饗之。庶

或饗之、孝子之志也」とある。

章皇太后神室奏章德凱容之樂舞歌詞^①

章皇太后の神室に章德凱容の樂舞を奏する歌詞^①

幽瑞浚靈^② 表彰嬪聖^③

幽瑞浚靈 聖に嬪するを表彰す

翊載徽文^④ 敷光崇慶^⑤

徽文を翊^{たす}け載せ 光を敷き慶を崇^{たか}くす

上緯繡祥^⑥ 中維飾詠^⑦

上は繡祥を緯^おり 中は飾詠を維^{つな}ぐ

永屬煇猷^⑧ 聯昌景命^⑨

永く煇猷に屬^つき 聯^つなりて景命^{さかん}を昌^{さかん}にす

章皇后のみたまやにて徳を章らかにする凱容の樂舞を演奏する歌詞

神妙なる瑞祥に大いなるしるしは、聖帝への奉仕をたたえ明らかにする

国家のよき文物をたすけささえ、大いなる輝きを広げて善きことを盛んにする。

天上ではまつわる祥瑞を織りなし、宮殿では仕立てられた樂章を歌いつなぐ。

永く輝けるはかりごとをたのみ、ともにつらなつて大いなる天命を盛んにさせる。

○押韻 「聖」は去声45「勁」、「慶・詠・命」は去声43「映」。

①章皇太后神室奏章德凱容之樂 「章皇太后」は武帝の胡婕妤。

時年四十二。葬丹徒。高祖踐阼、追贈婕妤。太祖卽位、有司

文帝之母。『宋書』后妃伝・武帝胡婕妤に「武帝胡婕妤諱道

奏曰『……謹上尊號曰章皇太后、陵曰熙寧。』立廟於京師」と

安、淮南人。義熙初、爲高祖所納、生文帝。五年、被譴賜死、

ある。「凱容」は『宋書』樂志二に「(孝建二年)尚書左僕射

建平王宏議以爲、「……晉氏之樂、正德・大豫、及宋不更名、直爲前後二舞、依據昔代、義舛事乖。今宜釐改權稱、以凱容爲韶舞、宣烈爲武舞。……章皇太后廟、依諸儒議、唯奏文樂。何休・杜預・范甯注『初獻六羽』、並不言佾者、佾則干在其中、明婦人無武事也」とある。また『宋書』樂志一に「籥、不知誰所造。周禮有籥師、掌教國子秋冬吹籥。今凱容、宣烈舞所執羽籥是也。蓋詩所云『左手執籥、右手秉翟』者也」とある。

②幽瑞浚靈 「幽瑞」は深妙なる瑞祥。『宋書』礼志三に「(大明)四年四月辛亥、有司奏曰、『…太宰江夏王臣義恭咀道遵英、抽奇麗古、該潤圖史、施詳闕載、表以功懋往初、德耀炎・昊、升文中佾、登牒天關、耀冠榮名、摘振聲號。而道謙稱首、禮以虛挹、將使玄祗缺觀、幽瑞乖期、梁甫無盛德之容、介丘靡升聞之響。』」とある。「浚靈」は大いなるしるし。「浚」は大きい。『尚書』皋陶謨に「日宣三德、夙夜浚明、有家」とあり、偽孔伝には「三德九德之中有其三。宣布、夙早、浚須也。卿大夫稱家。言能日布行三德、早夜思之、須明行之、可以爲卿大夫」とあり、「浚」を須^まつの意で解するが、『經典釋文』

に「浚息俊反。馬云大也」とある。また顔延之「皇太子釋奠會作詩」(『文選』卷二〇)に「浚明爽曙、達義茲昏」とあり、李善注に「以日喻道也。大明之道、既以爽曙、道達之義、於此彌昏也。尚書曰、夙夜浚明有家。馬融曰、浚、大也」とある。「靈」は靈驗。『楚辭』離騷に「皇剡剡其揚靈兮、告余以吉故」とあり、王逸注に「言皇天揚其光靈、使百神告我、當去就吉善也」とある。

③表彰嬪聖 「表彰」は外に表して明らかにする。『後漢書』光武帝紀に「(中元元年)羣臣奏言『地祇靈應而朱草萌生。孝宣帝每有嘉瑞、輒以改元、神爵・五鳳・甘露・黃龍、列爲年紀、蓋以感致神祇、表彰德信』」とある。「嬪聖」は天子に妻としてつかえる。左芬「元皇后誄」(『晋書』后妃伝上・左貴嬪)に「乃娉乃納、聿嬪聖皇。正位閨闈、惟德是將」とある。

④翊載徽文 「翊載」の用例は未見だが、「翼戴」であれば、『左伝』昭公九年に「翼戴天子而加之以共(翼佐也。)」とある。また「載」については、『周易』坤卦の彖伝に「坤厚載物、德合無疆」とあり、疏に「坤厚載物、德合无疆者、以其

廣厚、故能載物。有此生長之德、合會無疆」とある。大地のように万物を載せる皇太后の徳を言うか。「徽文」はよき文物。類いの語としては「徽典」の用例が、『宋書』礼志四に「明帝泰始二年正月、孝武昭太后崩。五月甲寅、有司奏、『博士王略・太常丞虞愿議、「正名存義、有國之徽典。臣子一例、史傳之明文」』とある。「文」は文物。礼儀制度。『論語』子罕に「曰文王既沒。文不在茲乎」とある。また殷淡「章廟樂舞歌詞・薦豆呈毛血奏嘉薦樂歌詞」に「六典飾文、九司昭序」とある。本訳注稿一四〇頁の注⑤参照。

⑤敷光崇慶 「光」は大いなる輝き。傅玄「晋正德大豫二舞歌二篇・大豫舞」に「於鑠皇晉、配天受命。熙帝之光、世德惟聖」とあり、また傅玄「食举樂東西箱歌十二篇・隆化」に「我有賓使、觀國之光」とある。前者は『宋書』樂志二訳注稿(三二)一一九頁、後者は『宋書』樂志二訳注稿(三三)一五〇頁の注②参照。「慶」は善事。『尚書』呂刑に「一人有慶、兆民賴之。其寧惟永」とあり、偽孔伝に「天子有善、則兆民賴之、其乃安寧長久之道」とある。また『毛詩』大雅・皇矣に「維此王季、因心則友。則友其兄、則篤其慶、載錫之光」

とあり、毛伝に「因親也。善兄弟曰友。慶善、光大也」、鄭箋に「篤厚、載始也。王季之心親親而又善於宗族。又尤善於兄大伯。乃厚明其功美。始使之顯著也。大伯以讓爲功美、王季乃能厚明之。使傳世稱之亦其德也」とある。「光」と「慶」を対として用いる例は、明帝「宣皇太后神室奏宣德凱容之樂舞歌詞」に「聯光騰世、炳慶翔機」と見える。本訳注稿一六七頁参照。また「敷」ではないが、「崇」と「布」を対として用いる例が、『三国志』陳群伝に「是時、帝初蒞政、羣上疏曰、『陛下當盛魏之隆、荷二祖之業、天下想望至治。唯有以崇德布化、惠恤黎庶、則兆民幸甚』」と見える。

⑥上緯纏祥 「纏祥」はまといつくように現れる瑞祥。明帝「昭皇太后神室奏昭德凱容之樂舞歌詞」に「表靈纏象、續儀緯風」とあり、「皇帝還東壁受福酒奏嘉時之樂舞詞」に「靈慶纏世社、鴻烈永無疆」とある。本訳注稿一六六頁の注⑤及び一七〇頁参照。前後の聯が皇太后を主体とすることから考えると、或いはこの聯も皇太后の行為又は天上に対する働きかけを言うのかもしれない。

⑦中維師詠 「維」はつなく。皇太后との関連から「地維」を

連想させる語。「飾詠」は美しく仕立てられた歌詠。殷淡「章

廟樂舞歌詞・薦豆呈毛血奏嘉薦樂歌詞」に「六典飾文、九司

昭序」とあり、殷淡「太祝禋地奏登歌樂詞三章」其一に「玉

瑚飾列、桂盥昭陳」とある。本訳注稿一三八頁及び一五二頁

参照。

⑧永屬輝猷 「輝猷」は輝けるはかりごと。『宋書』律曆志中

に「有司奏、『……方今皇猷載暉、舊域光被、誠應綜覈曷度、

以播維新。承天曆術、合可施用』」とある。また張華「食舉

東西箱樂詩十一章」其九に「有命既集、光帝猷」とある。『宋

書』樂志二訳注稿（四）「七四頁の注⑧参照。

⑨聯昌景命 「景命」は天から与えられた大いなる命。『毛詩』

大雅・既醉に「君子萬年、景命有僕」とあり、鄭箋に「成王、

女既有萬年之壽。天之天命、又附著於女。謂使爲政教也」と

ある。また傅玄「食舉東西箱歌十二篇・時邕」に「我皇撫之、

景命惟新」とある。『宋書』樂志二訳注稿（三）「一六三頁の

注⑦参照。

（佐藤大志）

①昭皇太后神室奏昭德凱容之樂舞歌詞 明帝造 ②昭皇太后の神室に昭德凱容の樂舞を奏する歌詞 明帝造る

表靈纏象^④ 續儀緯風^⑤ 靈を表し象を纏い 儀を續ぎ風を緯す^{おりな}

膺華丹耀^⑦ 登瑞紫穹^⑧ 華に丹耀に膺り^{あた} 瑞を紫穹に登らす

訓形霄宇^⑩ 武彰宸宮^⑪ 訓えは霄宇に形われ^{おし} 武は宸宮に彰わる

騰芬金會^⑫ 寫德聲容^⑬ 芬を金會に騰げ^{あち} 德を聲容に寫す

昭皇太后のおたまやにて德を昭らかにする凱容の樂舞を演奏する歌詞 明帝の作

靈妙さを形に表わし、風儀を繼承して織りこむ。

徳の華（である舞樂）に丹の輝く庭で出会い、瑞祥を天の紫宮に登らせる。
教えが天空にあらわれ、武の舞は宮殿に彰らか。

かおりを金の樂器（鐘）の交会に騰げ、徳を音のすがたに写しとる。

○押韻 「風・穹・宮」は上平1 「東」、「容」は上平3 「鍾」。

①昭皇太后 四一二年以後、四六六年以後。明帝の異母兄である孝武帝の生母で、明帝の養母。『宋書』后妃伝・文帝路淑媛伝に「文帝（明帝の父）路淑媛諱惠男、丹陽建康人也。

以色列選入後宮、生孝武帝（明帝の兄）、拜爲淑媛。年既長、無寵、常隨世祖（孝武帝）出蕃。……太宗（明帝）踐阼、號

崇憲太后。初太宗少失所生、爲太后所攝養、太宗盡心祗事、而太后撫愛亦篤。及上即位、供奉禮儀、不異舊日。……尋崩、

時年五十五。……諡曰昭皇太后、葬世祖陵東南、號曰修寧陵。」

②昭德凱容之樂舞

「昭徳」は、徳をあきらかにする。「凱容之樂舞」は、皇帝が祭祀で御神酒を初めて献じる時に奏する樂舞。『宋書』樂志一に、劉宏の建議で「初獻」の時「凱容」の舞を奏することが決まった、とある。「孝建二年（四五五）

孝武帝）、……尚書左僕射建平王宏議以爲……。眾議並同宏「祠南郊迎神、奏肆夏。皇帝初登壇、奏登哥。初獻、奏凱容・宣烈之舞。送神、奏肆夏。祠廟迎神、奏肆夏。皇帝入廟門、奏永至。皇帝詣東壁、奏登哥。初獻、奏凱容・宣烈之舞。終獻、奏永安。送神奏肆夏。」詔可。」

③明帝 四三九～四七二。劉彧。文帝の第十一子。『宋書』明帝紀に「太宗明皇帝諱彧、字休炳、小字榮期、文帝第十一子也。」注①も参照。

④表靈 靈妙さを表す。『宋書』符瑞志下に「元嘉二十四年（四四七）七月乙卯、嘉禾旅生華林園及景陽山、園承梅道念以聞。太尉江夏王義恭上表曰『……自皇運受終、辰曜交和、是以丹木表靈、山淵効寶。』」また『文選』卷二六・謝靈運「登江中孤嶼」（四二三年頃）に「表靈物莫賞、蘊眞誰爲傳。」

⑤纏象 用例が見当たらないが、「表象」なら『史記』亀策列伝に「會上欲擊匈奴、西攘大宛、南收百越、卜筮至預見表象、先圖其利。」

⑥續儀緯風 風儀を継いで織りこむ。「續」は継ぐ。『尚書』仲虺之誥に「有夏昏德、民墜塗炭。天乃錫王勇智、表正萬邦、續禹舊服、偽孔伝に「言……繼禹之功、統其故服。」「毛詩』魯頌・閟宮にも「奄有下土、續禹之緒。」「緯」は織りこむ。『宋書』謝靈運伝論に「至于建安、曹氏基命、二祖陳王、咸著盛藻、甫乃以情緯文、以文被質。」「儀」「風」は、たとえば『世說新語』雅量篇に「庾太尉風儀偉長、不輕舉止、時人皆以爲假。」

⑦膺華 表に現れた精華に出会う。「膺」は当たる。『尚書』武成「我文考文王、克成厥勳、誕膺天命、以撫方夏」、偽孔伝に「言我文德之父、能成其王功、大當天命、以撫綏四方中夏。」「華」は『礼記』樂記の「德者、性之端也。樂者、德之華也（樂者德之華也者、德在於内、樂在於外）」を意識するか。

⑧丹雘 皇后の宮殿の中庭が朱く塗られている、その輝き。『漢書』外戚伝・孝成趙皇后伝に「皇后既立、後寵少衰、而弟

絶幸、爲昭儀。居昭陽舍、其中庭彤朱、而殿上髹漆。」

⑨紫穹 天空の中央に位置する太一の宮居。『史記』天官書の冒頭に「中宮天極星、其一明者、太一常居也。旁三星三公、或曰子屬。後句四星、末大星正妃、餘三星後宮之屬也。環之匡衛十二星、藩臣。皆曰紫宮。」「登瑞紫穹」とは、地上に出現した瑞祥を舞に表して天に示すことか。

⑩武 周の武王の舞名で舞の提喻。「舞」の音通でもある。『周礼』地官・司徒「興武」の阮元の校勘記に「武」「無」「舞」が通じる、とある。「九經古義云、古無・武同音、又武・舞通。……漢武梁祠堂畫象秦武陽、今史記作秦舞陽。」「論語」八佾に「子謂韶、盡美矣、又盡善也（孔曰、韶、舜樂名。謂以聖德受禪、故盡善）。謂武、盡美矣、未盡善也（孔曰、武、武王樂也。以征伐取天下、故未盡善）。」「礼記』樂記に「賁牟賈侍坐於孔子。孔子與之言及樂曰『夫武之備戒之已久、何也』」、鄭注に「武、謂周舞也」、孔疏に「武謂周之武樂、欲作武樂之前、先擊鼓、備戒其歟。」なお『宋書』樂志一に「（孝建二年）尚書左僕射建平王宏議以爲『……章皇太后廟、依諸儒議、唯奏文樂。何休・杜預・范甯注『初獻六羽』、並不言佾

者、侑則干在其中、明婦人無武事也。」(前章の注①参照)と、婦人の廟には「武」楽を用いないとある。ならば「武彰宸宮」の「宸宮」は皇帝の宮居で、対偶をなす前句「訓形霄宇」の「訓」が、『広韻』によれば女性への誠を含意するので、「訓形」聯は、皇后と皇帝の対になっているのかもしれない。『広韻』去声二三「問」に「訓、誠也。男曰教、女曰訓。」

⑪宸宮 「宸宮」は用例が見当たらないが、「宸極」なら『三国志』文帝紀の裴松之注引「献帝伝載禪代衆事」所収「上書」の隔句対の中で「紫庭」の対語になっており、宮廷の意。「己巳、魏王上書曰『……庶章通紫庭、得全微節、情達宸極、永守本志。』」

⑫金會 「金」は樂器の鐘、「會」はそのリズムを合わせる。

宣皇太后^①神室奏宣德凱容之樂舞^②歌詞 明帝造^③
天樞凝燿^④ 地紐儺煇^⑤
聯光騰世^⑥ 炳慶翔機^⑦
薰藹中寓^⑧ 景纏上微^⑨

天樞^{かがや} 燿きを凝らし 地紐^{ひか} 煇りを儺ぶ
聯なる光りは世に騰がり 炳^{あきけ} き慶びは機に翔ける
薰^{かおり} は中寓^{ちゆうう}に藹たり 景^{ひかり} は上微^{まつ}に纏わる

『国語』楚語上に「(伍舉) 對曰『臣……不聞其以土木之崇高形鏤爲美、而以金石匏竹之昌大囂庶爲樂』」、韋昭注に「昌、盛也。囂、謹也。庶、衆也。金、鐘也。石、磬也。匏、笙也。竹、簫也。」『周礼』春官・大胥に「以六樂之會、正舞位(大同六樂之節奏、正其位、使相應也)。」

⑬馨容 音声のさま。『礼記』玉藻に「君子之容、……手容恭(高且正也)、目容端(不睇視也)、口容止(不妄動也)、聲容靜(不噦歎也)。」本章の「寫德馨容」は、『後漢書』祭祀志下注引「東觀書」所収の永平三年八月の東平王劉蒼の議にいう「歌所以詠德、舞所以象功」や、『宋書』樂志二・傅玄「晋宗廟歌十一篇・祠廟饗神歌二篇・其二」にある「舞象功、歌詠德」(『宋書』樂志二詠注稿(二))一〇一頁〜一〇二頁)に通じている。

宣皇太后の神室に宣德の凱容の樂舞を奏する歌詞 明帝造る

玉頌^① 金籥傳徽

玉の頌^{はめうた}は徳を^{ちりは}鏤め 金の籥^{ふえ}は徽を傳う

宣皇太后のおたまやにて徳を發揚する凱容の樂舞を演奏する歌詞 明帝の作

天空の中枢の星がかがやきを凝らし、大地を繋ぐ紐が明るさを並べる。
連なる光が世に揚がり、明らかな慶びが空に翔ける。

かおりが天下に満ち、ひかりが紫微の天宮に纏わる。

玉のごときほめうたが徳をちりばめ、金の笛が善きおしえを伝える。

○押韻 「輝・機・微・微」は上平8「微」。

①宣皇太后 四一二―四五三。明帝の生母。『宋書』后妃伝・

文帝沈婕妤伝に「文帝（明帝の父）沈婕妤諱容姬、不知何許

人也。納於後宮、爲美人。生明帝、拜爲婕妤。元嘉三十年卒、

時四十。葬建康之莫府山。……太宗（明帝）即位、……諡曰

宣太后、陵號曰崇寧。」

②宣德凱容之樂舞 「宣德」は、徳を宣揚する。「凱容之樂舞」

は、前章の注②参照。

③明帝 前章の注③参照。

④天樞 北斗七星の一番目の星。『史記』天官書に「北斗七星

〈素隱案、春秋運斗樞云、斗、第一天樞、第二旋、第三璣、

第四權、第五衡、第六開陽、第七搖光〉。」

⑤地紐 大地を繋ぐ紐で、「地維」と同意か。『淮南子』天文訓

に「昔者共工與顓頊爭爲帝、怒而觸不周之山。天柱折、地維

絶。天傾西北、故日月星辰移焉。地不滿東南、故水潦塵埃歸

焉。」また『宋書』樂志二・謝莊「宋明堂歌・迎神歌詩」に「地

紐謐、乾樞回。華蓋動、紫微開。」

⑥儺輝 光をならべる。「天樞」（父、文帝）に「地紐」（母、宣

皇太后）を並べる発想か。『周易』説卦に「乾爲天、爲圓、爲

君、爲父、……坤爲地、爲母。」本章一聯目の「天樞」の「燿」と「地紐」の「燿」とが、二聯目でも「聯光」「炳慶」とうたわれている。

⑦炳 明らかである。『周易』革・九五象辞に「大人虎變、其文炳也」《其文炳者、義取文章炳著也》。

⑧機 北斗七星第三星の名称で、天空の提喻か。注④所掲の『史記』天官書の文が『藝文類聚』卷一所引「春秋運斗樞」には「北斗七星、第一天樞、第二旋、第三機」とあり、「璇」を「機」に作る。ただ、北斗七星の第一「天樞」がすでに本章初句で皇帝を比喩しており、四句目で帝と後の「炳慶」が北斗七星の第三「機」に「翔」けるとするのは、「機」が韻字であり提喻であるとしても、重複の感を免れがたい。「機」は、『周易』繫辞上伝に君子の言行を含蓄する例があり、これを取れば「翔機」とは、枢要な言行をはせる意となるが、それでは対語「騰世」の語構成とつりあいを欠く。どちらを取るか、あるいは第三の解があるかは、未詳。なお『周易』繫辞上伝は「子曰、君子居其室、出其言善、則千里之外應之。……言出乎身、加乎民、行發乎邇、見乎遠。言行、君子之樞

機（樞機、制動之主）《樞、謂戶樞。機、謂弩牙。言戶樞之轉、或明或闇。弩牙之發、或中或否。猶言行之動、從身而發、以及於物、或是或非也》。

⑨中寓 中央の空間。天下。『楚辭』王褒「九懷・陶壅」に「觀中宇兮浩浩（大哉天下、難遍照也）、紛翼翼兮上躋。」「寓」は「宇」の古字。

⑩上微 上にある「太微」（大微）か。「太微」は、天帝の南宮で、日月五星の宮廷でもある。『楚辭』遠遊に「召豐隆使先導兮、問大微之所居（博訪天庭在何處也。大、一作太）。」また『史記』天官書に「南宮朱鳥（正義、柳八星爲朱鳥喙、天之廚宰、主尚食、和滋味）、權・衡（集解、孟康曰、軒轅爲權、太微爲衡。索隱案、文耀鉤云、南宮赤帝、其精爲朱鳥。孟康曰「軒轅爲權、太微爲衡」也。正義、權四星在軒轅尾西、主烽火、備警急。占以明爲安靜。不明、則警急。動搖芒角亦如之。衡、太微之庭也）。衡、太微、三光之廷（索隱、宋均曰、太微、天帝南宮也。三光、日月五星也）。

⑪玉頌 「玉」は、「頌」の美称か。「玉」「金」の対は「玉磬」「金石」の樂器を表すことが多いが、この聯では対語が「金

「簫」で、「金」が「簫」の美称と考えられるため。

皇帝還東壁^①受福酒^②奏嘉時之樂舞詞^③ 皇帝東壁に還り福酒を受くるとき嘉時の樂舞を奏する詞

禮薦^④洽^{あまね} 福時昌^{さか}

皇聖^⑤膺^⑥嘉祐^⑦ 帝業^⑧凝^あ休祥^⑨

居極^⑩乘景運^⑪ 宅德瑞中王^⑫ 極みに居りて景運に乘じ 德に宅りて中王に瑞あり

澄明^⑬臨四表^⑭ 精華^⑮延八鄉^⑯ 澄明四表に臨み 精華八郷に延ぶ

洞海^⑰周聲惠^⑱ 徹^{あまね}寓麗乾光^⑲ 海を洞じて聲惠周く 寓を徹して乾光麗し

靈慶^⑳纏^{まつ}世社^㉑ 鴻烈^{とこし}永無疆^{かぎ} 靈慶世社に纏わり 鴻烈永えに疆り無し

皇帝が東壁に還り福酒を受ける時に嘉き時の樂舞を演奏する詞

礼にかなう捧げ物はあまねく、福の時はさかん。

大いなる聖人が嘉きたすけに出会い、皇帝としてのみわざがさいわいに結晶する。

極みに居て光あるめぐりに乗じ、德に住まい中央の王に瑞祥がもたらされる。

澄明さが四方の果てまで行きわたり、精華は八方まで届く。

海にも達して徳声の恵みはあまねく、空間を貫いて天の光はうるわしい。

靈妙なるよろこびが世々の幸い（お世継ぎ）に纏わり、大いなる功業は永遠に限りない。

○押韻 「昌・祥・王・郷・疆」は下平10「陽」、「光」は下平11「唐」。

①東壁 廟の中にある東の壁。廟に入った皇帝が、御神酒を

嘉肴。」

献ずる前に至る所。『宋書』樂志一に「孝建二年（四五五）九

⑤皇聖 大いなる聖人。『三國志』張旌伝・青龍四年辛亥詔書

月……衆議並同（左僕射建平王）宏「……皇帝入廟門、奏永

に「張掖郡玄川溢涌、激波奮蕩、寶石負圖、狀像靈龜、……

至。皇帝詣東壁、奏登哥。初獻、奏凱容・宣烈之舞。終獻、

太史令高堂隆上言「古皇聖帝所未嘗蒙、實有魏之禎命、東序

奏永安。送神奏肆夏。』詔可。孝建二年十月辛未、有司又奏

之世寶。』

『郊廟舞樂、皇帝親奉、初登壇及入廟詣東壁、並奏登哥、不

⑥膺 当たる。『尚書』武成に「我文考文王、克成厥勳、誕膺天

及三公行事。』

命、以撫方夏」、偽孔伝に「言我文德之父、能成其王功、大當

②福酒 祭祀で皇帝が飲む酒。『宋書』礼志一に「南郊、皇帝

天命、以撫綏四方中夏。』

散齋七日、致齋三日。……次詣太祖配天神座前、執爵跪奠、

⑦嘉祐 よき助け。『漢書』朱博伝に「後二歳餘、朱博爲大司

如皇天之禮。南面北向、一拜伏。太祝令各酌福酒、合置一爵

空、奏言「……今更爲大司空、與丞相同位、未獲嘉祐。……

中、跪進皇帝、再拜伏。飲福酒訖、博士・太常引帝從東階下、

今中二千石未更御史大夫而爲丞相、權輕、非所以重國政也。

還南階。』

臣愚以爲大司空官可罷、復置御史大夫、遵奉舊制。臣願盡力、

③嘉時 よき時。『漢書』外戚伝・孝成班婕妤好伝・班婕妤「自悼

以御史大夫爲百僚率。』哀帝（前六年〜前一年在位）從之。』

賦」に「揚光烈之翥赫兮、奉隆寵於增成。既過幸於非位兮、

⑧帝業 皇帝としてのみわざ。『史記』李斯列伝・李斯「逐客

竊庶幾乎嘉時（師古曰、嘉、善也）。』

書」に「昭王得范雎、廢穰侯、逐華陽、彊公室、杜私門、蠶

④禮薦 礼にのつとった捧げ物。『宋書』樂志四・何承天「鼓

食諸侯、使秦成帝業。』

吹簫歌十五篇・將進酒篇」に「將進酒、慶三朝。備繁禮、薦

⑨休祥 よき幸い。即位を指す。『尚書』泰誓中に「朕夢協朕

卜、襲于休祥、戎商必克（言我夢與卜、俱合於美善、以兵誅紂、必克之占。）

⑩居極 皇帝位。『宋書』孔季恭伝に「高祖後討孫恩、時桓玄篡形已著、欲於山陰建義討之。季恭以爲山陰去京邑路遠、且玄未居極位、不如待其篡逆事彰、豐成惡稔。」

⑪景運 よき時のめぐり。『宋書』武帝本紀下に「永初元年（四二〇）夏六月丁卯、設壇於南郊、卽皇帝位、柴燎告天。策曰『皇帝臣裕、敢用玄牡、昭告皇天后帝。晉帝以下世告終、歷數有歸、欽若景運、以命于裕。』」

⑫瑞中王 「中王」に瑞祥をもたらず。「中王」は用例が見当たらず、中央の王か。動詞の「瑞」は、『文選』卷一一・王延寿「魯靈光殿賦」の「亂」に「神之營之、瑞我漢室、永不朽兮。」

⑬澄明 明るく澄みわたる。『宋書』謝晦伝に、「反逆者を滅ばして『國典澄明』となつた、という。『尚書符荊州曰』……徐羨之・傅亮・謝晦、安忍鳩殺、獲罪於天、……羨之父子・亮及晦息、電斷之初、並卽大憲。復王室之讎、據義夫之憤、國典澄明、人神感悅。」

⑭四表 四方の果て。『尚書』堯典に「允恭克讓、光被四表、格于上下」、偽孔伝に「又信恭能讓、故其名聞、充溢四外、至于天地」、疏に「四外者、以其無限、自內言之。言其至於遠處、正謂四方之外畔者、當如爾雅所謂四海四荒之地也。」

⑮精華 精髓。『楚辭』劉向「九歎・惜賢」に「游蘭皋與蕙林兮、睨玉石之寥嶠。揚精華以眩耀兮、芳鬱渥而純美。」「宋書」樂志二・「太祝裸地奏登歌樂詞二章之二」に「精華孚鬯、誠監昭通。」

⑯八郷 『漢書』顏師古注に「八郷、八方之神」とあるが、ここでは前句の「四表」、後句の「洞海」に挟まれているので、「八方のはて」と解した。『宋書』樂志二・謝莊「宋明堂歌・歌黑帝辭」の「福九域祚八郷」も「天下にあまねく福をもたらず」と訳されている（『宋書』樂志二・二注附稿（一）一四三頁参照）。師古注は『漢書』礼樂志・郊祀歌十九章・練時日一の「尊桂酒、賓八郷」に付されたもの。

⑰洞 至る。達す。『文選』卷一・班固「西都賦」に「爾乃正殿崔巍、層構厥高、臨乎未央、經駘盪而出駢娑、洞衿詣與天梁」、李善注に「關中記曰、建章宮有駢娑・駘盪・衿詣・承光四殿。」

……天梁、亦官名也。」

⑱聲惠 声の恵み。『漢書』揚雄伝・揚雄「校獵賦」に「仁聲惠於北狄、武義動於南鄰。是以旃裘之王、胡貉之長、移珍來享、抗手稱臣。」

⑲徹寓 「徹」は届く、貫く。「寓」は「宇」の古字。「徹寓(宇)」の用例は見当たらないが、「徹天」なら『後漢書』皇后紀上の収める永寧二年(一二二)の詔に「自謂感徹天地、當蒙福祚。」また『三国志』先主劉備伝の収める建安二十五年度の許靖・諸葛亮らの上言に「襄陽男子張嘉・王休獻玉璽、璽潛漢水、伏於淵泉、暉景燭耀、靈光徹天。」

⑳乾光 天のひかり。『晋書』郭璞伝・郭璞「客傲」に「乃者地維中絶、乾光墜采、皇運暫迴、廓祚淮海。」

㉑靈慶 靈妙なるよろこび。『後漢書』李賢注には「靈慶、謂符讖也」とあるが、ここでは対偶の「鴻烈」に合わせた。李賢注は『後漢書』光武帝紀賛の「靈慶既啟、人謀咸贊」に付されたもの。

㉒世社 世々の幸い。立派な世継ぎを含意しよう。『後漢書』

馮異伝に「永初六年(一〇七)、安帝下詔曰」……昔我光武受命中興、恢弘聖緒、……光耀萬世、社祚流行、垂於罔極。」

㉓鴻烈 大いなる功業。『漢書』揚雄伝下・揚雄「解難」に「典謨之篇、雅頌之聲、不溫純深潤、則不足以揚鴻烈而章緝熙」、顔師古注に「造化鴻大也。烈、業也。緝熙、光明也。」また『宋書』樂志二・張華「食舉東西箱樂詩十一章之五」にも「世資聖哲、三后在天、啓鴻烈。啓鴻烈、隆王基。」

㉔無疆 かぎりない。『周易』坤に「彖曰、至哉坤元、萬物資生。乃順承天、坤厚載物。德合无疆、含弘光大、品物咸亨。牝馬地類、行地无疆。……應地无疆」、王弼注に「地之所以得无疆者、以卑順行之故也。乾以龍御天、坤以馬行地」、疏に「凡言无疆者其有二義、一是廣傳无疆、二是長久无疆也。」また『尚書』太甲中に「皇天眷佑有商、俾嗣王克終厥德、實萬世無疆之休。」

(佐竹保子)

送神奏昭夏之樂舞^①歌詞二章

神を送るに昭夏の樂舞を奏する歌詞二章

大孝^② 盛禮^③ 豐^③

大孝 備わり 盛禮 豊かなり

神安留^④ 嘉樂^⑤ 充^⑤

神 安らかに留まり 嘉樂 充つ

旋駕^⑥ 汎青穹^⑦

旋駕して聳え 青穹に汎たり

延八虛^⑧ 闢四空^⑨

八虛に延べ 四空に闢く

藹流景^⑩ 肅行風^⑪

藹たり 流景 肅たり 行風

神を送るさいに昭夏の樂舞を演奏する その歌詞二章

大いなる孝がそなわっており、盛大な礼が多くある。

神はゆったりとここに留まり、すばらしい音楽が充ち満ちている。

神は車をもどして高くあがり、青空に浮かんで行く。

八方の果てまで光が及び、四方の空が明るく開けた。

盛んに日の光が流れ、おごそかに風が吹き行く。

○押韻 「豊・充・穹・空・風」は上平一「東」。

①昭夏之樂舞 「昭夏」は樂章の名。九夏の一。『周礼』春官・

鍾師に「鍾師掌金奏。凡樂事、以鍾鼓奏九夏。王夏・肆夏・

昭夏・納夏・章夏・齊夏・族夏・祫夏・醵夏（以鍾鼓者、先

擊鍾次擊鼓、以奏九夏。夏、大也。……牲出入、奏昭夏。」

『周礼』春官・大司樂に「王出入、則令奏王夏。尸出入、則令

奏肆夏。牲出入、則令奏昭夏。」『漢書』礼樂志に「高祖六年

又作昭容樂・禮容樂。昭容者、猶古之昭夏也、主出武德舞。殷淡「迎神奏韶夏樂歌詞」とあることから、神を迎える際にも「韶（昭）夏樂」を演奏していることが知られる。『南齊書』樂志では、南北郊等の祭祀では「送神、奏昭夏之樂」とあるが、宗廟祭祀では「送神、奏肆夏樂」という。また『隋書音義』卷六十五を参照。

②大孝備 『漢書』礼楽志に「安世房中歌十七章、其詩曰、大孝備矣、休德昭清。高張四縣、樂充宮庭。」

③盛禮豐 礼を尽くして盛んにもてなす。『三国志』呉書・呉主伝に「建安二十五年」十一月、策命權曰「蓋聖王之法、以德設爵、以功制祿。勞大者祿厚、德盛者禮豐。故叔旦有夾輔之勳、太公有鷹揚之功、並啓土宇、并受備物、所以表章元功、殊異賢哲也……」。

④神安留 「郊祀歌十九章」練時日一（『漢書』礼楽志）に「練時日、侯有望。熯聲蕭、延四方。九重開、靈之序。……靈安留、吟青黃。徧觀此、眺瑤堂。」

⑤嘉樂充 鐘磬の樂が庭いっぱいになり鳴り広がる。『左伝』定公十年に「孔丘謂梁丘據曰、齊魯之故、吾子何不聞焉。事既成

矣、而又享之、是勤執事也。且犧象不出門、嘉樂不野合（嘉樂、鍾磬也）。」「安世房中歌」に「高張四縣、樂充宮庭。」注②を参照。

⑥旋駕輦 神が天に帰っていくことをいう。『楚辭』九歌・雲中君に「龍駕兮帝服、聊翱遊兮周章。」

⑦汎青穹 天空に浮かぶ。『安世房中歌』（『漢書』礼楽志）に「七始華始、肅倡和聲。……忽乘青玄、熙事備成（師古曰、言還神禮畢、忽登青天而去。福熙之事皆備成也）。」「顏延之「宋南郊雅樂登歌」天地饗神歌に「裸既始、獻又終。煙薌鬯、報清穹。」「宋書』樂志二「詠注稿（一）」一一六頁。

⑧延八虛 直前の「皇帝還東壁受福酒奏嘉時之樂舞詞」に「澄明臨四表、精華延八鄉。洞海周聲惠、徹宇麗乾光。」

⑨闢四空 『尚書』舜典に「月正元日、舜格于文祖。詢于四岳、闢四門（詢、謀也。謀政治於四岳。開闢四方之門）、明四目、達四聰。」謝莊「宋明堂歌」送神歌辭に「蘊禮容、餘樂度。靈方留、景欲暮。開九重、肅五達。鳳參差、龍已秣。雲旣動、河旣梁。萬里照、四空香。神之車、歸清都。」

⑩藹流景 「藹」は盛んなさま。あるいはうす暗いさまか。『流

景」はきらめく光。張衡「西京賦」に建章宮内を描写して「流景内照、引曜日月」薛綜注、言皆朱晝華采、流引日月之光、曜於宇内。」「三國志」魏書・方技伝・管輅注引「輅別伝」に「況地者協辰巳之位、鳥者棲太陽之精、此乃騰黑之明象、白日之流景、如書佐・鈴下、各以微軀化爲地・鳥、不亦過乎。」

⑪肅行風 謝莊「宋明堂歌」迎神歌詩に「地紐謐、乾樞回。……聖祖降、五靈集。構瑤戩、聳珠簾。漢拂幌、月棲檐。舞綴暢、鐘石融。駐飛景、鬱行風。懋案盛、潔牲脔。百禮肅、羣司虔。皇德遠、大孝昌。貫九幽、洞三光。神之安、解玉鑾。景福至、萬宇歡。」「宋書」樂志二詠注稿（一）一一二二頁。

昭融教 ^①	緝風度 ^②	融教を昭らかにし	風度を緝む ^{わさ}
戀皇靈 ^③	結深慕 ^④	皇靈を戀い	深慕を結ぶ
解羽縣 ^⑤	輟華樹 ^⑥	羽縣を解き	華樹を輟む ^や
背璿除 ^⑦	端玉輅 ^⑧	璿除に背き ^{そむ}	玉輅に端く ^つ
流汪濊 ^⑨	慶國歩 ^⑩	汪濊を流し	國歩を慶す

天子の長き教化はかがやき、举措は端正である。

祖先の靈と離れがたく、深い思いを強くする。

花や樹の飾りがついた金石の演奏が終わった。

玉のきざしを後にして、玉の車に乗る。

豊かな恩沢を流し、国運をことほぐ。

○押韻 「度・慕・輅・歩」は去声11「暮」、「樹」は去声10「遇」。

①昭融教 「昭」は明らかである。「融」は長くとおる。『毛詩』

大雅・既醉に「昭明有融、高明令終（融、長。朗、明也。始於饗燕、終於享祀。箋云、有、又。令、善也。天既其女以光明之道、又使之長有高明之譽、而以善名終、是其長也）。」

②緇風度 「緇」はととのえる。「風度」は立ち居振る舞い。

『後漢書』寶融伝の論に「嘗獨詳味此子之風度、雖經國之術無足多談、而進退之禮良可言矣。」

③皇靈 天帝。ここでは皇太后ら祖先神をいうか。謝莊「宋

明堂歌」黃帝辭に「履建宅中寓、司繩御四方。……帝運緇萬有、皇靈澄國歩。」『宋書』樂志二 詠注稿（一）「一三七頁。

④結深慕 思慕の念をこらす。

⑤解羽縣 輟華樹 「羽縣」は鳥の羽の飾りが懸台について

る宮懸。傅玄「晋四箱樂歌」食舉東西箱歌に「樹羽設業、笙鏞以間。琴瑟齊列、亦有篋塤。其八。」「宋書』樂志二 詠注

稿（三）「一〇六頁。

「華樹」は樂器を飾る華や樹木。「安世房中歌」其一（漢書）
礼樂志に「芬樹羽林、雲景杳冥（師古曰、言所樹羽葆、其

盛若林、芬然衆多、仰視高遠、如雲日之杳冥也）。金支秀華、

庶旄翠旌（張晏曰、金支、百二十支。秀華、中主有華黼也。

旌、鍾之旌也。文穎曰、析羽爲旌、翠羽爲之也。臣瓚曰、樂

上衆飾、有流遡羽葆、以黃金爲支、其首數散、若草木之秀華也。師古曰、金支秀華、瓚說是也。庶、衆也。庶旄翠旌、謂

析五采羽、注翠旄之首而爲旌耳。』

⑥瓚除 美しい玉でできた階段。殷淡「迎神奏韶夏樂歌詞」に

「瓚除肅炤、鈺壁彤輝。」本詠注稿一四四頁。

⑦端玉輅 「端」はいとぐち。動作を始めることをいうか。「玉

輅」は天子の車。玉で飾つてある。『淮南子』俶真訓に「是故目觀玉輅琬象之狀、耳聽白雪清角之聲、不能以亂其神（玉輅、王者所乘、有琬琰象牙之飾）。」班固「東都賦」に「於是

發鯨魚、鏗華鐘、登玉輅、乘時龍。」

⑧流汪濊 「汪濊」は豊富なさま。双声の語。「郊祀歌十九章」

赤蛟（漢書）礼樂志に「延壽命、永未央。杳冥冥、塞六合、

澤汪濊、輯萬國（師古曰、塞、滿也。輯、和也。天地四方謂之六合。汪濊、言饒多也。濊音於廢反、又音烏外反。輯與集

同。王韶之「宋四箱樂歌」食舉歌十章其六に「皇猷緝、咸熙泰。……天覆地載、流澤汪濊。聲教布護、德光大。」本記
注稿一〇六頁。

哀、國步斯頻（歩、行。頻、急也。箋云、頻猶比也。哀哉、國家之政行、此禍害比比然。」謝莊「宋明堂歌」黃帝辭に「帝運緝萬有、皇靈澄國歩。」注③を参照。

⑨慶國歩 「國歩」は国の命運。『毛詩』大雅・桑柔に「於乎有

皇帝詣便殿奏休成之樂歌詞^① 皇帝 便殿に詣るに休成の樂を奏する歌詞

醴醴具登^② 嘉俎咸薦^③ 醴醴 具さに登められ 嘉俎 咸な薦めらる

饗治誠陳^④ 禮周樂徧^⑤ 饗は治ねく誠は陳べられ 禮は周く樂は徧し

祝詞罷裸^⑥ 序容輟縣^⑦ 祝詞 裸を罷え 序容 縣を輟む

蹕動端庭^⑧ 鑾回嚴殿^⑨ 蹕は端庭に動き 鑾は嚴殿に回る

神儀駐景^⑩ 華漢亭虛^⑪ 神儀 景を駐め 華漢 虛に亭む

八靈案衛^⑫ 三祇解途^⑬ 八靈 衛を案し 三祇 途に解く

翠蓋耀澄^⑭ 畢弈疑震^⑮ 翠蓋 澄に耀やき 畢弈 震に疑る

玉鑣息節^⑯ 金輅懷音^⑰ 玉鑣 節を息め 金輅 音を懷く

式誠遠孝^⑱ 底心肅感^⑲ 誠を式わし孝を遠くし 心を底して感を肅にす

追憑皇鑒^⑳ 思承淵範^㉑ 皇鑒に憑らんと追い 淵範を承けんと思う

神錫懋祉^㉒ 四緯昭明^㉓ 神は懋祉を錫い 四緯 昭明なり

仰福帝徽^㉔ 俯齊庶生^㉕ 仰いでは帝徽を福とし 俯しては庶生を齊しくす

皇帝が便殿へ行くさいに休成の楽を演奏する　その歌詞

御酒がことごとく進められ、供物もすべて献上された。

神へのもてなしがゆきとどいて誠がのべ広げられ、儀礼も音楽もあまなくゆきわたる。

祈りのことばを述べて裸を終え、整った儀容で金石の演奏を終えた。

先払いが整然とした宮庭を進み、天子の馬車は厳然とした便殿にもどり行く。

神々しい姿は天上の光をとどめ、銀河は虚空にとどまる。

八方の神々は護衛をととのえ、三柱の神は帰りの道で心を解きはなつ。

みどりの車蓋はすみきった空に映え、とばりはおごそかに静止している。

玉のくつわの馬は歩みをとめ、黄金の車にはよきおことばがのこっている。

誠をこめてはるかに孝を尽くし、心を致して気持ちをはきしめる。

すぐれた御心に従おうと思いを馳せ、深奥な法を受け継ぐとする。

神は大いなるさいわいをたまわり、四方の星はかがやく。

上は天帝のすばらしい徳をさいわいとし、下は民衆をととのえ治める。

○押韻 「薦・徧・縣・殿」は去声32「霰」。「虚」は上平9「魚」、「途」は上平11「模」。「震」は上平17「眞」、「音」は下平21「侵」。「感」は上声48「感」、「範」は上声55「范」。「明・生」は下平12「庚」。

①詣便殿奏休成之樂 「便殿」は正殿そばの天子が休息する場所。『漢書』武帝紀に「（建元）六年春二月乙未、遼東高廟災。」

夏四月壬子、高園便殿火（師古曰、凡言便殿・便室・便坐者、皆非正大之處、所以就便安也。園者、於陵上作之、既有正寢以象平生正殿、又立便殿爲休息閑宴之處耳。）。「休成」は神への饗応が済んだ時に奏する樂の名。『漢書』礼樂志に「高祖時、叔孫通因秦樂人制宗廟樂。……登歌再終、下奏休成之樂、美神明既饗也。皇帝就酒東廂、坐定、奏永安之樂、美禮已成也。」

②醴醴具登 「醴」は酒を漉す。「醴」は祭祀用のあまざけ。

『毛詩』周頌・豊年に「爲酒爲醴、烝畀祖妣。以洽百禮、降福孔皆（皆、徧也。箋云、烝、進。畀、予也。）」「登」は進める。

③嘉俎 祭祀の供え物としての食事。

④誠陳 誠実な心を示す。董仲舒「詣丞相公孫弘記室書」（『古文苑』卷一〇）に「近而不言爲諂、遠而不言爲怨。故輒披心陳誠、仲舒叩頭死罪死罪。」

⑤禮周樂備 『後漢書』礼儀志上に「孝子事親盡禮、敬愛之心也。周徧如禮。最後親陵、遣計吏、賜之帶佩。」

⑥裸 祭祀で酒を地に注いで神を降臨させること。

⑦序容 秩序だった儀容をいうか。

⑧蹕 天子の前を払って行き、通行人を止める。『礼記』曾子問に「貍祭於祖、則祝迎四廟之主、主出廟入廟、必蹕（蹕、止行也）。」

⑨鑾 天子の馬車につけた鈴。天子の車をいう。『後漢書』荀彧伝に荀彧が曹操に勧進して「今鑾駕旋軫、東京榛蕪、義士有存本之思、兆人懷感舊之哀。」

⑩神儀駐景 「神儀」は表情や容姿。「駐景」は日の光をとどめる。太陽の余光があることをいうか。ここからの四句は神々が帰りに行くさまをのべる。

⑪華漢亭虛 「華漢」は天の河。殷淡「迎神奏韶夏樂歌詞」に「淳波澄宿、華漢浮天。」本訳注稿一四五頁。「亭」は「停」に通じるか。

⑫八靈案衛 「八靈」は八方の神。『楚辭』九歎・遠逝に「合五嶽與八靈兮、訊九軀與六神（八靈、八方之神也。）」「案衛」は護衛を確認することか。

⑬三祗解途 「三祗」は、章皇太后ら三皇太后を指すと解した。女性を天地の地に配して言ったものか。「解途」は帰途で心を解いたと解釈したが、あるいは神々が天に帰着して駕を

風に「誰將西歸、懷之好音（懷、歸也）。」

⑱式誠遠孝 「式」はあらわす。謝莊「宋明堂歌」登歌に「肆

夏式敬、升歌發德。」「宋書」樂志二詠注稿（一）一二七頁。

「遠孝」は三皇太后の靈に孝をささげつくすことをいう。中

華書局本は「遠」を「達」に作る。

⑲底心 陸機「演連珠」二に「明主程才以效業、貞臣底力而辭

豐（善）曰、說文曰、程、品也。廣雅曰、效、驗也。王肅尚書

注曰、底、致也。」

⑳皇鑒 帝王のすぐれた見識。ここは神々の御心を指す。潘

岳「西征賦」に「皇鑒揆余之忠誠、俄命余以末班。」

㉑思承淵範 『漢書』杜鄴伝に「願陛下加致精誠、思承始初、

事稽諸古、以厭下心、則黎庶羣生無不說喜、上帝百神收還威

怒、禎祥福祿何嫌不報。」「淵範」は永遠に模範となるもの。

『宋書』礼志一に載せる殷茂の言に「雅・頌之音、流詠千載、

聖賢之淵範、哲王所同風。」

㉒神錫懋社 「懋」は「茂」に通じる。『晉書』王導伝に「咸康

五年薨、時年六十四。……冊曰「蓋高位以酬明德、厚爵以答

懋勳……。」

㉓四緯昭明 「緯」は星をいう。「五緯」は木火土金水の五星

で、「四緯」はそのうちの四星をいうか。『周礼』春官・大宗

伯に「以禮祀昊天上帝、以實柴祀日月星辰（星謂五緯、辰

謂日月所會十二）《星謂五緯者、五緯即五星。東方歲星、南

方熒惑、西方太白、北方辰星、中央鎮星。言緯者、二十八宿

隨天左轉爲經、五星左旋爲緯。」「昭」「明」ともにあきらか。

『尚書』堯典に「九族既睦、平章百姓。百姓昭明、協和萬邦

（昭亦明也）。」

㉔帝徽 天帝の徳をいうか。

㉕齊庶生 「庶生」は庶民。『尚書』呂刑に「天齊于民、俾我。

一日非終惟終、在人（天整齊於下民、使我爲之。一日所行、

非爲天所終、惟爲天所終、在人所行）。」

（釜谷武志）

（本稿は日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究（B）「漢魏六朝期楽府詩の総合的研究」（一八H〇〇六五〇）による研究成果の一部である。）

（かのうゆう・武庫川女子大学教授）

（さとうたけし・広島大学教授）

（さたけやすこ・大東文化大学特任教授）

（かまたにたけし・神戸大学名誉教授）

（やながわじゅんこ・県立広島大学教授）

（はやしかな・京都府立大学教授）